



TITLE:

李義山七律集釋稿(五)

AUTHOR(S):

李義山七律注釋班

CITATION:

李義山七律注釋班. 李義山七律集釋稿(五). 東方學報 1986, 58: 647-713

ISSUE DATE:

1986-03-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/66647>

RIGHT:

李義山七律集釋稿(五)

李義山七律注釋班

*掲載詩篇目

藥轉	92	………	六九頁
可歎	207	………	六五頁
當句有對	390	………	六三頁
正月崇讓宅	483	………	六七頁
天平公座中呈令狐令公時蔡京			
在座京曾爲僧徒故有第五句	509	………	六五頁
和人題眞娘墓	530	………	六五頁
無題近知名阿侯《以下附載》	90	………	六〇頁
無題照梁初有情	120	………	六四頁
無題二首之一 八歲偷照鏡	124	………	六九頁
無題二首之二 幽人不倦賞	125	………	七〇頁
無題紫府仙人	139	………	七〇八頁

*唐言統載が「情詞」に分類する七律から六首を載せ、無題詩五首

李義山七律集釋稿(五)

を附載する。

* 席本李商隱詩集を底本とし、とりあげまたは引用する義山の詩には底本の排列による作品番號を記す。「李義山詩各本篇目對照表」(本誌五〇冊) 参照。

* 義山の文の引用は樊南文集詳註および樊南文集補編により、「文集」および「補編」と略稱する。

* 舊注をふまえるばあいも原則として注者の名を明示しない。諸本の詩釋については、釋者の名をあげ、原則として全文を載せる。

* 詩釋のうち、朱鶴齡の項の「補注」は下記文獻(1)順治刊本各卷末附載。何焯および紀昀の項の「評本」は(2)沈氏輯評本をさす。

* 主要文獻一覽

一 無注本

- (1) 李商隱詩集三卷 唐詩百名家全集本(席本)
- (2) 李商隱詩集三卷 景印錢謙益寫校本(錢本)
- (3) 李義山集三卷 唐人八家詩本(毛本)
- (4) 全唐詩(三卷)

- (5) 唐李義山詩集六卷 四部叢刊本
- (6) 唐音統籤(十卷)
- (7) 唐詩(十一卷) 藝文印書館景印本(稿本)
- (8) 李商隱詩集十卷補遺一卷 高麗刊本(懷德堂文庫藏)
- (9) 唐詩類苑二百卷

二 舊注

- (10) 玉溪生詩箋 錢龍惕撰(靜嘉堂文庫藏)
- (11) 李義山詩集三卷 朱鶴齡箋注(順治十七年序刊本)
- (12) 李義山詩集三卷 朱鶴齡箋注 沈厚煥輯評
- (13) 西崑發微三卷 吳喬撰
- (14) 義門讀書記李義山詩二卷 何焯撰
- (15) 李義山詩疏二卷 徐德泓・陸鳴皋撰(徐陸合解)(懷德堂文庫藏)

四

- (23) 註唐詩鼓吹十卷 郝天挺撰 廣文書局景印元刊本
- (24) 唐詩鼓吹註解大全八卷 廖文炳撰(內閣文庫藏)
- (25) 唐詩鼓吹十卷 元好問輯 郝天挺注廖文炳解 王清臣・陸貽典參解
- (26) 唐才子詩甲集七言律八卷 金聖嘆撰
- (27) 才調集十卷 韋穀輯 馮舒・馮班評(二馮評閱本)
- (28) 才調集補註十卷 殷元勳箋註 宋邦綏補註
- (29) 唐詩貫珠六十卷 胡以梅撰

近代注釋

- (30) 李義山詩講義 森槐南
- (31) 李義山の無題詩 鈴木虎雄(中國文學報六冊)
- (32) 李商隱 高橋和巳(中國詩人選集一五)
- (33) 李商隱表現考・斷章——艷詩を中心として—— 山之内正彦(東洋文化研究所紀要四八冊)

- (34) The Poetry of Li Shang-yin 劉若愚

- (16) 李義山詩集十六卷 姚培謙箋
- (17) 玉溪生詩意八卷 屈復撰
- (18) 重訂李義山詩集箋注三卷集外詩箋注一卷 朱鶴齡元本 程夢星刪補

五

- (35) 李商隱詩選 安徽師範大學中文系古代文學教研組
- (36) 李商隱詩選 陳永正

その他

- (37) 李商隱詩索引 早稻田大學中國文學會李商隱詩索引編集班
- (38) 李義山文索引 京都大學人文科學研究所付屬東洋學文獻センター索引叢刊第一

三 唐詩選本注釋

藥轉 92

藥轉

鬱金堂北畫樓東 鬱金堂の北 畫樓の東
換骨神方上藥通 換骨の神方 上藥通ず
露氣暗連青桂苑 露氣暗に連る 青桂苑

4 風聲偏獵紫蘭叢 風聲偏に獵 紫蘭叢

長籌未必輸孫皓 長籌未だ必ずしも孫皓に輸せず

香棗何勞問石崇 香棗何ぞ石崇に問うを勞せん

憶事懷人兼得句 事を憶い人を懷い 兼ねて句を得

8 翠衾歸臥繡簾中 翠衾 繡簾の中に歸臥せん

校

0 唐詩類苑一五四 (道部藥轉類 (藥轉類は本詩のみ))

轉 高麗本「軒」

韻

上平一東 (東・通・叢・崇・中) 獨用 (韻目は廣韻による)

*

朱彝尊

題與詩。俱不解。

何焯

〔讀書記〕

4 宋玉風賦。獵蕙草。

〔評本〕

5 此自是登廁詩。

李義山七律集釋稿 (五)

徐德泓

此詩大意。爲被讒而發。有脫然無累意。故因換骨句。而以藥轉名題也。首二句。自高其地位身分。頸聯。喻小人讒搆君子也。腰聯。喻穢惡不能汚己。故兩用登廁事。結有從容自在。悠然不較之意。

姚培謙

玩詩意。必有以女俠如紅線之類隱青衣中。爲廁婢者。故於其去後思之處。金堂畫樓之地。而獨得移形換骨之方。桂苑蘭叢。往來風露。定從淪謫中來也。長籌香棗。問愈隱晦。愈不可測。因憶向者乍見其人。便覺有異。每於翠衾歸臥時。賦詩憶念。然紅粉中別具青眼者。世有幾人。

屈復

堂北樓東。便有換骨神藥。露連青桂。風獵蘭叢。聲可聞。氣可通。而人不可見也。五六。往事。七。緊承五六。翠衾歸臥。無聊之思也。○未必輸。言懺悔之誠。何勞問。往來已久也。第七句已說明。

程夢星

此篇爲媒姬之辭無疑。命題藥轉。向來皆無明注。嘗聞於朱竹垞先生。以爲字出道書。如廁之義也。今竹垞往矣。無從質問。而道藏浩衍。未易檢閱。惟以詩意考之。誠爲夜起如廁。有所悵望而作。起二句。謂其人之所居深邃。非有飛仙之術不易通也。三四。謂夜暮之時。接聯之地。亦未嘗不可以往。無如風聲獵獵。未免恐人。五六。則用如廁事。或其人如廁上紫姑之身世。而義山託意於古之祝詞。以爲其夫已出。其姑不在。可以出矣。使執長籌。未必輸孫

皓之役金像。使司香案。不復問石崇之置侍兒矣。七八。言其事已往。其人無聞。徒憶之懷之。付諸吟咏。而彼則繡簾深垂。翠衾歸臥。曾知此情否也。

紀昀

〔詩說下〕何以不取藥轉也。曰。題與詩。俱不可解。即以詞格論之。亦不佳（評本「題與詩。俱不可解。不必強爲之詞」）。

馮浩

此篇舊人未解。而妄談者託之竹垞先生。以爲藥轉乃如廁之義。本道書。午橋采以入箋。余嘗叩之竹垞文孫稼翁。力辨其誣也。頗似詠閨人之私產者。次句。特用換骨。謂飲藥墮之。三四。謂棄之後苑。五六。借以對襯。結則指其人歸臥養病也。穢瀆筆墨。乃至此哉。

張采田

〔辨正〕此篇本難強解。竹垞謂藥轉是如廁之義。馮氏則謂是詠閨人私產者。余謂若云專賦婦人月事。似亦可通。此等詩題。可謂創千古所未有矣。蓋當時有此一種人。故義山聞而戲詠之。觀結語。可見其詞務極輕薄。必非暗賦所歡之人也。若此大傷忠厚之篇。皆由後人掇拾存之。遂爲千古無行口實。其亦義山一大不幸邪。因表而出之。以爲學者厲禁。以見余不敢阿好古人也。○碧城詩153云。月輪顧兔初生魄。鐵網珊瑚未有枝。又云。檢與神方教駐景。願覓生魄。謂有孕也。珊瑚未有枝。謂未產也。檢與神方。謂用藥墮胎也。與此詩相合。彼是暗詠貴主爲女冠者。則此詩其賦貴主事邪。前有

石榴詩45。寓多子色衰之歎。似亦可互證。噫。未免太傷輕薄矣。〔會箋〕題與詩。均難解。說者託之朱竹垞。謂如廁之義。馮氏又以私產解之。皆非也。余細審之。此蓋詠人之以藥墮胎者耳。當時或有此事。爲朋輩所述。義山偶爾弄筆。以博笑謔。觀結語憶事懷人兼得句。可以見矣。此等詩。本無意於流傳。後人掇存之。爲累不小。此則義山所不及料已。

*

0 〔兩般秋雨盦隨筆一藥轉條〕玉溪生藥轉詩。向無明解。江都陳當作午橋太史箋注。謂聞之朱竹垞云。是如廁之義。本道書。然亦只五六一聯用如廁故事耳。又有以爲男色者。亦苦無據。近有註義山詩者云。此係詠閨人棄私產者。次句換骨者。謂飲藥墮之。三四。謂後棄之苑。五六。借以對襯。結則指歸臥養病也。此說奇闕。然不知何本。

藥轉 (1) 〔抱朴子內篇四金丹〕夫金丹之爲物。燒之愈久。變化愈妙。〔又〕又九轉之丹者。封塗之於土釜中。糠火。先文後武。其一轉至九轉。遲速各有日數多少。以此知之耳。其轉數少。其藥力不足。故服之用日多。得仙遲也。其轉數多。藥力盛。故服之用日少。而得仙速也。又有九光丹。與九轉異法。大都相似耳。作之法。當以諸藥合火之。以轉五石。五石者。丹砂雄黃白礬曾青慈石也。〔中唐贈王仙柯詩〕手種一株松未老。爐燒九轉藥新成。轉的字金丹のごとき仙藥の燒成煉成という通常の意味に解するならば、藥轉二字に對してはいかにも落着きが悪い。

(2) 「雲笈七籤七七方藥篇麗山老母絕穀麥飯術條」第一服七日。三百日不飢。第二服四日。約二千日不飢。若人依法服之。故得神仙。若是奇人服。即得長生。…如要食。即以葵子爲末。煎湯服之。其藥即轉。下如金色。此藥之靈驗也。下如金色とは下體が黃金色になることと考えられる。「神仙金鈞經上」金鈞還丹。太一所服。而神仙白日昇天者也。…向日飲之。立爲金人(原注 日出時。向日服之。昔韓衆服之。身立金色。又經云。服之面皆黃色。此蓋得道之證。作此色也。非爲身內堅剛如金人)。(藝文版道藏三二冊)従つて、其藥即轉とは藥が忽ち體內を廻つて效目をあらわすことか。

1 同じく義山の艶詩にほぼ同じ句作りがある。「無題昨夜星辰111」昨夜星辰昨夜風。畫樓西畔桂堂東。集釋稿(一)本誌五三冊六一二頁参照。

鬱金堂 「玉臺新詠九歌辭二首之二」盧家蘭室桂爲梁。中有鬱金蘇合香。「庾信奉和示內人詩」然香鬱金屋。吹管鳳凰臺。「沈佺期古意詩」盧家少婦鬱金堂。「王維奉和楊駙馬六郎秋夜即事詩」高樓月似霜。秋夜鬱金堂。

「文昌雜錄一」唐宮中每有行幸。即以龍腦鬱金布地。至宣宗。性尚儉素。始命去之。方盛唐時。其侈麗如此。

畫樓 「李嶠晚秋喜雨詩」などに見える。上掲無題1112句の注参照。

2 服藥により人間の肉體と壽命とを全面的に變換しようという思

想は「論衡二無形」人稟氣於天。雖各受壽夭之命。立以形體。如得善道神藥。形可變化。命可加增。「文選五三嵇康養生論」(李注 嵇喜爲康傳曰。康性好服食。常采御上藥。以爲神仙稟之自然。非積學所致。至於導養得理。以盡性命。若安期彭祖之倫。可以善求而得也)故神農曰。上藥養命。中藥養性者(李注 本草曰。上藥一百二十種爲君。主養命以應天。無毒。久服不傷人。輕身益氣。不老延年。中藥一百二十種爲臣。主養性以應人。養生經曰。上藥養命。五石鍊形。六芝延年。中藥養性。合歡調怒。萱草忘憂也)。誠知性命之理。因輔養以通也。

換骨 「漢武內傳」子但愛精握固。閉氣吞液。氣化血。血化精。精化液。液化骨。行之不倦。神精充溢。一年易氣。二年易血。三年易脉。四年易穴。五年易髓。六年易筋。七年易骨。八年易髮。九年易形變化。易形變化則道成。道成則位爲仙人。「雲笈七籤一三」太清中黃真經第十章注引三光經曰。鍊髓如霜。換骨如剛。服之千日。力倍於常。後能馳千日。奔馬不及也。「陶弘景雜錄」苦茶輕身換骨。昔丹邱子黃山君服之(茶經下)。「寶林傳八慧可章」忽於夜靜。見一神人。…於第二夜。頭痛如裂。其師寶靜。欲與灸之。空中有聲。且莫且莫。此是換骨。非常痛焉。…師曰。…汝頂變矣。非昔首焉。上有五峯。垂墜玉軫。其相矣。其祥吉矣。

「杜甫寄司馬山人詩十二韻」相哀骨可換。亦遣馭清風。「方干遊張公洞寄陶校書詩」由來委曲尋仙路。不似先生換骨丹。また義山の文に一例「文集四上河東公啓二首之二」換骨惟望於一丸。剗身

止求於半偈。

神方 列仙傳上などに見える。〔碧城三首之三153〕5句の注參照、集釋稿(二)本誌五四冊四〇七頁。

上藥 〔抱朴子內篇一一仙藥〕神農四經曰。上藥令人身安命延。昇爲天神。遨遊上下。使役萬靈。體生毛羽。行廚立至。…又曰。中藥養性。下藥除病。能令毒蟲不加。猛獸不犯。惡氣不行。衆妖併辟。…皆上聖之至言。方術之實錄也。〔又五至理〕夫此皆凡藥也。猶能令已死者復生。則彼上藥也。何爲不能令生者不死乎。…夫人所以死者。諸欲所損也。老也。百病所害也。毒惡所中也。邪氣所傷也。風冷所犯也。今道引行氣。還精補腦。食飲有度。與居有節。將服藥物。思神守一。柱天禁戒。帶佩符印。傷生之徒。一切遠之。如此則通。可以免此六害。〔陶淵明祭從弟敬遠文〕晨採上藥。夕閑素琴。

〔張說道家四首之一〕金匱調上藥。寶案讀仙經。義山になお一例〔高松412〕上藥終相待。他年訪伏龜。

通 〔雲笈七籤三八說戒〕思微定志經十戒 五者不醉。常思淨行。…其中一人曰。餘戒可持。惟酒難斷。所以者何。我先服散。散者發之。日非酒不解。是故難耳。化人曰。散發所須。此乃是藥。將養四大。藥通可通。但勿過量耳。

3・4 〔李賀洛姝眞珠詩〕蘭風桂露灑幽翠。紅絃晨雲咽深思。花袍白馬不歸來。濃蛾疊柳紅唇醉。〔盧肇湖南觀雙柘枝舞賦〕帽瑩隨蛇。熠燿之蘭之露。裾飄花蝶。翩翩獵蕙之風。

露・風と桂・蘭は義山の艶詩に頻出。〔蜂156〕小苑華池爛熳通。

後門前檻思無窮。宓妃腰細纔勝露。趙后身輕欲倚風。〔和友人戲贈二首之一266〕殷勤莫使清香送。牢合金魚鎖桂叢。〔深宮280〕狂飈不惜蘿陰薄。清露偏知桂葉濃。〔代貴公主360〕芳條得意紅。飄落忽西東。分逐春風去。風迴得故叢。明朝金井露。始看憶春風。〔無題重幃深下367〕風波不信菱枝弱。月露誰教桂葉香。〔擬意586〕去夢隨川后。來風貯石郵。蘭叢銜露重。榆莢點星稠。

8 〔昨夜335〕昨夜西池涼露滿。桂花吹斷月中香。

露氣 〔禮記祭義〕使入蠶于蠶室。奉種浴于川。桑于公桑。風戾以食之〔鄭注 風戾之者。及早涼脆採之。風戾之使露氣燥。乃以食蠶。〕〔駱賓王疇昔篇〕寒光千里目。露氣二江秋。〔元稹遣春十首之一〕暗芳飄露氣。輕寒生柳風。

連 〔張籍節婦吟寄李司空師道〕妾家高樓連苑起。良人執戟明光裏。

青桂苑 〔文選一三謝莊月賦〕迺清蘭路。肅桂苑〔李注 蘭路。有蘭之路。桂苑。有桂之苑。楚辭《招魂》 皇蘭被徑。王逸曰。徑。路也。劉淵林吳都賦注曰。吳有桂林苑。〕〔江淹倡女自悲賦并序〕

漢有其錄而亡其文。泣蕙草之飄落。憐佳人之埋墓。迺爲辭焉。

九重已閉。高門自蕪。…去柏梁以掩袂。出桂苑而斂眉。〔庾信長

孫瑕夫人羅氏墓誌銘〕霜凋桂苑。風落芝田。三從闕性。五福傷年。

〔別國洞冥記一〕元光中。帝起壽靈壇。…西王母駕玄鸞。歌春歸樂調。…四面列歌棗。條如青桂〔御覽九五引。作條條青桂〕。風至。自拂堦上

遊塵。〔徐堅權歌行〕權女飾銀鉤。新妝下翠樓。霜絲青桂櫺。蘭棹紫霞舟。

4

〔文選一三宋玉風賦〕宋玉對曰。：故其清涼雄風。則飄舉升降。乘陵高城。入于深宮。邸華葉而振氣。徘徊於桂椒之間。翱翔於激水之上。將擊芙蓉之精。獵蕙草。離秦衡〔李注 獵。歷也。〕概新夷。被薨楊。：然後倘佯中庭。北上玉堂。躋于羅帷。經于洞房。：此所謂大王之雄風也。

義山詩の風と蘭〔叢〕は前掲のほかに〔風105〕捺釵盤孔雀。惱帶拂鴛鴦。羅薦誰教近。齋時鎖洞房。〔僧院牡丹504〕葉薄風纔倚。枝輕霧不勝。〔少年89〕別館覺來雲雨夢。後門歸去蕙蘭叢。

風聲 〔文選二三劉棹贈從弟詩三首之一〕亭亭山上松。瑟瑟谷中風。風聲一何盛。松枝一何勁。〔玉臺新詠七簡文帝和湘東王三韻二首春宵〕花樹含春叢。羅幃夜長空。風聲隨篠韻。月色與池同。

紫蘭叢

〔玉臺新詠八劉遵繫華應令詩〕可憐周小童。微笑摩蘭叢。

〔羅立言風偃草賦〕汎蘭叢而影分丹穎。轉蕙圃而光搖碧滋。蘭蕙はもとより美女の象徴。〔三輔黃圖三未央宮〕椒房殿。在未央宮。武帝時。後宮八區。有昭陽飛翔增成合歡蘭林披香鳳凰鸞鸞等殿。〔文選一一鮑照蕪城賦〕東都妙姬。南國麗人。蕙心執質。玉貌終屑〔李注 左九嬪武帝納皇后頌曰。如蘭之茂。好色賦曰。腰如束素。蘭蕙同類。執素兼名。文士愛奇。故變文耳〕。

〔文選三四曹植七啓〕紫蘭丹椒。施和必節。滋味既殊。遺芳射越。〔玉臺新詠四鮑令暉題書後寄行人詩〕帳中流熠燿。庭前華紫蘭。

〔馮浩註補〕〔班固漢武內傳〕西王母紫蘭宮玉女王子登。常爲王母傳使命。〔按〕則紫蘭亦可指女冠。

5

5・6 二句とも廁と女性とに關わる。〔史記四九外戚世家〕因過平陽主。：上望見。獨說衛子夫。是日武帝起更衣。子夫侍尙衣。軒中得幸〔正義〕尙。主也。於主衣車中得幸也。〔考證〕中井積徳曰。侍尙衣。是執更脫衣裳之役。又曰。軒。小屋。是近廁。即更脫衣裳之處。何焯曰。案長廊有窓而周廻者曰軒。此軒中蓋屋也。豈有帝方宴飲時。上車更衣者乎。上還坐。驪甚。〔釋名釋宮室〕廁。：或曰軒。前有伏似殿軒也。〔論衡四諱篇〕且凡人之所惡。莫有腐鼻。：夫更衣之室。可謂鼻矣。：更衣之室。不以爲忌。

5

〔宣驗記〕吳主孫皓。性甚暴虐。作事不近人情。與綵女看治園地。土下忽得一軀金像。形相明嚴。皓令置像廁傍。使持屏籬。到四月八日。皓乃溺像頭上。笑而言曰。今是八日。爲爾灌頂。對諸嫔女。以爲戲樂。在後經時。陰囊忽腫。疼痛壯熱。不可堪任。：中宮有一嫔女。先奉佛法。內有所知。凡所說事。往往甚中。奏云。陛下求佛圖未。皓問佛大神耶。女曰。天上天下。尊莫過佛。陛下前所得像。猶在廁傍。請收供養。腫必立差。皓以痛急。即具香湯。手自洗像。置之殿上。叩頭謝過。一心求哀。當夜痛止。腫即隨消。即於康僧會。請受五戒。起大佛寺。供養衆僧也〔辯正論七信毀交報篇〕孫皎溺像。陰瘡累月〔原注。正藏五二冊五四〇頁上。古小說鈎沈にも引く〕。〔法苑珠林一三敬佛篇感應緣〕吳時。於建鄴後園平地。獲金像一軀。討其本緣。謂是周初育王所造。鎮於江府也。

：孫皓得之。素未有信。不甚尊重。置於廁處。令執屏籌。至四月八日。皓如戲曰。今是八日浴佛時。遂尿頭上。尋即通腫。陰處尤劇。痛楚號噉。忍不可禁。：宮內伎女。素有信佛者。曰。佛爲大神。陛下前穢之。今急可請耶。皓信之伏枕。歸依懺謝尤懇。有頃便愈。遂以馬車。迎沙門僧會入宮。以香湯洗像。慚悔殷重。廣修功德於建鄴寺。隱痛漸愈也（出處注記なし。正藏五三册三八二頁）。廁と籌の話は石崇にもある。「裴氏語林」劉寔詣石崇。如廁。見有絳文帳茵蓐甚麗。兩婢持錦囊。寔遽退。笑謂崇曰。向誤入卿室。崇曰。是廁耳。寔更往向。乃守廁婢所進錦囊是籌。良久不得。便行出。謂崇曰。貧士不得此廁。乃如他廁（御覽一八六）。

長籌 「朱鶴齡本引道源注」長籌。廁籌也。「北史七齊本紀中」（文宣帝）雖以楊愔爲宰相。使進廁籌。以體其肥。呼爲楊大肚。馬鞭鞭其背。流血浹袍。「輟耕錄一二廁籌條」今寺觀創木爲籌。置溷園中。名曰廁籌。北史。齊文宣王嗜酒淫佚。肆行狂暴。雖以楊愔爲相。使進廁籌。然則愔所進者。豈即此與。「馬令南唐書二六浮屠傳」南唐有國。蘭若精舍。漸盛於列祖元宗之世。：而後主即位。好之彌篤。：親削僧徒廁簡。試之以煩。少有芒刺。則再加修治。ただし廁籌を實際に長籌と呼んだ例は未見。また六朝はともかく唐代で廁籌の使用がどれほど一般的であったか否かも分らない。入矢義高「乾屎橛」（圖書一九八五年七月）参照。

輸 ここは敗の義。「世話任誕」桓宣武（溫）少家貧。戲大輸。債主敦求甚切。：宣武欲求於（袁）耽。：遂變服。懷布帽。隨溫

去與債主戲（劉注 郭子曰。桓公擄猪失數百斛米。求救於袁耽）。義山の「代應二首之二134」昨夜雙鉤敗。今朝百草輸。「驕兒詩565」階前逢阿姉。六甲頗輸失。

輸籌の比較的早い用例は「遊仙窟」僕答曰。下官不能賭酒。共娘子賭宿。十娘問曰。若爲賭宿。余答曰。十娘輸籌。則共下官臥一宿。下官輸籌。則共十娘臥一宿。長籌は從つて廁籌の籌と籌算の籌のかけ言葉。

6 「白氏六帖三廁」〈石崇廁〉常令婢數十人曳羅縠直之。漆箱中盛乾棗。奉以塞鼻。〈食棗〉大將軍王敦至石家廁。取箱取食之。群婢笑之。

「世說汰侈」石崇廁常有十餘婢侍列。皆麗服藻飾。置甲煎粉。沈香汁之屬。無不畢備。又與新衣著令出。客多羞不能如廁。王大將軍往。脫故衣。著新衣。神色傲然。群婢相謂曰。此客必能作賊（徐震堦校箋 李詳曰。漢書外戚衛皇后子夫傳。帝起更衣。子夫侍尚衣。更衣即廁所。有美人列侍帝戚平陽主家始有之。石崇仿之。所以爲侈）。「又紕漏」王敦初尚主。如廁。見漆箱盛乾棗。本以塞鼻。王謂廁上亦下果。食遂至盡。既還。婢擎金澡盤盛水。瑠璃盥盛澡豆。因倒著水中而飲之。謂是乾飯。群婢莫不掩口而笑之。「朱鶴齡本引道源注」愚按世說。：白帖合之爲一。義山詩亦如此用。豈別有所據耶。

香棗 世說紕漏篇に見える乾棗をさすのだろうか、用例未見。棗は香料にもなるので香の字を冠したか。「玉臺新詠八王訓奉和

率爾有詠詩」散黃分黛色。薰衣雜棗香。〔宋書六九范曄傳〕撰和香方。其序之曰。…又棗膏昏鈍。甲煎淺俗。非唯無助於馨烈。乃當彌增於尤疾也。棗は、四五月。開小淡黃花。香味甚濃」と〔花鏡〕四に見える。

7 憶事〔杜甫九日詩〕酒闌却憶十年事。腸斷驪山清路塵。〔元稹景申秋八首之一〕詠詩閑處立。憶事夜深行。

懷人〔詩周南卷耳〕采采卷耳。不盈頃筐。嗟我懷人。實彼周行〔毛傳 懷。思。實。置。行。列也。思君子。官賢人〕。〔文選三六傅亮爲宋公修張良廟教〕靈廟荒頓。遺像陳昧。撫事懷人。永歎寔深。〔又三〇謝靈運擬魏太子鄴中集序〕歲月如流。零落將盡。撰文懷人。感往增愴。

得句〔李白感時留別從兄徐王延年從弟延陵詩〕夢得春草句。將非惠連誰。〔胡杲九老會賦詩〕搜神得句題紅紙。望景長吟對白雲。〔周賀上陝府姚中丞詩〕成家盡是經綸後。得句應多諫諍余。義山にまた〔閑遊44〕尋幽殊未極。得句總堪誇。

8 義山の類句に〔碧城三首之二152〕鄂君悵望舟中夜。繡被焚香獨自眠。〔回中牡丹二首之一584〕舞蝶殷勤收落蕊。佳人悵悵臥遙帷。翠衾〔李華長門怨詩〕弱體爲鶯薦。啼妝翳翠衾。

歸臥〔王維送別詩〕君言不得意。歸臥南山陲。〔李白酬崔侍御詩〕嚴陵不從萬乘遊。歸臥空山釣碧流。

繡簾〔崔寔政論〕玩飾匿於懷袖。文繡弊於簾帷也〔書鈔二三二〕。〔岑參玉門關蓋將軍歌〕軍中無事但歡娛。暖屋繡簾紅地爐。

* * *

1・2 うこんの香がむせかえるほどに焚きこめられた御殿の北、そして色とりどりに華やかにぬりこめられた高樓の東。凡骨を仙骨に換える神祕の方術、最高最上の薬こそそれに通ずる手だてであり、またその薬によって始めて堂北樓東に通る資格ができるのだ。服用した上薬が轉いて仙骨が得られる。いかなる效目を持つ薬かなどを穿鑿するのは野暮というものだろう。1句でまず物語の場が設定される。

3・4 さて次はその問題の場の中へと入って行く話になる。この世の物とも思えぬ青色の桂の苑へと、夜露がひそかにひそかにしのびよる。紫の色に咲きにおう一面の蘭の叢、ただそのみに風はひたすら渡って行く。いうまでもなく露・風は男性、桂苑・蘭叢は後宮、女の苑である。

5・6 最後がいよいよ入りこんでからの話である。長い廟簾を持たせた佛像をかわやに据え、戯れに頭上にゆばりするのをいならぶ宮女たちに見せつけては楽しんだ、かの孫皓に一步もゆづらぬ荒淫がそこにはあった。香料代りのかぐわしいナツメを山を積み、着飾った數十人の家婢を侍らしてかわやで用を足した、かの石崇など目じゃないほどの放埒もそこにはあった。

7・8 義山詩の尾聯はしばしば前三聯と次元を異にするばあいがあるが、本詩はその顯著な一例である。詩の内容をいれるワクぐみがこここで形成されたので、あるいは物語の世界から現實にもど

ったともいえよう。これは誰かから聞いた一つのお話だ(張采田)という説の出るゆえんだ。

さて、いろいろ面白い話を聞かせてもらい、孫皓や石崇なみの経験もしたよという主人公のことをあれこれ考えるうち、こんな詩句までできた。いまごろかれは翡翠のしとね、刺繡に飾られるすだれの内に歸り、ひとり横臥しているだろう。

この手の艶詩はどうやら注釋家たちの苦手らしく、珍説奇説の續出で參考になるところは比較的少い。上記の解釋とて一試案にすぎず、殊に8句には最も不安が残る。ただ、本詩の存在が「筆墨の穢瀆」だとか、義山にとつての「一大不幸」だとかは到底思われないのである。なお近ごろ「遊仙窟」の詩を例證に、5句の長籌を男性の一部と解釋した論文(薛順雄「李義山「藥轉」詩釋」〈「李商隱詩研究論文集」一九八四・臺北天工書局〉)があるが、引用された遊仙窟の「聞君把提快、再乞五三籌。：若令臍下入、百放故籌多。」なる個所は、たとえば魚返善雄譯に「得意の矢つぎ早、四五本おいで待つ。：おへその下ならば、百發これ百中。」とある通り、この個所の籌の字も比喩的に用いられたものではなく、本來のかずとりの意味を出ない。詩題の轉を「軒」に作る高麗本は明白な誤植である。馮浩・張采田・安徽師大年表いずれも不編年。

(荒井 健)

可歎207 歎ず可し

幸會東城宴未廻 幸に東城に會せしも 宴未だ廻らず
年華憂共水相催 年華 水と相催すを憂う

梁家宅裏秦宮入 梁家宅裏 秦宮入り

4 趙后樓中赤鳳來 趙后樓中 赤鳳來る

水簾且眠金鎖枕 水簾且く眠る 金鎖枕

瓊筵不醉玉交盃 瓊筵醉わずや 玉交盃

宓妃愁坐芝田館 宓妃愁いて坐す 芝田の館

用盡陳王八斗才 用い盡す陳王八斗の才

校

0 才調集六・唐詩類苑一二六(人部感慨類)

2 催 毛本校注「一作灌」 錢本「灌」を「催」に改む

4 后 才調集「氏」 何焯讀書記「后作氏」

韻

上平十五灰(廻・催・盃)十六哈(來・才) 同用

*

朱鶴齡

秦宮赤鳳。以刺當時之事也。陳思之于宓妃。情通而不及亂。作者殆以自況歟。

吳喬

宓妃似比綯。陳王似自比。愁字倒句也。順之則在宓字上。乃自謂耳。綯之恨義山。亦淺夫常事。既恨而不絕交。宴接殷勤以侮弄之。

有送鉤射覆等事。則城府深阻。爲可畏矣。是以君子惡之也。

0 此詩似與綢宴歸而作。

1·2 得會爲幸。未別而憂。情意可知。

3·4 此與賈氏宓妃二語同意。皆非豔詩也。

5 述別後獨處情事。

6 在席已不能醉。

朱彝尊

所刺不可得而知。玩第三句。豈當時有貴人年邁。而少姬恣行放蕩者乎。

何焯

〔讀書記〕

0 未詳所指何人（評本「未詳所指何人已已」）。

7·8 言宓妃之事。猶較此爲未甚。所以深嘆之也。○詩固工妙。

但一首中五人名。未免癩祭之病。

〔評本〕秦宮赤鳳。奴隸下才。得近天人。陳王宓妃。止於贈枕。

年華如水。可堪不遇。所以歎也。

5 得枕爲幸。交接豈可期乎。

姚培謙

此歎躁進者之徒自失也。宴席易過。年華如水。苟非貞質。其不能自持者多矣。古人云。國風好色而不淫。知及於淫者之非能真好色也。若如中聯所云。豈不笑其迂。豈不疑其矯。不知遇合之難。雖智勇亦有所不可強。以陳王八斗之才。幽通冥感。只傳洛神一賦。

豈屑效秦宮赤鳳之纖跡者哉。仕進者亦可以深省矣。

屈復

此首亦寓言。若作刺當時之事。何事乎以秦宮爲刺貴人。則赤鳳又刺天子乎。似嘆其所交非人。遇佳人而不識也。止言刺時事。淺近之甚。恐玉溪不如此淺近也。○一二。言佳會難再。中四。邪淫之會偏易。結言正人之會。難而又難。方應起句。○詩家死典活用。豈如近人死用哉。坡仙云。解詩定此詩。必非知詩人。可想。

程夢星

朱長孺云。秦宮赤鳳。以刺當時之事也。陳思之於宓妃。情通而不及亂。作者殆以自況歟。

此謂彼殊非耦而歎也。當時女冠如魚玄機輩者。有爲勢力下材所持。起句。自謂其嘗有會合也。次句。則慨其日月易逝也。三四。言其所耦皆監奴之輩。五句。歎其失身。六句。意其不樂。七句。愁字頂上四語來。比之以宓妃者。言妃意在陳王而不在五官中郎將。猶此女意在義山而不在若輩也。比之芝田館者。明用仙家事以言其爲女冠。八句。則自謂作詩之旨也。

紀昀

〔詩說下〕何以不取可歎也。曰。三四太罵。殊無詩品（評本「三四句。直作詈詞。殊無詩意」）。

馮浩

何曰。一首中五人名。未免癩祭之病。錢（良擇）曰。所刺不可得而知。豈有貴人年邁。而少姬恣行放誕者乎。○浩曰。題已顯然。

結句。乃別有所指。非承三四也。義山詩。軼者多矣。而此種大傷忠厚之篇。其不幸而傳者乎。

6 何暇醉乎。

張采田

〔辨正〕此豔情也。首句。有機會可乘。次句。言虛度光陰。三四。借古人幽期密約之事。以況今之不然也。水簾句。獨眠冷落之態。瓊筵句。未能交歡。結則自慨用盡才華。而兩情依然睽阻也。故以可歎命篇。通體皆是自傷遇合之無成。豈刺他人淫佚哉。紀氏不細會詩意。故誤以三四一聯爲直作詈詞耳。

〔會箋〕此亦假豔情寓慨之作。首句。機會可乘。次句。光陰虛度。三四。借古人幽期密約之事。以況今之不然。水簾句。偏教獨處。瓊筵句。未能交歡。結慨費盡才華。而兩情依然睽阻也。故以可歎命篇。通體皆是自傷遇合之無成。豈刺他人淫佚哉。頗似爲子直作。馮氏謂大傷忠厚。非也。

馮舒

3 可歎。

胡以梅（豔情類）

雖刺當時貴家之亂。而動其幽情。憶意中人也。起是代爲之語。言主人幸已晏會東城未返。人生憂年華如流水之相催。遂爲秦宮赤鳳之事。水簾可眠。瓊筵可醉。其爲荒淫穢亂。眞可歎也。豈比宓妃之愁坐仙館。另有一種幽情靜致。可動陳王之思而費才作賦者哉。宓妃。必意中另有其人。朱箋謂作者自況。誠有之。不然。何必爲

古人遠想耶。按詩法。宜遠峯斷岫。欲接不接。方是佳境。而義山豔情諸什。尤爲玄之又玄。必三覆體認。揆章尋蛇。方有悟機。然通章神情。原自朗然。未曾走失。蓋中四句。皆是重濁魔境。七八。忽然清虛。豈有曲終奏雅。倫類駁雜。故知是轉語。但其中必令人襯講方得。是在讀者識力到與不到耳。不醉。言其沈湎不已。

* *

0 可歎

〔玉臺新詠三陸機艷歌行〕冶容不足詠。春游良可歎。〔王右軍帖〕此乃爲汝求宅。謂汝來居止。理軍千何可久處。而情事不得從意。可歎。可歎（法書要錄一〇）。〔駱賓王月夜有懷簡寄諸同病詩〕可歎高樓婦。悲思杳難終。また杜詩に可歎の題の七古あり、ただし用いられざる人材を歎いた作で、内容的には全く關係がない。

1

〔詩邶風靜女〕靜女其姝。俟我於城隅（毛傳 城隅。以言高而不可踰）。愛而不見。搔首踟躕。〔鄭玄別傳〕袁紹辟玄。及去。錢之城東。欲玄欲醉。會者三百余人。皆離席奉觴。自旦及暮。度玄飲三百餘杯（世說文學篇劉孝標注）。〔文選二四曹植贈丁翼詩〕嘉賓填城闕。豐膳出中厨。吾與二三子。曲宴此城隅（李注 毛詩曰。俟我於城隅）。〔白居易渭村退居寄崔侍郎錢舍人詩一百韻〕賜櫻東城下。頒醕曲水傍。樽疊分聖酒。妓樂借仙倡。淺酌看紅藥。徐吟把綠楊。宴廻過御陌。行歇入僧房。

幸會

〔文選二五謝瞻於安城答靈運詩〕幸會果代耕。符守江南曲（李注 許慎淮南子注曰。果。成也）。〔韓愈答張籍書〕及聆其

音聲。接其辭氣。則有願交之志。因緣幸會。遂得所圖。

東城 義山にまた〔送從翁從東川弘農尚書幕59〕少減東城飲。

時看北斗杓。〔古詩十九首之十二〕東城高且長。逶迤自相屬。〔文選二〇〕謝瞻王撫軍庾西陽集別時爲豫章太守庾被徵還東〕分手東城闕。發權西江隩。

唐詩の習語。〔李頎贈張旭詩〕諸賓且方坐。旭日臨東城。荷葉裏江魚。白甌貯香杭。〔溫庭筠春野行〕東城少年氣堂堂〔顧予咸注何遜〔擬輕薄篇〕詩。城東美少年〕。金丸驚起雙鸞鴛。長安の場合〔徐彥伯擬古三首之三〕弱年仕關輔。移門豁御溝。數憶東城際。婉孌南陌頭。〔劉禹錫戲贈崔千牛詩〕勸君多買長安酒。南陌東城占取春。洛陽の場合〔儲光羲洛陽東門送別詩〕東城別故人。臘月遲芳辰。〔劉復出東城詩〕步出東城門。獨行已徬徨。伊洛汎清流。密林含朝陽。

宴未廻 (1)廻||カエル。〔趙嘏李先輩擢第東歸有贈送詩〕正憐日煖雲飄路。何處宴廻風滿衣。また前掲白樂天渭村退居詩。(2)廻||メグル・メグラス。〔韋應物酬柳郎中春日歸揚州南郭見別之作〕廣陵三月花正開。花裏逢君醉一廻。〔白居易會昌元年春五絕句・贈舉之僕射今春與僕射三爲寒食之會〕一月三廻寒食會。春光應不負今年。〔又題新館詩〕新館寒來多少客。欲廻歌酒煖風塵。

2 〔張祐華清宮和杜舍人〕祝壽山猶在。流年水共傷。全唐詩は同じ作品を趙嘏卷にも載せる。また溫飛卿詩集九集外詩にも見え、流年の一句に對する曾益注は〔陸機歎逝賦〕川閱水以成川。水滔

滔而日度。世閱人而爲世。人冉冉而行莫。そのほか〔李遠與碧溪上人別詩〕色隨花旋落。年共水爭流。

年華 〔謝朓冬緒羈懷詩〕客念坐嬋媛。年華稍菴蘳〔李直方注陸機君子有所思行。容華隨年落〕。〔庾信竹枝賦〕潘岳秋興。積生倦游。桓譚不樂。吳質長愁。並皆年華未暮。容貌先秋。〔駱賓王春日離長安客中言懷詩〕年華開早律。霽色蕩芳晨。

相催 〔梁簡文帝東飛伯勞歌二首之二〕少年年幾方三六。含嬌聚態傾人目。餘香落蕊坐相催。可憐絕世爲誰媒。

3 〔後漢書梁統列傳二四〕〔玄孫〕冀字伯阜。爲人鷹肩豺目。洞精矚眄。口吟舌言。裁能書計。少爲貴戚。逸游自恣。…〔冀妻孫壽色美而善爲妖態。…壽性鉗忌。能制御冀。冀甚寵憚之。…冀愛監奴秦宮。官至太倉令。得出入壽所。壽見宮。輒屏御者。託以言事。因與私焉。宮内外兼寵。威權大震。刺史二千石皆謁辭之。〔御覽二二三〕梁冀別傳曰。太倉令秦宮出入冀妻壽所。語言飲食。獨往獨來。屏去御者宮冀蒼頭壽姊夫宗祈不知書。因壽氣力。起家拜太倉令。監奴については〔漢書六八霍光傳顏師古注〕監奴謂奴之監知家務者也。〔李賀秦宮詩〕皇天厄運猶曾裂。秦宮一生花底活。

梁家 〔玉臺新詠八蕭子顯日出東南隅行〕逶迤梁家髻。冉冉弱宮腰。

宅裏 〔杜甫江南逢李龜年詩〕岐王宅裏尋常見。崔九堂前幾度聞。〔元稹送友封詩〕蘭成宅裏尋枯樹。宋玉亭前別故人。

入 義山の〔鏡檻301〕鏡檻芙蓉入。香臺翡翠過。

4

〔漢書九七下趙后傳〕孝成趙皇后。本長安宮人。…及壯。屬陽阿主家。學歌舞。號飛燕。…召入宮。大幸。有女弟復召入。俱爲婕妤。貴傾後宮。…乃立婕妤爲皇后。…後寵少衰。而弟絕幸。爲昭儀。居昭陽舍。其中庭彤朱。而殿上綵漆。切皆銅沓黃金塗。白玉階。壁帶往往爲黃金鉉。函藍田璧。明珠翠飾之。自後宮未嘗有焉。

〔趙飛燕外傳〕爲后別開遠條館。賜紫茸雲氣帳。文玉几。赤金九層博山爐。…后在遠條館。多通侍郎宮奴多子者。…侍郎宮奴。

鮮紛蘊香。縱恣棲息遠條館。無敢言者。…(女弟)益貴幸。號爲昭儀。求近遠條館。帝作少嬪館。…后所通宮奴燕赤鳳者。雄捷能超觀閣。兼通昭儀。赤鳳始出少嬪館。后適來幸。時十月五日。宮中故事。上靈安廟。是日吹塤擊鼓歌。連臂踏地。歌赤鳳來曲。后語昭儀曰。赤鳳爲誰來。昭儀曰。赤鳳自爲姊來。寧爲它人乎。后怒。以杯抵昭儀裙。…帝微聞其事。畏后不敢問。以問昭儀。昭儀曰。后妬我耳。以漢爲火德。故以帝爲赤鳳。帝信之大悅。〔馮浩注〕因曲名與燕赤鳳同。故以相詰怒。程毅中「古小說簡目」三七頁にいう。〔范寧先生云〕「李義山〈可歎〉詩：赤鳳見〈飛燕外傳〉。」是則已爲唐人熟知故事。然本篇不似漢人文筆、時代不明、姑列〈古鏡記〉之前、爲傳奇之始。」なお赤鳳來曲の話は戚夫人の故事としても見える。〔西京雜記三〕戚夫人侍兒賈佩蘭。後出爲扶風人段儒妻。…又說。在宮內時。…十月十五日。共入靈女廟。以豚黍樂神。吹笛擊筑。歌上靈之曲。既而相與連臂。踏地爲節。歌赤鳳

風來。

5

〔梁武帝龍笛曲〕美人綿眇在雲堂。雕金鏤竹眠玉牀。義山に〔偶題二首之一479〕水文簾上琥珀枕。傍有墮釵雙翠翹。

水簾 〔杜甫寄劉使君四十韻〕宴引春壺滿。恩分夏簾冰。〔溫庭筠瑤瑟怨〕水簾銀牀夢不成。碧天如水夜雲輕。

金鏤枕 舊注みな洛神賦李善注の引く「記」にいう「甄后玉鏤金帶枕」をあてる。〔無題飄飄東南115〕6句注參照、集釋稿(一)本誌

五三册六三三頁。

〔爾雅釋器〕金謂之鏤。木謂之刻。骨謂之切。象謂之磋。玉謂之琢。〔文選三張衡東京賦〕龍輅華轡。金鏤鏤錫(李注 蔡確曰。金鏤者馬冠也。高廣各五寸。上如玉華形。在馬髦前。鏤。雕飾也。當顧刻金爲之。〔宋書七七沈慶之傳〕太子妃上世祖金鏤七箸及杓。上以錫慶之。〔玉臺新詠一古詩無名人爲焦仲卿妻作〕躑躅青驄馬。流蘇金鏤鞍。〔三洲歌〕玉樽金鏤碗。與郎雙杯行。

6

瓊筵 〔文選三〇謝朓始出尚書省詩〕既通金閨籍。復酌瓊筵醴(李注 袁宏夜酣賦曰。開金扉。坐瓊筵)。〔玉臺新詠九劉孝威擬古應教〕青鋪綠瑣琉璃屏。瓊筵玉筍金縷衣。〔李白春夜宴從弟桃李園序〕開瓊筵以坐花。飛羽觸而醉月。

玉交盃 朱鶴齡以下いずれも注せず。ただ、〔才調集補註〕陸龜蒙〔採藥〕賦。栢形連理而終在。扇樣合歡而可學。玉交盃。當是合歡連理之盃。//交盃なるものが果して連理盃なのか疑問が残るが、他によい智慧もないので一應これに従う。〔李賀屏風曲〕

沉香火暖茱萸煙。酒觥綰帶新承權（王琦注 酒觥綰帶。謂兩杯相並。以帶繫其足而聯絡之。今婚禮合巹用之。謂之合巹杯。即古之所謂連理杯也。觀此。知唐時已有此制）。

〔玉臺新詠三楊方合歡詩五首之一〕食共並根穗。飲共連理栢。

〔江總雜曲三首之三〕未眠解著同心結。欲醉那堪連理杯。〔宋之問壽陽王花燭圖詩〕莫令銀箭曉。爲盡合歡杯。全唐詩沈佺期卷にも見ゆ。〔庚肩吾起夜來詩〕香銷連理帶。塵覆合歡杯。

7

〔楚辭離騷〕吾令豐隆乘雲兮。求宓妃之所在（王注 宓妃。神女。〔又九歎愍命〕逐下祓於伊雒（王注 宓妃。神女。蓋伊雒水之精也）。〔文選八司馬相如上林賦〕若夫青琴宓妃之徒（伏儼曰。青琴。古神女也。如淳曰。宓妃。伏羲氏女。溺死洛。遂爲洛水之神）。絕殊離俗。妖冶嫺都。〔又三張衡東京賦〕宓妃攸館。神用挺紀（薛綜注 攸。所也。館。舍也）。

〔文選一九曹植洛神賦〕余朝京師。還濟洛川。古人有言。斯水之神。名曰宓妃。感宋玉對楚王神女之事。遂作斯賦。其辭曰。：爾乃稅駕乎衡臬。秣駒乎芝田（李注 十洲記曰。鍾山仙家。耕田種芝草）。：覩一麗人于巖之畔。：微幽蘭之芳諳兮。步踟躕於山隅。

：動無常則。若危若安。進止難期。若往若還。：動朱脣以徐言。

陳交接之大綱。恨人神之道殊兮。怨盛年之莫當。：雖潛處於大陰。長寄心於君王。忽不悟其所舍。悵神宵而蔽光。

愁坐 〔李白酬崔五郎中詩〕奈何懷良圖。鬱悒獨愁坐。〔杜甫對雪詩〕數州消息斷。愁坐正書空。

芝田 〔文選一四鮑照舞鶴賦〕朝戲於芝田。夕飲乎瑤池。〔拾遺記一〇崑崙山〕第九層。山形漸小狹。下有芝田蕙田。皆數百頃。羣

仙種繡焉。〔盧思道後園宴詩〕秋夕風動三珠樹。春朝露濕九芝田。

8

陳王すなわち曹植の八斗才の故事は蒙求に見えるが、より古い典據は未詳。〔無題題詞東南115〕魏王才の注參照、集釋稿（一）本誌五三册六三三頁。なお義山と同世代の趙嘏（八〇六一五二？・譚優學の唐詩人行年考による）にも〔廣陵答崔察詩〕八斗已聞傳姓字。一枝何足計行藏。

陳王 〔三國魏志一九曹植傳〕（太和六年）二月。以陳四縣封植

爲陳王。邑三千五百戶。〔文選二三謝莊月賦〕陳王初喪應劉。端憂多暇（李注 陳王。曹植也）。〔又五〇沈約宋書謝靈運傳論〕至于建安。曹氏基命。三祖陳王。咸蓄盛藻。〔玉臺新詠八劉綬敬酬劉長史詠名士悅傾城詩〕不信巫山女。不信洛川神。何關別有物。還是傾城人。經共陳王戲。曾與宋家隣。〔李白感興八首之二〕洛浦有宓妃。飄飄雪爭飛。陳王徒作賦。神女豈同歸。好色傷大雅。多爲世所譏。

* * *

舊解は例によつて純粹の艶詩とするA型、宦途慨嘆の寓意ありとするB型に大別される。B型では姚培謙のみ他者諷刺説で、屈復・吳喬・張采田は自述説。A型では程夢星のみ自述説で、朱鶴齡・馮浩・胡以梅は諷刺・自述の折衷説。何焯・朱彝尊もA型だが詳細は不明。いま作品の大筋の解釋としては朱鶴齡系により、

個々の詩句については程夢星をも參酌してよむ。

1・2 まことに幸せにも東城の一隅で出會い、宴の席をともしたのでしたが、あのような機會はまたとめぐってまいりません。眼前の風物が流れる水とともに忙しくうつろってゆくのを憂わしげにながめやるばかりで、同時に年齢という花もどんどん散ってゆきます。1句がまず甚だ難物で、ここをどうとるかによって以下の解釋の流れに大きくひびくが、ひとまず程夢星と屈復の組み合わせにしておいた。

3・4 後漢の監奴秦官は、主人梁冀の邸宅の閨房にまで入り、東方孫壽と通じました。漢の宮奴赤鳳は成帝の寵愛した趙后飛燕の樓館にまでやって来て、飛燕と通じました。やんごとない貴人の目をかすめて、その掌中の玉をものにした下賤のやつこどもがむかしおりました。いや、いまだって結構ありそうな話で、とすれば全くもって嘆かわしい。

5・6 さてそうした梁家宅裏や趙后樓中では、氷のようにひんやりしたたかむしろに黄金を彫りこんだ枕がおかれ、情人たちがしばしまどろむことでしょう。また美玉を思わせる豪華な敷物の上で、合歡連理の杯でこれでもかこれでもかと酔っぱらうまで飲んだり飲ませたりなのでしょう。だがこちらは秦宮でもなし赤鳳でもなし、そんな世界に入る手だてを知らないのです。

7・8 洛水の女神宓妃は遠い遠い崑崙山のふもとの芝田の館に愁わしげに坐しております。實は魏の陳思王曹植との悲戀の相手甄

后こそその眞の姿なのです。陳王は、天下の文才の八割を獨占するといわれる稀代の能力のすべてを使い果たして宓妃のすばらしい姿を描きましたが、二人は終に結ばれることがありませんでした。女神のような人を知りながら永遠に思いをとげられぬ男——これも身近にありそうな話です。かくいうわたしが陳王だ、とはあえて申しませんが。

テキストの異同はいずれもととりあげるに足りない。馮氏・張氏・安徽師大年表いずれも不編年。

(深澤一幸)

當句有對 390 當句有對

密邇平陽接上蘭 平陽に密邇し 上蘭に接す

秦樓鴛瓦漢宮盤 秦樓の鴛瓦 漢宮の盤

池光不定花光亂 池光定せず 花光亂れ

4日氣初涵露氣乾 日氣初めて涵し 露氣乾く

但覺遊蜂饒舞蝶 但だ覺ゆ遊蜂の舞蝶に饒うを

豈知孤鳳憶離鸞 豈知らんや孤鳳の離鸞を憶うを

三星自轉三山遠 三星自ら轉じ 三山遠く

8紫府程遙碧落寬 紫府程遙かに 碧落寬し

校

0 唐詩類苑一二二(人部懷古類)

1 邇 朱本·全唐詩校注「一作爾」

6 憶 唐音統籤「更」 錢本書眉校注「憶作更」

7 三星 高麗本「二星」

韻

上平二十五寒(蘭·乾)二十六桓(盤·鸞·寬) 同用

*

朱鶴齡

7 三神山在海上。

朱彝尊

此格僅見。

何焯

〔讀書記〕每句中有對。所謂當句對格也。此游戲之筆(評本本條なし)。

〔評本〕

0 詩不必佳。在三十六體中。自齊梁格詩變出。三四。覆裝。便不

覺累重。

1 反呼遙遠。

3·4 三四。透出傷春。

6 梁元帝琴曲纂要云。西漢時有慶安世者。爲成帝侍郎。善爲雙鳳

離鸞之曲。○憶。統籤更。

徐德泓

此亦失意之詩。首二句。寫禁地景象。第三句。喻用人無定鑑而途

李義山七律集釋稿(五)

雜也。第四句。言恩澤之衰。用湛露晞陽語意。第五句。喻求進之人。六句。則自況耳。結意謂三星乃會合之詩。今自轉而無與于人矣。清禁之地。豈能至乎。

姚培謙

此譏恩倖之爭進也。咫尺禁近。呼吸可通。池光句。見獻媚者之多途。日氣句。見邀寵者之無已。中聯。承上起下。三星在天。不妨待時。三山隔海。何妨路遠。一切紛紛。眞所謂匪我思存者也。此七律中游戲格。

〔讀義山詩存疑〕三星自轉三山遠。詩唐風綢繆。三星在天。按二十八宿。每月隨天旋轉。故虞書曰永星火。爲夏至後初昏中星。詩幽風七月流火。暑氣將退。而大火西流。亦就七月初昏而言。朱子集傳。在天。昏始見於東方。建辰之月也。蓋指三月初昏時候。舊注引此。刪去建辰句。竟似每年十二箇月。三星一定初昏東出者。其悞非淺。今照集傳補入。

屈復

秦樓漢殿。已成故跡。三。比其皆空。四。比其易敗。今者惟饒蜂蝶。徒憶鳳鸞。晝夜如流。神山甚遠。安能入紫府而騰碧落乎。

程夢星

此寄懷貴游女冠之作也。題只以詩格爲言。蓋卽無題之義也。

紀昀

〔詩說下〕何以不取當句有對也。曰。西崑下派。

馮浩

六六三

0 八句皆自爲對。創格也。標以爲題。猶無題耳。

2 秦樓頂平陽。漢宮頂上蘭。

3 任其取適。

4 夜合曉離。

6 (憶) 戊籤作更。○止有治情。並無離恨。對饒字。似當作更。

7・8 三星。寓好合。三山。指學仙。曰遙。曰寬。見遁入此中。

更無拘束。此亦入道公主無疑。

張采田

〔辨正〕此有寓意。豈西崑塗澤所能及(會箋 本條なし)。○此疑

大中五年初除太學博士之寓言。首二句。言復官輦下。密邇禁近。

池光句。言從前隨黨局流轉。無有定止。日氣句。言今日新得沾漑。

然而力盡心瘁矣。但覺二句。言人但見我選官如游蜂舞蝶之得意。

而豈知我仍望令狐好合耶。結言雖得遷除。而顯達尙未可期也(會

箋 而を「已」に、我仍：好合を「貌雖合而神則離。我仍望其重

諧鸞鳳」に作り、「八句皆自爲對。標以爲題。猶無題耳」の十四字

あり)。

* *

0 當句有對すなわち當句對。句對、また就句對ともいう。(王昌齡

詩格勢對例五) 句對四 曹子建詩。浮沉各異勢。會合何時諧(吟

窓雜錄五)。當句の語は〔皎然詩議十五例〕十。當句各以物色成之

例。詩曰。明月照積雪。朔風勁且哀(吟窓雜錄七)。當句對は同じ

く吟窓雜錄七に載せる〔詩議詩有八種對〕三曰當句 當句對體

賦曰。薰歇燼滅。光沉響絕。詩議の二條は文鏡秘府論地卷十四例
および東卷二十九種對にもそれぞれ引く。

宋代の文獻では〔侯鯖錄三〕古人作律詩。有當句對者。兩句更

不須對。如陸龜蒙詩云。但說漱流并枕石。不辭蟬腹與龜腸。是也。

〔天厨禁脔上就句對法〕贈僧 往往語復默。微微雨洒松。又水

邊林下何時去。薄宦虛名欺得人。前詩賈島作。後司空曙所作。

往往不可對微微。去字不可對人字。題是詩一句以作對。以語對

默。以雨對松。以水邊對林下。以薄宦對虛名也。〔西溪叢語上〕

李商隱有當句(有の字なし)對詩云。密邇平陽接上蘭。秦樓鸞瓦

漢宮盤。池光不定花光亂。日氣初涵露氣乾。亦有當句對而兩句不

對者。如陸龜蒙詩云。但說漱流并枕石。不辭蟬腹與龜腸。〔容齋續

筆三詩文當句對條〕唐人詩文。或於一句中。自成對偶。謂之當句

對。蓋起於楚辭蕙蒸蘭藉。桂酒椒漿。桂擢蘭櫺。斫冰積雪。自齊

梁以來。江文通庾子山諸人亦如此。如王勃宴滕王閣序一篇皆然。

謂若襟三江帶五湖。控蠻荆引甌越。龍光牛斗。徐孺陳蕃。……之

辭。是也。于公異破朱泚露布亦然。如堯舜禹湯之德。統元立極之

君。臥鼓偃旗。養威蓄銳。……之辭。是也。杜詩。小院回廊春寂寂。

浴鳧飛鷺晚悠悠。……楓林橘樹。複道重樓之類。不可勝舉。李義山

一詩。其題曰當句有對。云。(正文略。異文なし)其他詩句中。如

青女素娥對月中霜裏(霜月8)。黃葉風雨對青樓管絃(風雨61)。

骨肉書題對蕙蘭陰徑(荆門西下78)。花鬢柳眼對紫蝶黃蜂(二月二

日100)。重吟細把對已落猶開(即日106)。急鼓疏鐘對休爐滅燭(曲

池132)。江魚朔雁對秦樹嵩雲（及第東歸253）。萬戶千門對風朝露夜（流鶯322）。如是者甚多。〔滄浪詩話詩體〕有就句對（原注 又曰當句有對。如少陵小院迴廊春寂寂。浴鳧飛鷺晚悠悠。李嘉祐孤雲獨鳥川光暮。萬里千山海氣秋。是也。前輩于文。亦多此體。如王勃龍光射牛斗之墟。徐孺下陳蕃之榻。乃就句對也。一篇の七律を當句對のみで構成するなど、いかにも技巧家の義山らしい藝當である。

1 密邇

〔左傳文公十七年〕八月。寡君又往朝。以陳蔡之密邇於楚。而不敢貳焉。則敝邑之故也（杜注 密邇。比近也）。〔文選一〇潘岳西征賦〕五方雜會。風流溷淆。情農好利。不昏作勞。密邇獫狁。戎馬生郊（李注 左氏傳曰。以魯國之密邇仇讎）。〔徐勉誠子書〕雖云人外。城闕密邇。韋生欲之。亦雅有情趣（梁書二五徐勉傳）。〔陳子昂感遇三十八首之三十七〕胡秦何密邇。沙朔氣雄哉。平陽 〔朱鶴齡本引道源注〕〔三輔黃圖〕有平陽封宮。又〔漢書〕平陽侯曹壽尚帝姊。號平陽主。以上のように、朱鶴齡は道源注に加え例の衛子夫を武帝に獻じた平陽公主（漢書五五衛青傳・九七上衛后傳）説を並記、馮浩は後者を採る。が、漢の人名とせず秦の宮名とする道源注の方が勝る。

〔史記五秦紀〕寧公二年。公徙居平陽（集解 徐廣曰。郿之平陽亭。〔正義〕帝王世紀云。秦寧公都平陽。按岐山縣有陽平鄉。鄉內有平陽聚。括地志云。平陽故城在岐州岐山縣西四十六里。秦寧公徙都之處）。武公元年。伐彭戲氏。至于華山下。居平陽封

宮（正義 宮名。在岐州平陽城內也）。〔三輔黃圖一秦宮〕平陽封宮。武公元年伐彭戲氏。至于華山下。居于平陽封宮。陳直〔三輔黃圖校證〕に、「『積古齋鐘鼎款識』卷九。五頁、有『平陽封宮』小銅器。『小校經閣金文』卷十一第五十五頁、有平陽宮鼎。又『陝西通志』卷七十二、『平陽封宮在縣邸。』（九頁）

〔庚信對酒歌〕山簡接離倒。王戎如意舞。箏鳴金谷園。笛韻平陽塢（倪注 馬融長笛賦云。融性好音律。能鼓琴吹笛。而爲督郵。無留事。獨臥郿縣平陽塢中）。

上蘭 〔文選八揚雄羽獵賦〕望舒彌轡。翼乎徐至於上蘭（晉灼曰。上蘭觀在上林中也）。〔漢書九八元后傳〕（王莽）乃令太后四時車駕巡狩四郊。冬饗飲飛羽。校獵上蘭（師古曰。上蘭。觀名也。在上林中）。登長平館。臨涇水而覽焉。〔三輔黃圖四苑囿〕漢上林苑。即秦之舊苑也。離宮七十所。皆容千乘萬騎。漢舊儀云。上林苑方三百里。苑中養百獸。天子秋冬射獵取之。上林苑有昆明觀。武帝置。又有上蘭觀。

〔玉臺新詠五沈約登高望春詩〕廻首望長安。城闕鬱盤桓。留宿下蔡。置酒過上蘭。〔王維敕賜百官櫻桃詩〕芙蓉闕下會千官。紫禁朱櫻出上蘭。

2

秦樓—漢宮はか、秦と漢の建物等の對偶は義山が頻用。〔令狐舍人翫月戲贈4〕露索秦宮井。風絃漢殿箏。〔蝶172〕重傳秦臺粉。輕塗漢殿金。〔幽人488〕星斗同秦分。人烟接漢陵。〔送李將軍550〕會與秦樓鳳。俱聽漢苑鶯。〔寓懷580〕漢殿霜何早。秦宮日易曛。

唐人では「李白白頭吟二首之二」錦水東流碧。波蕩雙鴛鴦。雄巢漢宮樹。雌弄秦草芳。

秦樓 羅敷または弄玉の故事とは直接關りのない、文字通り秦の樓閣・樓臺。「唐詩紀事一中宗條」景龍四年正月。…爲柏梁臺聯句。帝曰。大明御寓臨萬方。皇后曰。顧慙內政翊陶唐。長寧公主曰。鸞鳴鳳舞向平陽。安樂公主曰。秦樓魯館沐恩光。「薛稷夜宴安樂公主新宅詩」秦樓宴喜月裴回。妓筵銀燭滿庭開。「溫庭筠過潼關詩」塵尾角巾應曠望。更嗟芳露隔秦樓。無題二首之二112秦樓の注參照、集釋稿(一)本誌五三册六二二頁。

鴛瓦 「吳均答蕭新浦詩」肘懸辟邪印。屋曜鴛鴦瓦。「白居易長恨歌」鴛鴦瓦冷霜華重。翡翠衾寒誰與共。「王涯望禁門松雪詩」依稀鴛瓦出。隱映鳳樓重。義山にまた「補編九梓州道與觀碑銘」氣轉金樞。則雲歸鴛瓦。漏移銅史。則星入銀簾。

漢宮盤 義山の作にまた「漢宮詞113」侍臣最有相如渴。不賜金莖露一盃。「漢宮193」通靈夜醮達清晨。承露盤晞甲帳春。

「漢書二五上郊祀志」其後又作柏梁銅柱承仙人掌之屬矣(蘇林曰。仙人以手掌擎盤承甘露。師古曰。三輔故事云。建章宮承露盤。高二十丈。大七圍。以銅爲之。上有仙人掌承露。和玉屑飲之。蓋張衡西京賦所云立修莖之仙掌。承雲表之清露。屑瓊蕊以朝餐。必性命之可度也)。漢書の正文は史記一二孝武紀に同じ。「文選一班固西都賦」抗仙掌以承露。擢雙立之金莖。「漢武故事」上於未央宮以銅作承露盤。仙人掌擎玉杯。以取雲表之露。擬和玉屑。服以求

仙。「三輔黃圖三建章宮」神明臺。漢書曰。建章有神明臺。廟記曰。神明臺。武帝造。祭仙人處。上有承露盤。有銅仙人。舒掌捧銅盤玉杯。以承雲表之露。以露和玉屑服之。以求仙道。「又五臺樹」通天臺。武帝元封二年。作甘泉通天臺。漢舊儀云。通天者。言此臺高通于天也。漢武故事。築通天臺於甘泉。去地百余丈。望雲雨悉在其下。望見長安城。武帝時。祭泰乙。上通天臺。…上有承露盤。仙人掌擎玉杯。以承雲表之露。元鳳間自毀。椽桷皆化爲龍鳳。從風飛去。「古小說鉤沈漢武故事校注」望見長安城。從風雨飛去。疑亦出漢武故事。而作者變其本文。承露盤の建てられたのは未央宮・建章宮・甘泉宮のいずれか不詳。

漢宮の用例は「玉臺新詠九沈約望秋月詩」昭姬泣胡殿。明君思漢宮。「蕭子範春望古意詩」光景斜漢宮。橫梁照采虹。

3・4 「贈子直花下420」池光忽隱牆。花氣亂侵房。「戲贈張書記487」池光不受月。野氣欲沉山。

3 池光 「謝朓奉和隨王殿下十六首之六」月陰洞野色。日華麗池光。「王褒山池落照詩」竹館掩荆扉。池光晦晚暉。「陳子昂夏日遊暉上人房詩」對戶池光亂。交軒巖翠連。

定 「碧城三首之一151」若是曉珠明又定。一生長對水精盤。「小園獨酌421」年年春不定。虛信歲前梅。義山詩の定の字は獨特のニエアンスを持つようである。

花光 「玉臺新詠七簡文帝和湘東王三韻冬曉」帳裏竹華帶。鏡轉菱花光。「庾信象戲賦」水影搖日。花光照林。「陳後主梅花落二

首之一」映日光動。迎風香氣來。〔李德裕述夢詩〕花光晨艷艷。松韻晚騷騷。

4 日氣 〔詩小雅角弓〕雨雪漙漙。見睨日消（睨。日氣也。箋云。

雨雪之盛漙漙然。至日將出。其氣始見。人則皆稱曰。雪今消釋矣。〔楚辭遠遊〕餐六氣而飲沆瀣兮。漱正陽而含朝霞（王逸注。餐吞日精。食元符也。陵陽子明經。言春食朝霞。朝霞者。日始欲出赤黃氣也）。〔庾信周驃騎大將軍柴烈李夫人墓誌銘〕年華未落。電影先過。徒餐日氣。空飲天河。〔杜審言夏日過鄭七山齋詩〕日氣含殘雨。雲陰送晚雷。〔杜甫晴二首之一〕雨聲衝塞盡。日氣射江深。

氣涵 〔孟郊雨中寄孟刑部幾道聯句〕德符仙山岸。永立難欹壞。氣涵秋天河。有朗無驚湃。

露氣 前出、六五二頁。

5・6 こうした表現から連想されるのは〔獨居有懷25〕浦冷鴛鴦去。園空蛺蝶尋。〔小園獨酌42〕空餘雙蝶舞。竟絕一人來。さらに、後出〔無題12〕や〔二月二日100〕（集釋稿（三）本誌五六冊二九四頁）などは一篇がこの二句を擴大して見せているようなのだが、義山の愛の詩のすべてが實は同一テーマのヴァリエーションであるのかもしれない。

5 艷情の隱喩に蜂蝶を用いるのは義山の常套。〔春日103〕欲入盧家白玉堂。新春催破舞衣裳。蝶銜花蕊蜂銜粉。共助青樓一日忙。〔閨情215〕紅露花房白蜜脾。黃蜂紫蝶兩參差。〔柳枝五首之一537〕花房與蜜脾。蜂雄蛺蝶雌。同時不同類。那復更相思。〔燕臺詩・春542〕

蜜房羽客類芳心。冶葉倡條偏相識。また形式的に分類すれば咏物詩だろうが中味は明かな艷詩の〔蜂156〕青陵粉蝶休離恨。長定相逢二月中。

遊蜂 〔玉臺新詠四謝朓贈王主簿二首之一〕蜻蛉草際飛。遊蜂花上食。〔寄參山房春事詩〕風恬日暖蕩春光。戲蝶遊蜂亂入房。

〔孟郊羅氏花下奉招陳侍御詩〕遊蜂不飲故。戲蝶亦爭新。

饒 張相詩詞曲語辭匯釋一に「猶添也、連也、不足而求增益也。」といい、例證にあげた本詩5・6句について「言連帶舞蝶也。」という。

舞蝶 〔唐太宗述聖賦序〕舞蝶游絲。帶清颺而散影。分花交柳。映碧浪而成文。〔駱賓王艷情代郭氏答盧照鄰詩〕抱膝當窗看夕兔。側耳空房聽曉雞。舞蝶臨階祗自舞。啼鳥逢人亦助啼。〔賈至長門怨詩〕舞蝶繁愁緒。繁花對靚妝。

6 北堂書鈔一三六などに引く范泰鸞鳥詩序の故事を用いる。集釋稿（一）無題116注、本誌五三冊六三八頁参照。〔李賀湘妃詩〕離鸞別鳳烟梧中。巫雲蜀雨望相通。義山にまた〔代應二首之一133〕離鸞別鳳今何在。十二玉樓空復空。〔鸞鳳434〕舊鏡鸞何處。衰桐鳳不棲。孤鳳 〔常建送陸擢詩〕殷勤數孤鳳。早食金琅玕。〔李白聞李太尉出征留別崔侍御十九韻〕孤鳳向西北。飛鴻辭北溟。なお鳳は普通雄のはずだが（詩大雅卷阿鳳皇于飛傳「雄曰鳳、雌曰皇」、義山には〔燕臺詩・春542〕雄龍雌鳳杳何許。絮亂絲繁天亦迷。〔又・冬545〕天東日出天西下。雌鳳孤飛女龍寡。のような例がある。こ

こは鳳と鸞を男性と女性としてよいようだが。

離鸞 〔西京雜記二〕慶安世年十五。爲成帝侍郎。善鼓琴。能爲雙鳳離鸞之曲。

7・8 手の届かぬかなたの、思う人のいる場所としての三神山ないしそれに類する架空の地名は、義山詩のライトモチーフの一。

〔無題來楚言114〕劉郎已恨蓬山遠。更隔蓬山一萬重〔集釋稿一〕本誌五三冊六二四頁。〔無題相見時難150〕蓬山此去無多路。青鳥殷勤爲探看〔集釋稿一〕本誌五三冊六四四頁。〔中元作275〕有城未抵瀛州遠。青雀如何鳩鳥媒〔集釋稿二〕本誌五六冊三三三頁。〔月夜重寄宋華陽姊妹381〕偷桃窃藥事難兼。十二城中鎖彩鸞。また後出〔無題139〕七一一頁參照。

7 三星〔詩唐風綢繆〕綢繆。刺晉亂也。國亂。則昏姻不得其時焉〔不得其時。謂不及仲春之月〕。○綢繆束薪。三星在天〔三星。參也。在天。謂始見東方也。男女待禮而成。若薪芻待人事而後束也。三星在天。可以嫁取矣。箋云。三星。謂心星也。心有尊卑夫婦父子之象。又爲二月之合宿。故嫁取者以爲候焉。：今我束薪於野。乃見其在天。則三月之末。四月之中。見於東方矣。故云不得其時〕。三星は、毛傳と鄭箋とで參^{みら}ま^たは心と説^なが異なるが、いづれにしても婚姻を象徵する星宿で、のちには男女和合、婦女淑徳をもあらわす。

〔玉臺新詠一徐幹室思詩〕展轉不能寐。長夜何懸懸。躡履起出戶。仰觀三星連。〔庾信周驃騎大將軍柴烈李夫人墓誌銘〕夫人輔佐

君子。言容匡贊。增耀三星。欽明四德。授巾沃盥。有謹於事姑。斷織停機。無忘於訓子。：銘曰。：妻者齊也。謂嫁曰歸。三星夜照。百兩朝飛。このほか庾信作の婦人墓誌銘には頻見。〔元稹夢遊春詩〕當年二紀初。嘉節三星度。

星轉 〔漢書二六天文志〕日東行。星西轉。：日行疾。則星西轉疾。事勢然也。〔李嶠大周降禪碑〕雷動海運。天廻星轉。〔徐彥伯奉和送金城公主適番應制〕星轉銀河夕。花移玉樹春。

三山 〔史記二八封禪書〕自威宣燕昭。使人入海求蓬萊方丈瀛洲。此三神山者。其傳在勃海中。去人不遠。患且至。則船風引而去。蓋嘗有至者。諸僊人及不死之藥皆在焉。其物禽獸盡白。而黃金銀爲宮闕。未至。望之如雲。及到。三神山反在水下。臨之。風輒引去。終莫能至云。世主莫不甘心焉。漢書二五上郊祀志もほぼ同文。集釋稿一〔無題114〕7句注〔本誌五三冊六二六頁〕參照。〔拾遺記一高辛條〕〔東方〕朔乃作寶籙銘曰。寶雲生於露壇。祥風起於月館。望三壺如盈尺。視八鴻如縈帶。三壺。則海中三山也。一曰方壺。則方丈也。二曰蓬壺。則蓬萊也。三曰瀛壺。則瀛洲也。形如壺器。此三山上廣中狹下方。皆如工制。猶華山之似削成。

〔文選二二沈約鍾山詩應西陽王教〕勢隨九嶷高。氣與三山壯〔李注 漢書曰。蓬萊方丈瀛洲。此三神山者。僊人在焉。：三山在海中〕。〔駱賓王代女道士王靈妃贈道士李榮詩〕京都五府風塵絕。碧海三山波浪深。桃實千年非易待。桑田一變已難尋。〔劉禹錫懷妓四首之四〕三山不見海沈沈。豈有仙蹤更可尋。

8 紫府 後出七一〇頁参照。なおこの語が明かに比喻として用いられた場合は「駱賓王送王贊府上京參選賦得鶴詩」振衣遊紫府。

飛蓋背青田（陳熙晉注 此借以言帝居也）。〔趙嘏敘事獻同州侍御三首之二〕平生望斷雲層層。紫府杳是他人登。

程遙 「朱慶餘送人下第歸詩」岸澗湖波溢。程遙楚岫微。

碧落 「元始無量度人上品妙經四注一」道言昔於始青天中碧落空歌大浮黎土。受元始度人無量上品（薛幽棲注 始青天。即東方九炁青天也。…既天蒼炁青。則碧霞廓落。故云碧落）。

〔駱賓王於紫雲觀贈道士詩〕碧落澄秋景。玄門啓曙闕。〔白居易長恨歌〕上窮碧落下黃泉。兩處茫茫皆不見。

まず舊解を區分整理すれば、

A 艷情
1 自述——程夢星
2 諷刺——馮浩
（對象は入道の貴女）

B 寓言
1 自述——徐德泓・張采田（對象は令狐綯）
2 諷刺——姚培謙

馮浩が指摘するとおり本詩の標題は事實上「無題」に等しく、作品のかたちとしては特に無題150に相通ずるところがあり、舊解諸説の分歧の型も類似している。なお屈復は別に懷古の詩と解し、たらしいが不詳。馮浩および安徽師大年表は不編年だが、令狐綯の影をよみこもうとする張采田は大中五年（八五一）に係年。

1・2 かの平陽宮に至近、かの上林苑内の上蘭觀にも接するところ

る。秦の樓閣の棟々に鴛鴦のいらかが燦然として櫛比し、漢の皇宮の承露盤仙人の銅像が雲間にそそり立つ。秦代、漢代とりまぜての豪壯華麗な大建築に圍まれる一種の架空庭園的空間。いかにも義山好みの詩的世界である。

3・4 池面の光はゆれ動き生ける物のように一刻も静止せず、その光は池邊の花を襲い、花々にきらめく光もまた亂れに亂れる。

義山詩の「池光」は、從來の用例が靜止的受動的なのに對し、明かに能動的あるいは攻撃的でさえある。「花光」はこの一例のみだが、やはり池光の性格に準ずるとしてよい。日光のけはいがあたりにあふれるやいなや露のけはいは忽ち乾き消え失せてしまった。

二句は1・2句で設定した空間内部の雰圍氣を描出するが、こゝですでに艷情的な内容を秘めたイメージが、次の5・6句の伏線としてあらわれる。馮浩はそれに氣づいた。かれの所説に全面的に同意するにはやや躊躇を感ずるけれども。

5・6 淫蕩な空氣のみなざる場において、飛び廻り戯れ遊ぶ蜂どもは踊りくるう蝶たちと仲よく手をつなぎ群れつどうのは分りきったこと。しかし實は、狐獨な鳳が離絶の鸞鳥を思つて思つて思つていぬことなど、氣づかれもしないのだ。馮浩は5・6の間に屈折をみとめず、6句の憶は統攝の「更」に作るのを採り、孤鳳さらには離鸞の悲しみなどこの樂園には無縁、と解する。だが7・8句との關連を考えると、こゝで一轉折あつてしかるべきで、6句はやはり徐德泓の「自況」説がよい。樂しげなその邊の男と

女（蜂蝶）と自らの孤獨を對照させるのは義山おなじみの手法。

7 さてそのうちに、夜空の三つ星（參宿または心宿）がいつしか軌道をめぐりおえ視界から消え、同時に二人の相見の機會も永久に失われ、神女の住みか三つの山は遠く、行きつくすべもない。

8 碧い霞に包まれる天上界、その中心にある紫の府宮、天帝の御座所、その清淨至福の場にも仙女がいるが、そこへのみちのりは遙けく、碧い霞が涯しなくひろがるばかりなのだ。

7・8句でただ一つのことばかり返し歌われるが、それほどの絶望の深さを強調するものであらう。最終連で地上の「現實」世界から仙界・天界へと話が變つたように見えるが、むしろ逆に1〜6句までのあのワクの中から外へ出て、冷たい現實世界にもどつたのである。高麗本が7句の三星を二星に作るのには明らかにあやまり。また統鑑が6句の憶を更に作るの、5句の饒を助字とみてそれとの對偶關係を考えたせいだろうか。舊解では程夢星説が無難だが、對象を貴女と特定できるかどうか。紫府の語として常に「帝居」の比喻に用いられる保證はない。

（深澤一幸）

正月崇讓宅 483 正月 崇讓の宅

密鎖重關掩綠苔 密に重關を鎖し 綠苔掩う

廊深閣迴此徘徊 廊深く閣迴かにして 此に徘徊す

先知風起月含暈 先ず知る風起りて 月は暈を含み

4 尙自露寒花未開 尙お露寒くして 花は未だ開かず

蝙蝠簾旌終展轉 蝙蝠の簾旌を拂うに 終に展轉し

鼠翻窓網小驚猜 鼠の窓網に翻るに 小しく驚猜す

背燈獨共餘香語 燈を背けて獨り餘香と語り

8 不覺猶歌起夜來 覺えず猶お歌う 起夜來

校

0 唐詩類苑一六二（居處部宅類）

2 閣 叢刊本・類苑・稿本・統鑑・錢本・高麗本「閣」 馮浩本

校注「閣同」

7 共 朱鶴齡本・全唐詩校注「一作立」 稿本旁注「立」

8 起夜 底本その他みな「夜起」 朱本・全唐詩「起夜一作夜起」に従って改む

韻

上平十五灰（徊）十六哈（苔・開・猜・來）同用

*

胡震亨

0 崇讓宅是其妻家。而詩似私有所待。豈侍婢流歟。

何焯

〔讀書記〕此悼亡之詩。情深一往（評本「此自悼亡之詩。非私有所持也」）。

8 楊文公詩云。風細傳疎漏。猶歌起夜來。正用其語。

〔評本〕

3・4 三四。覆裝。月暈多風。比妻死身去。下句。則曾未得富貴開眉也。

8 柳暉有起夜來曲。

陸鳴皋

宅係婦家。故全是悼傷之意。通首俱寫夜來景色。描摩如畫。蝙蝠鼠翻。其佳處仍在神韻。後人效此。便俚質無味矣。無所聊賴。香亦可語。亦是奇思。起夜來。曲名也。

姚培謙

此宿外家故宅而生感悼也。重關久鎖。虛室徘徊。見月則如見其人。將風含暈。月之黯慘也。見花則如見其人。露寒未開。花之嬌怯也。於是明知蝙蝠拂簾旌。而終夜爲之展轉。明知鼠翻窗網。而伏枕爲之驚猜。至於背燈閉目。而髣髴餘香。朦朧私語。夜起重歌。竟忘其已作過去之人也。哀哉。

屈復

一二。崇讓宅之荒深。二聯。風露花月。不堪愁對。三聯。物色亦然。七八。如忘其荒涼者。○此徘徊。起結句獨字。猶歌。先已歌也。

程夢星

此失偶後重過王茂元故宅之作。感舊意少。悼亡意多。玩末二句可見。蓋亦大中五年以後。徐州府罷入朝時也。

紀昀

〔詩說下〕何以不取正月崇讓宅也。曰。通首境地悄然。煞有情致。然云高格則未世。首句。亦趁韻。正月豈有綠苔哉（評本「悼亡之作。頗嫌格卑。○正月豈有綠苔」）。

馮浩

何曰。此恨亡之詩。情深一往。○浩曰。何說是也。戊籤疑私待婢之流。誤矣。昔年自徐還京。冬即赴梓。則此正月崇讓宅。必東川歸後也。

5 簾旌。簾端施帛也。

6 心有追憶。動成疑似。

張采田

〔辨正〕悼亡詩最佳者。情深一往。讀之增伉儷之重。潘黃門後絕唱也。乃以爲格卑。何耶。○綠苔四時皆有。此言誤矣。

近代注釋

〔山之內正彥〕九六頁。〔陳永正〕八七頁。

*

*

0 崇讓宅 義山的詩題に本作品のほか三例。〔臨發崇讓宅紫薇

252〕〔崇讓宅東亭醉後泔然有作285〕〔七月二十九日崇讓宅讌作327〕

崇讓は洛陽の坊名。〔西谿叢語上〕李義山崇讓宅讌詩327。風過廻塘

萬竹悲。洛陽有崇讓坊。有河陽節度使王茂先當作元下同宅。李即茂先

之婿。韋氏述征記云。此坊出大竹及桃。

〔文集六重祭外舅司徒公文（馮注）王茂元卒於會昌三年九月〕嗚呼哀哉。千里歸塗。東門故第（馮注）後漢書志（一九）。雒陽。周

公所城雒邑也。東城門名鼎門。以下十句。是在東都崇讓里。

1 密鎖

〔杜牧大雨行〕百川氣勢苦豪俊。坤關密鎖愁開張。

鎖關

〔白敏中賀收復秦原諸州詩〕河水九盤收數曲。天山千里鎖諸關。

重關

〔論衡雷虛〕天神之處天。猶王者之居也。王者居重關之內。則天之神宜在隱匿之中。〔文選二七・玉臺新詠二曹植美女篇〕青樓臨大路。高門結重關。〔文選二三劉楨贈五官中郎將四首之三〕白露塗前庭。應門重其關。〔虞世南從軍行二首之一〕馬凍重關冷。輪摧九折危。

掩

〔馬戴哭京兆龍尹詩〕履跡莓苔掩。珂聲紫陌空。

綠苔

〔文選一二郭璞江賦〕紫榮繁曄以叢被。綠苔鬱鬱乎研上

〔李注〕風土記曰。石髮。水苔也。青綠色。皆生於石。〔又一三謝莊月賦〕綠苔生閣。芳塵凝榭〔李注〕高誘注淮南子曰。蒼苔水

衣。〔虞世南怨歌行〕鏡前紅粉歇。階上綠苔侵。

2 廊深閣迴

〔華陽國志二一後賢志杜軫傳〕入爲尚書郎。每辯降趨翔廊閣之下。威容可觀。中朝偉之。

〔戴叔倫留宿羅源西峰示輝上人詩〕山寂僧初定。廊深火自明。

〔文選二三王粲贈士孫文始詩〕雖則同域。邈其迴深。〔又二四陸

機贈馮文顯詩〕佇立望朔塗。悠悠迴且深。

〔崔湜登總持寺閣詩〕升攀重閣迴。馮覽四郊明。義山にまた

〔晚晴〕併添高閣迴。微注小窓明。

徘徊

〔荀子禮論〕今夫大鳥獸則失亡其羣匹。越月隕時。則必

反鉛過故鄉。則必徘徊焉。鳴號焉。擲躍焉。蜘蛛焉。然後能去之也。

〔漢書三高后紀〕〔呂產〕入未央宮。欲爲亂。殿門弗內。徘徊往來〔師古曰。徘徊猶傍徨不進之意也。俳音裴〕。〔文選一六潘岳懷舊賦〕今九載而一來。空館闐其無人。陳荻被于堂除。舊閭化而爲新。步庭廡以徘徊。涕泣流而霑巾。〔又二三潘岳悼亡詩三首之三〕徘徊墟墓間。欲去復不忍。徘徊不忍去。徒倚步踟躕。

3

地上界と天上界の相關についての俗信。(1)淮南子に見える、灰

で描いた輪と月の暈との感應が、(2)風に對する月暈の感應に形を

變え、(3)さらには虎と月暈との感應というヴァリエーションを生

む。ここは(2)の場合である。

(1)〔淮南子六覽冥訓〕夫物類之相應。玄妙深微。知不能論。辯

不能解。：晝隨灰而運闕。鯨魚死而彗星出。或動之也〔高誘注

運。讀連闕之圍也。運者軍也。將有軍事相圍守。則月運出也。以

蘆草灰隨闕下月光中令圖畫。缺其一面。則月運亦缺於上也。月

運は、初學記一缺暈條の引用では月暈に作る。〔博物志四物理〕凡

月暈。隨灰畫而闕〔淮南子云。未詳其法〕。〔庚肩吾和望月詩〕圓

隨漢東蚌。暈逐淮南灰。〔梁簡文帝江南思二首之一〕月暈蘆灰缺。

秋還懸炭枯。〔庚信舟中望月詩〕灰飛重暈闕。莫落獨輪斜。

(2)〔朱超舟中望月詩〕微風光遶暈。薄霧急移輪〔初學記一〕。〔王

褒關山月詩〕天寒光轉白。風多暈欲生〔初學記一〕。〔孟浩然彭蠡

湖中望廬山詩〕太虛生月暈。舟子知天風。〔李白橫江詞六首之六〕

月暈天風霧不開。海鯨東蹙百川迴（楊齊賢注 古語。月暈而風。

礎潤而雨）。「杜甫翫月呈漢中王詩」欲得淮王術。風吹暈已生。〔劉

禹錫邊風行〕邊馬蕭蕭鳴。邊風滿積生。…襲月寒暈起。吹雲陰陳成。なお朱鶴齡は「廣韻」暈。日月旁氣。月暈則多風。」と注するが、月暈則多風の一句は、廣韻の暈字注には見えない。いずれにしても因果關係からすれば灰↓暈缺となるのだから、(2)でも風↓暈生を基本形、暈↓風生はむしろ派生形と見てよいだろう。

(3)〔酉陽雜俎前集一六毛篇・虎〕交而月暈。易の乾の文言に

「子曰、同聲相應。同氣相求。水流濕、火就燥、雲從龍、風從虎。」とあるように、虎と風が縁語であることからの連想。虎↓(風↓)暈の方向關係はやはり(1)と同じ。

先知 知を4句の自との對應から同義互文的に解し、先知は先

自と同様にみなす。助字としての知については〔促漏195〕定知の注参照、集釋稿(二)本誌五四冊四二五頁。

風起 〔文選一九宋玉高唐賦〕風起雨止。千里而逝。

月含暈 〔陳後主飲馬長城窟行〕月色含城暗。秋聲雜塞長。〔劉

禹錫海陽十詠勢絲瀑〕含暈迎初旭。翻光破夕曛。

露寒 義山にまた〔城外484〕露寒風定不無情。臨水當山又隔城。

〔禮記月令〕孟秋之月。…涼風至。白露降。寒蟬鳴。〔王昌齡重別李評事詩〕吳姬緩舞留君醉。隨意青楓白露寒。ただし單に露寒としては〔文選八司馬相如上林賦〕璽石闕。正封巒。過鳩鵲。望露寒〔張揖曰。此四觀武帝建元中作。在雲陽甘泉宮外〕。をはじめ自

然現象ではなく〔梁元帝玄覽賦〕時季春之上巳。臨祓禊乎沼沚。

杏花發於露寒。棘實浮於濛汜。のように宮觀名に用いられる。寒

露ならば〔文選二一郭璞游仙詩七首之七〕寒露拂陵苒。女蘿辭松柏〔李注 淮南子曰。斗指辛則寒露〕。

花未開 〔郭震惜花詩〕春風滿目還惆悵。半欲離披半未開。〔元

稹春詩六十韻〕丁寧牽芳侶。須識未開叢。

5・6 蝙蝠と鼠のとり合はせは珍しい詩材だが、義山にはあと一例

〔夜半164〕聞風上牀蝙蝠出。玉琴時動倚窓絃。もともと蝙蝠と鼠は古くから同類とされる。〔方言八〕蝙蝠。自關而東謂之服翼。或

謂之飛鼠。或謂之老鼠。或謂之僂鼠。自關而西秦隴之間。謂之蝙蝠。〔曹植蝙蝠賦〕明伏暗動。盡似鼠形。謂鳥不似。二足爲毛。〔白

居易洞中蝙蝠詩〕千年鼠化白蝙蝠。黑洞深藏避網羅。

義山詩の拂・翻の對偶は〔楚澤17〕集鳥翻漁艇。殘虹拂馬鞍。

〔蠅蝶等成篇81〕韓蝶翻羅幕。曹蠅拂綺窓。

5 蝙蝠 やや似通った表現として〔何遜苦熱行〕蝙蝠戸間飛。蠅

蠅窓中亂。〔城南聯句〕暮堂蝙蝠沸。破甕伊威盈郊。

拂簾 〔白居易李盧二中丞各創山居偶題十五韻〕遶砌紫鱗遊。

拂簾白鳥起。

簾旌 ふちどりしたすだれ〔馮浩の説〕。〔晉東宮故事〕簾箔皆以青布緣純〔御覽六二九〕。〔南史三八柳世隆傳〕世隆善卜。…永明初。世隆曰。永明九年我亡。亡後三年丘山崩。齊亦於此季矣。…題簾箔旌曰。永明十一年。因流涕謂〔李〕黨曰。汝當見。吾不

見也。〔國史補上李真清德條〕〔劉〕晏方秉權。嘗造真宅。延至晏室。見其門簾甚弊。乃令潛度廣狹。以粗竹織成。不加緣飾。將以贈真。〔白居易舊房詩〕牀帷半故簾旌斷。仍是初寒欲夜時。

展轉 詩經から長恨歌までの用例は〔無題何處哀筆117〕の注参照、集釋稿(一)本誌五三冊六四二頁。そのほか〔文選一六潘岳懷舊賦〕宵展轉而不寐。聚長歎以達晨。

6 〔馬戴題廬山寺詩〕風驚樵客綠蒼壁。緩戲山頭撼紫樓。

窓網 義山詩にいま一例〔驕兒詩565〕曲躬牽窓網。略睡拭琴漆。程大昌の引く蘇氏演義(今本には見えず)に「網戸」と呼ばれるものであろう。〔演繁露一〕思條 前世載思之制凡五。唐蘇鸞謂爲網戸。其演義之言曰。思。字象形。思。浮也。思。絲也。謂織絲之文。輕疎浮虛之貌。蓋宮殿窓戸之間網也。此其五也。蘇鸞引子虛賦。思網彌山。因證思當爲網。且引文宗甘露之變。出殿北門。裂斷思而而去。又引溫庭筠補陳武帝書曰。思思畫捲。闔闔夜開。遂斷爲古來思思皆爲網。此誤以唐制一編。而臆度古事者也。唐雖借古來思思語。以名網戸。然思思二字。因其借喻。而形狀益以著明也。

驚猜 〔高適奉和鶴賦〕望鳳沼而輕舉。紛羽族之驚猜。

7 背燈 義山にまた〔七月二十八日夜夢作68〕覺來正是平增雨。

未背寒燈枕手眠。〔燈218〕花時隨酒遠。雨夜背燈休。〔劉禹錫秋晚病中樂天以詩見問力疾奉酬詩〕一室背燈臥。中夜拂葉聲。〔元稹合衣寢詩〕良夕背燈坐。方成合衣寢。村上哲見「燭背・燈背という

こと」(中國文學報一冊) 參照。

餘香 〔文選六〇陸機弔魏武帝文〕(遺令)又云。餘香可分與諸夫人。〔又〕紆廣念於履組。塵清慮於餘香。結遺情之婉變。何命促而意長。〔王臺新詠一〇〕簡文帝夜遣內人還後舟詩。去燭猶文水。餘香尚滿舟。〔李白代寄情人楚詞體〕留餘香兮染繡被。夜欲寢兮愁人心。義山にまた〔夜冷482〕西亭翠被餘香薄。一夜將愁向敗荷。

8 不覺 〔文選四一〕李陵答蘇武書。胡笳互動。牧馬悲鳴。吟嘯成群。邊聲四起。晨坐聽之。不覺淚下。嗟乎。子卿。陵獨何心。能不悲哉。〔又三潘岳悼亡詩三首之二〕撫衿長歎息。不覺涕霑胸。〔李白送楊燕之東魯詩〕因君此中去。不覺淚如泉。

起夜來 〔樂府詩集七五〕梁柳惲起夜來。〔郭茂倩注〕樂府解題曰。起夜來。其辭意猶念疇昔思君之來也。唐聶夷中又有起夜半。洞房且莫掩。應門或復開。颯颯秋桂響。非君起夜來。〔又〕唐施肩吾起夜來。香鎖連理帶。塵覆合歡杯。嬾臥相思枕。愁吟起夜來。郭茂倩の引く解題の猶の字、樂府古題要解下では「常」に作る。柳惲の詩の結句は君ガ起キテ夜來ルニ非ズヤの意で、非の字を「悲」に作るテキスト(吳兆宜注本玉臺新詠五)はよみにくい。

〔西崑酬唱集上楊億夜譙詩〕風細傳疎漏。猶歌起夜來。義山をふまえる楊億の作も正しく起夜來に作る。ここの三字は明かに歌曲名だから、夜起來はやはり訛謬であろう。

* * *

近代注釋をふくめ諸家異議なく悼亡説だが、胡震亨のみ誰か女

との逢引の詩と解する。題の崇讓宅といい、作中語彙といい、確かに悼亡説による方が常識的だが、それとかけはなれた解釋も存在するのは、義山詩常例の曖昧指向のあらわれであろう。

係年は妻女王氏の死をめぐに、程夢星が大中五年（八五一）以降とし、馮浩は大中十二年、張采田は同十年、とそれぞれ定めるが、安徽師大年表は編年せず、事實上程氏を支持したかたちになっている。

1・2 幾重ものが門關がびつたりとぎされ、あたり一面緑の苔におおわれている。廻廊は奥深くまで延び高閣は遙かにそびえる、ここ崇讓里の王氏の邸内、わたしはひとり行きつ戻りつ。

3・4 そのうちに先ず風が吹き始めたが、空を見あげれば月もかさをかぶっている。（もし知を實字としてよむなら、先ず風の起るのに氣づいたが……）春正月になったとはいえ、露はまだまだ冷たく、花は開いていない。3句は知の字の性格および4句のよみ方ともからみ、「先ニ風ノ起ルヲ知リシハ月ノ暈ヲ含ムガユエナリ、」すなわち月暈から風起を予知、と解するのは恐らく不可であろう。やはり風起↓暈生の關係としてよみたい。

ひっそり静まりかえった館の中を、詩人は物思いに沈みつつ歩んでいる。その1・2句は、やや平板常套の感もあるが、一作の中心は多分4句にあるのであって、初春とはいえ冷たい露にぬれ風さえ起るなか未だ開かぬ花こそ詩人の心象風景そのものなのだ。

5・6 思ひ出のあるこの部屋にひとりいると、こうもりがみすを

かすめて飛びまわる、それが氣になって寝返り打つばかりで最後まで眠れない。ねずみが窓邊の網を跳ねまわる、その物音にもはっとして何かと思う。兩句とも獨り寝の室で小動物の立てる物音のたびに、ふと妻ではあるまいかと疑いながらいつまでも寝つけぬ様をうたった。

7・8 燈を物蔭に置いた薄暗のなか、眠れぬわたしが言葉を交せるのは、しとねに残った思ひ出の人の移り香ばかり。あのは人もう戻って来ぬ。それなのにわたしは知らず知らず、いまにも戻って来ないかと、まだ「起夜來」起チテ夜來ルの曲を口ずさんでいるのだ。7句の餘香は夜冷の詩同様しとねに残る妻の移り香であろう。8句は特に前の5・6句と響き合った表現。

通説に従い悼亡として釋したが、明確に悼亡の詩たることを示す語句もまた存在しないので、一旦疑い始めるときりがない。胡震亨のように、亡妻ならぬ生身の某女を對象として通すことも全く不可能ではない。8句の「起夜來」の異同は問題にならない。

（中原健二）

天平公座中呈令狐令公時蔡京在座京曾爲僧徒故有第五句509

天平の公座中 令狐令公に呈す 時に蔡京座に在り

京曾て僧徒爲り 故に第五句有り

罷執霓旌上醺壇 霓旌を執りて醺壇に上るを罷む

慢粧嬌樹水晶盤 慢粧の嬌樹 水晶盤

更深欲訴蛾眉斂 更深く訴えんと欲し 蛾眉斂め

4 衣薄臨醒玉豔寒 衣薄く醒むるに臨み 玉豔寒し

白足禪僧思敗道 白足の禪僧 道を敗るを思い

青袍御史擬休官 青袍の御史 官を休めんと擬す

雖然同是將軍客 然も同じく是れ將軍の客たりと雖も

8 不敢公然子細看 敢て公然と子細に看ず

校

0 瀛奎律髓七(風懷類)・唐詩類苑一〇二(人部獻詩類)

天平公座中呈令狐令公時蔡京在座京曾爲僧徒故有第五句 律

髓「天平公座中呈令狐令公時蔡京在坐」(正文末に方回の評

語あり「京嘗爲僧司徒故有第五句」 馮浩本「天平公座中

呈令狐令公」(校注 題當止此。舊本皆有時蔡京在坐京曾爲

僧徒故有第五句十五字。徐逢源曰。京幼嘗爲僧徒二句。

乃方回律髓評語。後人誤入題中也

令公 稿本旁注(令の字に)「相」 高麗本(令の字)なし

在座 他本みな「在坐」

2 慢 高麗本「謾」

粧 錢謙益本「粧(?)」を別字に改むるも判讀不能

高麗本「裝」

樹 姚培謙本校注「疑作貯」

3 眉 高麗本「嬌」

8 子 高麗本「仔」

韻

上平二五寒(壇・寒・看)二十六桓(盤・官)同用

*

錢龍惕

舊書。大和二^三年十一月。令狐楚進位檢校兵部尚書鄆州刺史天

平軍節度使。

朱鶴齡

唐詩紀事。令狐文公在天平。後堂宴樂。蔡京時在坐。故義山詩云

云。愚按。天平公未知爲誰。若果是楚。不應下又出令狐公。雖令

狐父子先後爲中書門下平章事。皆可稱令公。然以此詩五六語證之。

知必爲絢而非楚也。白足禪僧。擬蔡京。青袍御史。必義山自謂。

義山以會昌三年應王茂元之辟。始授御史。去楚沒時久矣。史稱絢

排管義山。謝不與通。以九日503一詩驗之。良信。然集中酬寄令狐

之作。不下數首。皆在就辟茂元之後。何歟。此詩又於天平坐中會

飲。可證絢雖心憾義山。未嘗顯與之絕也。九日題詩。自是文人恃

才本色。而絢之城府好深。亦於此見之矣。

3・4 座中必有官妓。故云。

7 將軍。謂天平公。

〔補注〕按唐人朱閱書彭陽公碑陰云。公尹洛禮陳商。爲鄆薦蔡京。

蒞京辟李商隱。此詩必作于令狐楚鎮鄆之日。天平公座中公字。恐

是衍文耳。青袍御史擬休官。當時指座客。非義山自謂也。前注未

當。今復正之。○晁曰。天平公座。卽紀事所云後堂宴樂也。作天平公讀者失之。

吳喬

直稱蔡京姓名。而詩語帶諱。其在京學于相國子弟時無疑。不敢細看。當是家妓耳。青袍御史。必指別客。楚卒後義山方授御史。愚意此詩作于文宗太和三年己酉。楚爲天平節度時。義山年三十一。其爲御史。去此十五年。詩更波瀾老成。

0 題中天平公座中之公字。疑是衍文。蓋天平言地。令公言人。若

云天平座中呈令狐令公。則曉然矣。憲宗元和十四年己亥。楚拜中書。文宗太和三年己酉。鎮天平。則在天平座中呈令狐令公甚合。

朱彝尊

0 補注云。公字疑衍。良然。

何焯

〔讀書記〕

7 第七。自謂。

〔評本〕

0 朱云。公字衍。公非衍字。屬座字讀。

姚培謙

詳詩句。必令狐坐中姬。有曾爲女道士者。故有此作。罷執寬旌上醺壇。從女道士還俗也。慢粧。猶薄粧。嬌樹。必嬌貯之譌。淡掃蛾眉。而貯以水晶之盤。奇豔愈發矣。更深眉斂。衣薄玉寒。猶帶不甘入俗之意。白足句指蔡。青袍句自謂。奇豔奪人如此。雖後堂

密坐。猶恨看不分明。不謂之天上人。不可得耳。

屈復

首二句。寫妓星技。先執寬旌而上醺壇罷。乃改妝而歌舞也。及夜深王寒。故斂眉欲訴。令人徒生敗道休官之想。而體統尊嚴。未敢肆觀也。青袍御史。指坐客而言。不必義山自謂。天平公座一讀。與下令狐公無妨。舊注全非。

程夢星

唐詩紀事云。令狐文公在天平。後堂宴樂。蔡京時在座。是則令狐令公之爲令狐楚明矣。朱長孺誤讀爲天平公。遂疑下文不應又出令狐公。著有論說。旣而以爲不當。又作補箋引據唐人朱閱書彭陽公碑陰云文公尹洛禮陳商爲鄆薦蔡京蒞京辟李商隱。遂定此詩爲作於令狐楚鎮鄆之日。但疑天平公座中公字恐是衍文。後又載潘昉之論。以天平公座四字斷句。以爲公座者卽紀事所云後堂宴樂也作天平公讀者失之。愚謂公座二字。潘說甚是。天平之不得稱公。猶之前開府之不可稱公一例也。蓋公上只貫其郡望。不冒以官地。前獻寄舊府開府封公詩423。愚論之詳矣。中聯。白足禪僧。本題注爲蔡京。青袍御史。不知所謂。若以爲自謂。此時方署巡官。安得據兼御史。若別有一人。同在座中者。則當與京一例。於題注明。若亦屬京。則京爲御史。在大中三年。去太和三年遠矣。事不可考。姑且闕疑。又按朱注。云座中有官妓。非也。大都女道士之在鎮府醺祭者。故起句如此。而末句又有不敢公然之語。若妓則醺壇何指。又何不可子細看乎。

紀昀

〔詩說下〕何以不取天平公座中呈令狐令公也。曰。蒙泉（宋弼）以爲後四句。粗淺也。前四句。亦自不佳（評本「皆不成語」）。○問青袍御史之意。曰。冊府元龜載唐時風憲。不與燕會。故曰擬休官也（評本「唐時御史。不預宴會。冊府元龜載李栖筠事可證。故曰青袍御史擬休官」）。

〔律髓刊誤〕唐時御史。不得與宴會。觀李栖筠傳可見。故有休官句。

馮浩

0 唐詩紀事（四九蔡京條）邕州蔡大夫京者。故令狐文公鎮滑臺日。於僧中見之曰。此童眉目疎秀。進退不憚。惜其單幼。可以勸學乎。師從之。乃得陪學於相國子弟。後以進士舉上第。尋又學究登科。作尉畿服。…（紀事）又曰。令狐文公在太平。後堂宴樂。京時在坐。故義山詩云。謂京曾爲僧也。按。彭陽公爲鄆薦蔡京。正在此時。詳年譜。水經（河水）注云。滑臺城。卽鄭之廩延也。舊書志。河南道。滑州。以城有古滑臺也。滑鄭漢三州節度。治滑州。貞元元年。號義成軍。令狐宦蹟。並未蒞滑臺。紀事誤也。京以進士登學究科。時謂好第。惡登科。唐摭言載之。而摭言載反初及第。並不及京。豈幼年事在所略歟。公座既非可專指一人。義山年少。何可肆言。紀事所載。殊不可信。但公座不當實有僧流。故且存其說。舊題十五字。當卽本之紀事者。縱或有。然亦宜附注題下耳。

2 徐（逢源）曰。嬌樹。暗用瓊樹朝朝新之語。

3·4 徐（逢源）曰。唐時女冠。出入豪門。與士大夫相接者甚多。或令狐家妓曾爲之。此詩似文公命賦。錢（良擇）曰。豔語必極深婉。亦天賦也。

5·6 按。幕官帶御史銜者。已詳年譜（太和三年·大中元年）。全唐詩。劉得仁有送蔡京侍御赴大梁幕詩。則京又曾爲汴幕憲官。不知其在何時也。上句若果指蔡。此句亦當指蔡。愚固不能信之。

〔註補〕

5 按蔡京事蹟。雲溪友議曰。楚鎮滑臺之日見於僧中。令京挈瓶鉢云云。似紀事所本耳。法書苑。天平節度使廳紀。太和五年。劉禹錫撰。沙門有隣八分書。可見令狐與禪僧往來。寧必以蔡京當之耶。

張采田

〔辨正〕豔詩中最深婉者。措語鮮麗而有神味。絕非西崑塗澤所及。紀氏不好香奩體。而以爲不成語。過矣。故余嘗謂紀氏論詩。皆以好惡爲是非。如此則當將玉谿一集。付諸劫火。點勘醜詆。意何爲耶。○此疑公座中有官妓曾爲女冠者。故有首二句。唐時女冠。出入貴人家不避也。白足二句。疑必有所指。不然。措辭何得乃爾。唐詩紀事謂指蔡京。似之。故別本題下有義山自注。馮注乃疑爲後人所添。誤矣。

〔會箋〕舊本題下。皆有此十五字。馮編從刪。此公座中當有官妓爲女冠者。白足。調京。青袍。別指同舍。詩疑令狐命賦。故云。呈令狐令公。不然。義山年少。措詞何一無忌憚乃爾。

近代注釋

〔森槐南〕上卷一七九頁。〔劉若愚〕一一八頁。

* *

0 天平 〔劉禹錫天平軍節度使廳壁記〕元和十四年春二月。王師

平河南負固之地十有二州。三月。有詔。其以曹濮隸鄆為一隅。

按部三郡。統兵三萬。乃新其軍。錫號天平。大和三年冬。天平

監軍使以故疾病聞。上方注意治本。乃以牙璋玉節鼎右僕射官稱。

賜東都留守令狐公曰。予擇文武惟汝兼。徒得君重。剛吾四支。

公西拜稽首。登車有耀。不踰旬抵治所。〔舊唐書一七二令狐楚傳〕

〔大和三年〕十一月。進位檢校右僕射・鄆州刺史・天平軍節度・

鄆曹濮觀察等使。奏故東平縣為天平縣。屬歲旱儉。人至相食。楚

均富贍貧。而無流亡者。〔大和〕六年二月。改太原尹。

公座 〔世說任誕〕阮籍遭母喪。在晉文王坐。進酒肉。司隸何

曾亦在坐。曰。明公方以孝治天下。阮籍以重喪顯於公坐。飲酒食

肉。宜流之海外。以正風教。〔宋書五二袁湛傳〕初。陳郡謝重。

王胡之外孫。於諸舅禮敬多闕。重子綯。湛之甥也。嘗於公座凌湛。

湛正色謂曰。汝便是兩世無渭陽情。綯有愧色。

令狐 令狐楚〔七六八—八三七〕。〔劉禹錫唐故相國贈司空令狐

公集紀〕公名楚。字殼士。燉煌人。今占數於長安右部。開成二

年十一月十二日。薨於漢中官舍。享年七十。嗣子左補闕絢集公

之文。成一百三十卷。現存的詩文は、全唐詩に五九首〔中華書局

本一九七〇頁〕、全唐文五三九至五四三に一二四首。舊唐書一七

二、新唐書一六六に立傳さる。なお下孝堂「劉禹錫與令狐楚」

〔中華文史論叢一三輯〕參照。

令狐楚に關する義山の詩文は、詩三篇〔彭城公薨後贈杜二十七

勝李十七潘二君並與愚同出故尚書安平公門下261〕城の字は馮浩の

校注に「當作陽」〔有感二首之二70〕〔撰彭陽公誌文畢有感485〕、

文一二篇〔文集一代彭陽公遺表〕〔又為令狐博士緒補闕絢謝宣祭

表〕〔文集六奠相國令狐公文〕〔又七樊南甲集序〕〔補篇一為彭陽

公興元請尋醫表〕〔又五上令狐相公狀七首〕。

令公 馮浩・張采田および王鳴盛はこの呼稱に誤りなしとする。

〔馮浩注〕舊書志。中書有中書令。唐之宰相曰中書。固以此世。

令狐雖未實進中書令。而香山集中亦稱令狐令公矣。〔蛾術編七七〕

令狐楚必贈帶中書令銜。故稱為吏部相公。而天平公座詩。已稱為

令狐令公也。新舊書楚本傳。皆不言其帶中書令銜。〔張采田會箋

附載〕近閱王西莊蛾術編。其中小有新意。而疵者甚多。又云。

令狐楚：新舊書楚傳皆不言其帶中書令銜。不知中書令為中書省尊

官。楚雖未帶此銜。以其曾同中書。亦可稱令公。白香山集已如是。

非史有漏也〔中華書局本二〇九頁〕。

岑仲勉は相公の誤りとする。〔此特涉上「令」字而訛相公為令

公耳。〕〔唐史餘藩二五〇頁〕馮浩があげた白樂天の詩は「奉和汴

州令狐令公二十二韻」〔那波本五四・宋本二四〕だが、平岡武夫・

今井清校定本白氏文集では相公に改め、校記に、「金澤本管見抄

本作相是也。英華本〔卷二四五〕同。北京本校云集作令。」また顧

學頤校點本も文苑英華によって相公に改め、校注に、「唐代、凡

官中書令者、始得簡稱令公或中令、其以他官同中書門下平章事者、皆不得有此稱（令狐楚未官中書令）。而清人馮浩注李商隱詩、引白集此詩為據、王鳴盛『蛾術編』及近代張采田李譜『會箋』、均未是正馮說、反而以訛傳訛、助成其非、近人岑仲勉氏已略論及余復以六證明馮・王・張三說之誤、詳見拙著『白居易集編年考證』此題下考證。」（五二八頁）ちなみに全唐詩・全唐文收載詩文標題において、令狐楚を令公と記すのは義山と樂天の問題の兩作のみである。令はやはり「相」の誤りであろう。

蔡京 蔡京（？―八六二？）は義山とほぼ同年代の人物と見られる。義山より一年早い開成元年（八三六）の進士。晩年に鎮南西道節度使となったが、まもなく崖州に貶されて死。新唐書二二・中南蠻傳参照。ただし、新舊書には立傳されていない。全唐詩（中華書局本五三六二頁）に三首、全唐文七六〇に一首、作品が残る。

〔朱閱歸解書彭陽公碑陰〕公尹洛禮陳商。為鄆薦蔡京。蒞京辟李商隱。予偶不識公耳（唐文粹四六）。〔雲谿友議中買山讖條〕邕州蔡大夫京者。故令狐相公楚鎮滑臺之日。因道場見僧中令京翠於瓶鉢。彭陽公曰。此童眉目疏秀。進退不懾。惜其單幼。可以勸學乎。師從之。乃得陪相國子弟（原注 青州尚書緒。丞相綯。綸也）。後以進士舉上第。乃彭陽令狐公之舉也。尋又學究登科。而作尉畿服。：常稱宇內無人。對僧徒。則非大品之談。遇道流。則五千言之義。接儒士。自比端木之賢於仲尼。次論周易。則評九聖之謬。

來者縱得相許。有始而無卒焉。〔北夢瑣言二〕梁相張策嘗為僧。返俗應舉。亞臺（趙崇）鄙之。或曰。劉軻蔡京。得非僧乎。亞臺曰。劉蔡輩雖作僧。未為人知。翻然貢藝。有何不可。〔唐詩紀事四九蔡京條〕令狐文公在天平。後堂宴樂。京時在坐。故義山詩云。白足禪僧思敗道。青袍御史擬休官。謂京曾為僧也。

僧徒 〔南史二五到溉傳〕初與弟洽恒居一齋。洽卒後。便捨為寺。蔣山有延賢寺。溉家世所立。溉得祿俸。皆充二寺。因斷腥膻。終身蔬食。別營小室。朝夕從僧徒禮誦。〔韓愈送僧澄觀詩〕皆言澄觀雖僧徒。公才吏用當今無。

1 霓旌 〔文選一九宋玉高唐賦〕蜺為旌。翠為蓋。〔又八司馬相如上林賦〕天子校獵。乘鑣象。六玉虬。拖蜺旌。靡雲旗（張揖曰。析羽毛。染以五采。綴以縷為旌。有似虹蜺之氣也）。〔元結橘井詩〕如何躡得蘇君跡。白日霓旌擁上天。〔李益登天壇夜見海詩〕霞梯赤城遙可分。霓旌絳節倚綵雲。義山の文に〔補編九梓州州道興觀碑銘〕斯觀復建蜺旌。還張翠蓋。

醺壇 醺は唐代以前から盛ん行われてきた道教の祭儀で、醺壇すなわち祭壇を作ってさまざまな祈願をする。唐初の状態はたとえば〔辯正論二三教治道篇〕今之道士。：棄五千之妙門。行三張之徽術。如茅山道士陶隱居撰衆醺儀凡十卷。從天地山川。星辰嶽瀆。及安宅謝墓。呼召鬼神。所營醺法。備列珍奇。廣辦綾采。多用蒸魚鹿脯。黃白蜜料。清酒雜果。鹽鼓油米等。先奏章請喚將軍吏兵。道士等皆執手版。向神稱臣。叩頭再拜。求恩乞福。與俗並

同。既非出家。具造邪業（正藏五二冊四九九頁）。唐末の状況は、杜光庭の廣成集に收められる三百篇ばかりの醮詞を資料とし、「把（把）它略爲分類、則、解災・疾病・祈雨・通火・安宅・還願・三會・八節・六甲・甲子・庚申・修造・而其對象有、玉皇太一・三尊・衆神・五星・九曜・北斗・南斗・本命・二十八宿・后土・嶽瀆・五符・北帝・古城丈人眞君・天羅地網諸神、又有修堰醮水府・忠州謁禹廟・畫功德等。可見至杜光庭の時代——唐末、醮已超過一箇宗教的範圍、；深入民衆日常的信仰、羣斷他們一切的祭祀、於是、凡請道士來主持、略按科儀而行的祭祀、都可隨便稱爲「醮」了。」（李獻璋「道教醮儀的開展與現代的醮」中國學誌第五本）

先天年間の太清觀道士（前掲李獻璋論文）たる張萬福撰の「醮三洞眞文五法正一盟威籙立成儀・設壇座位第一」夫神道非形。至誠斯感。眞靈無象。哲必有方。修之者。須立壇位。以祈神應世。其壇請依靈寶招眞法。開東西南北王上五門。方二丈四尺。；立壇訖。置上清位於壇中稍近前南向。施青絳紋巾。以法籙開安座上。前設五尺盤三枚。第一章末には醮壇上の祭器の配圖が付載される。「又醮後諸忌第十三」凡醮可以飯食賢人道士。不得與雜俗昏穢之人。孝子婦人尤忌。；勿飲酒。其氣亂。勿食五辛。其氣昏。勿與別人同坐。其氣雜。これによれば醮後にはよく宴會が行われたらしいことが判明する。

2 慢粧 用例未見。二つの方向が考えられる。(1)「釋名釋言語」

慢。漫也。漫。漫心。無所限忌也。慢を好き放第な、でたらめなと

解すれば、結果的に慢粧は難い仕上りのまづい化粧の意になるか。(2)「劉孝綽同武陵王看妓詩」廻羞出慢臉。送態表頻蛾（初學記一五）。「白居易憶舊遊詩」修蛾慢臉燈下醉。急管繁絃頭上催。二例の慢は曼に通用とみてよいか。「楚辭招魂」蛾眉曼睩（王逸注 曼。澤也。睩。視貌。《補注》李善云。曼。輕細也。〔文選四一司馬遷報任少卿書〕今雖欲自雕琢。曼辭以自飾（李善注 如淳曰。曼。美也。〔杜篤論都賦〕曼麗之容不悅於目。鄭衛之聲不過於耳（李賢注 曼。美也）（後漢書列傳七〇上）。そこで慢粧は、きめ細かいしっとりした肌のきわだつ美しい粧い、の意か。

嬌樹 用例未見。なまめかしい女の姿を樹に見立てたのだろう。「梁武帝白紵辭二首之二」纖腰嫋嫋不任衣。嬌態特立獨爲誰。（玉臺新詠六王僧孺爲人寵姬有怨詩）可憐獨立樹。枝輕根易搖。已爲露所浥。復爲風所飄。逆に樹を女に見立てたのは「杜牧池州送孟遲先輩詩」煙濕樹姿嬌。雨餘山態活。

また端正な或いは端麗な男女の容姿を瓊樹・玉樹にたとえた例は「世說賞譽」王戎云。太尉神姿高徹。如瑤林瓊樹。自然是風塵外物。「陳後主玉樹後庭花詩」妖姬臉似花含露。玉樹流光照後庭。「南史一二張貴妃傳」後主每引賓客。對貴妃等游宴。則使諸貴人及女學士與狎客共賦新詩。互相贈答。采其尤艷麗者。以爲曲調。；其曲有玉樹後庭花。臨春樂等。其略云。璧月夜夜滿。瓊樹朝朝新。大抵所歸。皆美張貴妃孔貴嬪之容色。

水晶盤 この語は「碧城三首之一151」にも見え、朱鶴齡は「漢

成帝內傳」(楊太真外傳上所載)を引き、水晶盤上で舞ったという趙飛燕を連想するが、馮浩はこれを否定、董偃の玉晶の盤の故事を一應引いた上で、「水晶盤、專取清潔之意。不必拘典故。本集中慢裝嬌樹水晶盤、狀女冠之素艷矣。」と記す。集釋稿(二)本誌五四冊三九二頁参照。

ここでは壇上の祭器なのかもしれない。〔漢宮儀〕封禪壇上有白玉盤(文選二九張衡四愁詩之二「李善注」)。

3・4 〔李白擬古詩〕融融白玉輝。映我青蛾眉。寶鏡似空水。落花如風吹。〔徐安貞聞隣家理箏詩〕曲成虛憶青蛾斂。調急遙憐玉指寒。

3 更深 〔杜甫舟月對驛近寺詩〕更深不假燭。月朗自明船。〔杜牧寢夜詩〕蛩唱如波咽。更深似水寒。

蛾眉斂 〔玉臺新詠七蕭繹登顏園故閣詩〕妝成理蟬鬢。笑罷斂蛾眉。〔李百藥火鳳詞二首之二〕嬌頻眉際斂。逸韻口中香。

4 衣薄 〔玉臺新詠一〇王叔英婦暮寒詩〕逾寒衣逾薄。未肯懷腰身。〔李頎送相里造入京詩〕暖酒嫌衣薄。瞻風候雨晴。

玉艷寒 〔陸雲答大將軍顧令文詩五章之五〕惠音聿來。瓊華玉艷。〔文選一六江淹別賦〕珠與玉兮艷暮秋。羅與綺兮嬌上春。〔李賀正月詩〕錦牀曉臥玉肌冷。露臉未開對朝暝。

5 白足 〔高僧傳一〇曇始傳〕自出家以後。多有異迹。晉孝武太元之末。齋經律數十部。往遼東宣化。始足白於面。雖跣涉泥水。未嘗沾涅。天下皆稱白足和上(正藏五〇冊三九二頁)。〔魏書一一

四釋老志〕沙門惠始。：或時跣行。雖履泥塵初不汙足。色愈鮮白。世號之曰白脚師。〔劉禹錫送僧元嵩南游詩并引〕在席硯者多旁行四句之書。備將迎者皆赤髭白足之侶。：寶書翻譯學初成。振錫如飛白足輕。義山の文にまた〔文集四上河東公啓二首之一〕此則吹之以宋玉之風。照之以謝莊之月。彼則傳之於赤髭疏主。示之於白足禪師。

禪僧 〔權德輿和李中丞慈恩寺清上人院牡丹花歌〕龍眉倚杖禪僧起。輕翹繁枝舞蝶來。〔白居易重到江州詩〕醉客臨江待。禪僧出郭迎。

敗道 〔書大禹謨〕蠢茲有苗。昏迷不恭。侮慢自賢。反道敗德。〔莊子天下〕未敗墨子之道。〔西晉安法欽譯道神足經二〕不起自好益身敗道之行。從久遠遠已斷離身想之行(正藏一七冊八〇四頁)。〔北夢瑣言四〕唐張策早爲僧。敗道歸俗。後爲梁相。〔又六〕雙峯禪師。聚徒千人。談玄之盛。無能及也。一旦惑於民女。而敗道焉。是知淫爲大罰。信矣。

6 青袍御史 〔大唐六典一三御史臺〕監察御史十人。正八品上。：掌分察百僚。巡按郡縣。糾視刑獄。肅整朝儀。〔又四尚書禮部〕凡百僚冠笏繖轡珂珮各有差。凡常服亦如之(原注 親王三品以上二王後。服用紫。飾以玉。五品以上服用朱。飾以金。七品以上服用綠。飾以銀。九品以上服用青。飾以鍮石。流外庶人服用黃。飾以銅鐵)。〔通典六一君臣服章制度〕貞觀四年制。三品以上服紫。四品五品以上服緋。六品七品以上服綠。八品九品以上服青。婦人從夫

之色。仍通服黃。節度使の屬僚の肩書としての御史の官職については礪波護「唐代使院の僚佐と辟召制」(神戸大學文學部紀要2)を参照のこと。

〔玉臺新詠一古詩八首之八〕青袍似春草。長條隨風舒。〔劉長卿送史九赴任寧陵兼呈單父史八時監察五兄初入臺詩〕繡服棠花映。青袍草色迎。〔白居易送令狐相公赴太原詩〕青衫書記何年去。紅旆將軍昨日歸。義山にまた〔偶成轉韻562〕青袍白簡風流極。碧落紅蓮傾倒開。〔文集一爲濮陽公陳情表〕臣此時尙持白簡。猶著青袍。〔馮注引徐樹穀曰。時王茂元爲呂元膺防禦判官。判官例帶御史銜。所謂青袍御史也。〕

休官 〔靈澈東林寺酬章丹刺史詩〕相逢盡道休官好。林下何曾見一人。〔張籍送白賓客分司東都詩〕老人也擬休官去。便是君家池上人。〔元稹除夜酬樂天詩〕休官期限元同約。除夜情懷老共諧。

7 雖然 〔李白秋山寄衛張卿及王徵君詩〕月華若夜雪。見此令人思。雖然剡溪興。不異山陰時。〔岑參題虢州西樓詩〕明主雖然棄。丹心亦未休。なお通俗編三三に晉書八王傳序を引く。「然雖克滅權逼、猶足維翰王畿。」

同是 〔玉臺新詠一爲焦仲卿妻作〕同是被逼迫。君爾妾亦然。

將軍客 〔漢書五〇汲黯傳〕大將軍青既益尊。姉爲皇后。然黯亢禮。或說黯曰。…大將軍尊貴。誠重。君不可不拜。黯曰。夫以大將軍有揖客。反不重耶。〔師古曰。言能降貴以禮士。最爲重也。〕

〔張采田會箋太和三年〕義山從令狐楚天平幕辟。署巡官。將軍

すなわち節度使たる令狐楚の幕客としての義山の所遇は「文集六 眞相國令狐公文」天平之年。大刀長戟。將軍樽旁。一人衣白。十年忽然。蜩宣甲化。人譽公憐。人譖公厲。公高如天。愚卑如地。〔補編五上令狐相公狀七首之一〕某才乏出群。類非拔俗。…徒以四丈東平。方將尊醜。是許依劉。每水檻花朝。菊亭雪夜。篇什率徵於繼和。盃觴曲賜其盡歡。委曲款言。綢繆顧遇。

8 〔馮浩注〕水經(穀水)注(引文士傳)。魏文帝在東宮。宴諸文學。酒酣。命甄后拜坐。坐者咸伏。惟劉楨平仰觀之。太祖以爲不敬。送徒隸簿。今華林隸簿。昔劉楨磨石處也。暗用此典。雅切公坐。魏志注。作楨獨平視。また世説言語篇の劉公幹以失敬罹罪條の注に引く典略、文士傳ともに「平視」に作る。

公然 〔杜甫茅屋爲秋風所破歌〕公然抱茅入竹去。唇焦口燥呼不得。〔韓愈永貞行〕公然白日受賄賂。火齊磊落堆金盤。

子細 〔魏書四一源懷傳〕性寬容簡約。不好煩碎。恒語人曰。爲貴人。理世務。當舉綱維。何必須太子細也。〔杜甫九日藍田崔氏莊詩〕明年此會知誰健。醉把茱萸子細看。

* * *

0 標題を馮浩本は最初の十字に改め、以後張采田(會箋)・森槐南・劉若愚および安徽師大年表、近代の諸本はこれに従う。その方が理に適うが、集本でこうしたテキストはなく、また律體本はやや中途半端なカタチで、しかも方回の意改の可能性もある。いま、一應もとのままにしておく。

現行の義山の集中ごく早期の作とみとめうる、ほとんど唯一の詩である。馮・張・安徽師大いずれも大和四年（八三〇）に係ける。ただ、令狐楚の鄆州在任は前後四年にわたり、この一年に限定できるほどの證憑は別にはないはずだ。それでも義山の艶詩としては、珍しく詩の外的狀況が判然としており、詩中の遊戲的氣分もまた明確なので、諸注釋に顯著な差異はない。登場する女性の身分についてだけ説が分れる。(a)官妓説（朱鶴齡・屈復）、(b)女冠あがりの家妓説（姚培謙・徐逢源・馮浩・張采田）、(c)女冠説（程夢星）。森槐南および劉若愚が従う(c)説が妥當である。なお劉は女冠を複數(nuns)とする。

1・2 道教の醮の儀式用の虹の旌旗を手を祭壇へ上つてもろもろの行事をなし終えた女道士。その立ち姿は化粧らしい化粧もせぬのにすばらしく、さながらあでやかな花木そのまま、壇上の大きな水晶の盤に照り映える。劉若愚は1句を、霓旌ヲ執ルヲ醮メ醮壇ニ上ル、とよむが、舊注による方がやはり無難か。

3・4 醮儀終了のあとは節度使閣下主催の公式宴會となる。女道士はいよいよ本領「唐時女冠の媚妓性質」（蘇雪林「玉溪詩謎」）の發揮となるわけだろう。ところで森槐南は2句を「女道士が醮壇上の在様を追敘するの」だという。ほぼその線に沿って解する。つまり作者の眼は、現在の宴席における女冠を透して、さきほどまでの、ある意味ではより一層妖艶なその姿態を寫し出した、とみたい。3・4は作中の問題の部分で、詩句自體はむしろ宗教的

エクスタシーの匂いがするのに對し、全篇の構成からみれば「公座」の女冠描寫とせねば不自然だからである。

さて、目前の美しい女道士だが今しがたまで醮壇上にあつて——夜が深まるにつれ感情は昂まり、祭祀の神々に向い必死に祈り訴えかけようとして、形のいい長い眉根が惱ましげにひそめられ、そして無我夢中、興奮の極に達する。が、身につける衣裳のあまりの薄さゆえに（あるいは無意識のうちに自ら着衣をぬいで行ったか）さすがにその興奮も次第に冷え、その醒めぎわ玉のよいうな肢體は思わず寒さにふるえた——あのときは今よりさらに美しい、まるで仙女そのものに見えたが……。

5・6 このような女性を前にしては、絶対に汚れぬ常に清淨無垢まっ白い足を持つ禪僧も佛の道を踏み敗る破戒僧になって構わぬと思ひ、綱紀肅正がお役目の青い官服を着こんだ監察御史どのもお役目すてて辭職しようとするのだ。要するに坊主も——これは蔡京の存在からの連想——役人も、聖も俗もこの美女の魅力にはかなうまいと皮肉つたままで、義山自身を含め特定の人物をさささぬで議論するのは無用である。いうまでもなく、義山はこの時點で監察御史の肩書は持たない。

7・8 しかしながら小生はといえば、座中の諸先輩と同じく令狐將軍閣下の幕賓ではありますが、若輩末輩の身としてこのような神女などはとてもまぶしく、遠慮もなくじろじろ觀賞することはとても致しかねる次第でございます。（荒井 健）

和人題眞娘墓眞娘吳中樂妓。墓在虎丘山下寺中。 墓 530

人の眞娘の墓に題するに和す眞娘は吳中の樂妓。墓は虎丘山下の寺中に在り。

虎丘山下劍池邊 虎丘山下 劍池の邊

長遣遊人歎逝川 長に遊人をして逝川を歎かしむ

賈樹斷絲悲舞席 樹に冑ねし斷絲に 舞席を悲しみ

4 出雲清梵想歌筵 雲を出ずる清梵に 歌筵を想う

柳眉空吐效顰葉 柳眉は空しく效顰の葉を吐き

榆莢還飛買笑錢 榆莢は還た買笑の錢を飛ばす

一自香魂招不得 一たび香魂の招くこと得ざりしより

8 祇應江上獨嬋娟 祇應に江上に 獨り嬋娟たるべし

校

0 唐詩類苑二七 (地部陵墓類)

題下注十四字 唐音統籤なし 朱鶴齡本・全唐詩・馮浩本「原

注」二字を冠す 張采田會箋「自注」二字を冠す

5 效 錢本「効」

顰 統籤・毛本・朱鶴齡本・全唐詩「顰」

8 獨 高麗本「泣」

韻

下平一先 (邊) 二仙 (川・筵・錢・娟) 同用

*

何焯

〔評本〕

2 領起和人。

3・4 三勝四。然非四。則發端無呼應。

5・6 五六。俗體。

陸鳴皋

清韻移人。晚唐中佳構也。

姚培謙

此爲好色者作點化語也。虎丘爲遊人集聚之地。而眞娘墓常深感歎。甚矣世人之好色也。於是搖曳斷絲。猶悲舞態。悠揚清梵。猶想歌

喉。意中不啻若眞娘之尙在者。豈知柳眉不解效顰。榆莢非能買笑。

即使眞娘之魂未散。猶在煙波縹緲之間。何與人事。而感歎若是。

夫亦可以悟矣。

屈復

一二。虛破墓。三四。卽景想昔日之妙舞清歌。今皆何在。五六。

想見顏色。結言惟江上明月獨存耳。

紀昀

〔詩說下〕何以不取和人題眞娘墓也。曰。俗體 (評本「俗格」)。

馮浩

和詩結歸原唱。唐人常例。玩此結句。豈原唱爲女冠之流耶。余初

疑借眞娘以悼從事吳中者。非也。

〔初稿本〕似悼吳中從事之人。其人或在吳幕。或本吳人。三四。

追想。五六。言後進慕其風流。幕府別有延辟。結言往者既已矣。

來者方獨擅美。暗歸原唱。唐人和詩常例。可與送李郢 384 末聯參看。

非實賦也。雲溪友議曰。吳國貞娘。時人比於錢塘蘇小小。

張采田

〔辨正〕此等詩何等雅切。雖非義山極品。然晚唐中自不易多得。

以爲俗格。眞所不解。○義山燕臺所思之人。自湘川遠去後。疑流轉吳地而歿。細玩河內詩閨門一篇可悟。故送李郢至蘇州384有蘇小小墳今在否。紫蘭香徑與招魂之句。此篇其假貞娘以暗悼所歎耶。晦其意。故曰和人耳。否則詩中并不和意。豈名手賦詩。而疎於法律如是哉。至馮氏疑原唱爲女冠。則更馮虛臆測矣。

〔會箋〕自注。貞娘吳中樂妓。墓虎邱山下寺中。

金聖嘆

起句七字。卽貞娘墓。次句七字。卽人題也。胃樹斷絲。出雲清梵。卽起句七字。悲舞席。想歌筵。卽次句七字也。易解。

柳眉效顰。榆莢買笑。言人來虎丘。至今徘徊不盡。然而貞娘化去。乃更無有蹤影也。○前解。自欲題貞娘。則云斷絲舞席。清梵歌筵。便謂如或賭之。後解。笑人不必題貞娘。則又云柳空效顰。榆能買笑。便又謂更沒交涉。眞乃筆隨手轉。理逐言成。只許州官放火。不許百姓點燈矣。

胡以梅（女古迹類）

原注云。墓在寺中。按劍池。在寺內千人石之傍。故云劍池邊。言墓也。而第二卽承之以嘆逝川。上下通氣妙。絲飄如舞。梵響似歌。故想及于向日歌舞之筵席。柳眉效顰。新葉未舒。有綢促之意。然人已不見。不過是草木。故曰空。榆莢飛來。似滿地金錢。豈眞還

欲買笑乎。全在虛字生情。只因李文肅少虛字。便遜遠。然效顰妙在下一層。效字尤精。買字更切于錢。落想秀極。結言香魂不可招。止有江上月中之嬋娟耳。胃。纏也。

* *

0 〔通志七〇藝文略八〕虎邱寺題貞娘墓詩一卷 唐劉禹錫等二十三人。

貞娘はいつごろの人かはっきりしないが、貞娘墓が中唐以降に流行の詩題になったことが知られる。通志略著録のこの集は傳わらず、五朝小説本貞娘墓詩一卷は、義山を含め唐人六、宋人一、明人三、計十篇の詩をあつめるのみ。

いま唐代の詩家七人の作を掲げておく。

〔李紳貞娘墓詩〕吳之妓人。歌舞有名者。死葬於吳武丘寺前。

吳中少年。從其志也。墓多花草。以滿其上。嘉興縣前。亦有吳妓人蘇小小墓。風雨之夕。或聞其上有歌吹之音_{以上}。一株繁艷春城盡。雙樹慈門忍草生。愁態自隨風燭滅。愛心難逐雨花輕。黛消波

月空蟾影。歌息梁塵有梵聲。還似錢塘蘇小小。祇應廻首是卿卿。

〔白居易貞娘墓詩墓在虎丘寺〕貞娘墓。虎丘道。不識貞娘鏡中面。

唯見貞娘墓頭草。霜摧桃李風折蓮。貞娘死時猶少年。脂膚裏手不牢固。世間有物難留連。難留連。易鎖歇。塞北花。江南雪。〔又

寄李蘇州兼示楊瓊詩〕貞娘墓頭春草碧。心奴鬢上秋霜白。

〔劉禹錫和樂天題貞娘墓詩〕薔薇林中黃土堆。羅襦繡黛已成灰。芳魂雖死人不怕。蔓草逢春花自開。幡蓋向風疑舞袖。鏡燈臨曉似

妝臺。吳王嬌女墳相近。一片行雲應往來。

〔沈亞之虎丘山眞娘墓詩〕金釵淪劍壑。茲地似花臺。油壁何人值。錢塘度曲哀。翠餘長染柳。香重欲薰梅。但道行雲去。應隨魂夢來。

〔張祐題眞娘墓在虎丘西寺內〕佛地葬羅衣。孤魂此是歸。舞爲胡蝶夢。歌謝伯勞飛。翠髮朝雲在。青蛾夜月微。優心一花落。無復怨春輝。

〔雲溪友議中譚生刺條〕眞娘者。吳國之佳人也。比於錢塘蘇小。死葬吳宮之側。行客感其華麗。競爲詩題於墓樹。櫛比鱗臻。有舉子譚銖者。吳門之秀士也。因書一絕。後之來者。觀其題處。稍息筆矣。詩曰。武丘山下塚纍纍。松柏蕭條盡可悲。何事世人偏重色。眞娘墓上獨題詩。〔唐詩紀事五六譚銖條〕咸通末。鄭渾爲蘇州都郵。銖爲饒院官。〔登科記考二二〕永樂大典引蘇州府志。談銖。會昌元年登第。

〔羅隱姑蘇眞娘墓墓在虎丘西寺內〕春草荒墳墓。萋萋向虎丘。死猶嫌寂寞。生肯不風流。皎鏡山泉冷。輕裾海霧秋。還應伴西子。香逕夜深遊。なお五朝小説本は劉禹錫の作を載せない。

虎丘山下寺 〔王劭舍利感應記〕皇帝以仁壽元年六月十三日。將於海內諸州。選高爽清靜三十處。各起舍利塔。三十州同刻。十月十五日正午。入於銅函石函。一時起塔。〔又〕蘇州。於虎丘山寺起塔。其地是晉司徒王珣琴臺。舍利初發州。天降雨。未至寺日便出。乃有雜色雲。臨輿而行。徘徊不散。至於塔所。空裏有音樂之聲。既而天又陰晦。舍利將下雲暫開。舍利入函雲復合。先是

寺內鑿石井。井吼二日。蓋舍利將來之應也〔廣弘明集一七佛德篇〕〔正藏五二冊二一三至二一六頁〕〔劉長卿武丘寺詩〕青林虎丘寺。林際翠微路。仰見山僧來。遙從飛鳥處。

1 〔吳地記〕虎丘山。避唐太祖諱。改爲武丘。又名海湧山。在吳縣西北九里二百步。闔閭葬此山中。〔史記〕〔集解引越絕書〕云。闔閭塚在吳縣門外。以十萬人治塚。取土臨湖。葬經三日。白虎踞其上。故名虎丘山。吳越春秋云。闔閭葬虎丘。十萬人治。葬經三日。金精化爲白虎。踞其上。因號虎丘。秦始皇東巡至虎丘。求吳王寶劍。其虎當墳而踞。始皇以劍擊之不及。悞中于石遺跡。其虎西走二十五里。忽失去。今虎嚙。唐諱虎。錢氏嚙嚙。改爲計墅。劍無復獲。乃陷成池。古號劍池。池傍有石。可坐千人。號千人石。其山本晉司徒王珣與弟司空王珉之別墅。咸和二年。舍山爲東西二寺。立祠於山。寺側有眞娘墓。吳國之佳麗也。行客才子。多題詩墓上。有舉子譚銖。作詩一絕。其後人稍稍息筆。

劍池 〔杜甫壯遊詩〕劍池石壁仄。長洲菱荷香。〔白居易重客劉和州詩〕花邊妓引尋香逕。月下僧留宿劍池。可惜當時好風景。吳王應不解吟詩。

池邊 〔文選二八陸機塘上行〕被蒙風雲會。移居華池邊。〔玉臺新詠四施榮泰雜詩〕鐙珮玉池邊。弄笑銀臺側。

2 長遣 〔杜甫蜀相詩〕出師未捷身先死。長使英雄淚滿襟。〔白居易別春爐詩〕誰能共天語。長遣四時寒。

遊人 旅の人、〔玉臺新詠五沈約詠柳詩〕遊人未應去。爲此歸卿

多。爲此歸卿多。また行樂の人、「韓愈廣宣上人頻見過詩」天寒古寺遊人少。紅葉窓前有幾堆。〔二月二日100〕遊人意の注參照、集釋稿(本誌五六冊二九九頁)。

歎逝川 「論語子罕」子在川上曰。逝者如斯。不舍晝夜。〔文選一三潘岳秋興賦〕臨川感流以歎逝兮。登山懷遠而悼近。〔鮑照松柏篇〕東海迸逝川。西山導落暉。〔文選五八王儉褚淵碑文〕感逝川之無捨。哀清暉之眇默。〔王維過沈居士山居哭之詩〕逝川嗟爾命。邱井嘆吾身。

3・4 「玉臺新詠八徐陵走筆戲書應令」舞席秋來卷。歌筵無數塵。〔又九徐君蒨別義陽郡二首之一〕歌聲臨樹出。舞影入江流。

3 冒樹 用例未見。〔文選一一鮑照蕪城賦〕澤葵依井。荒葛冒塗(李注 冒。猶縮也)。

斷絲 「玉臺新詠八劉邈見人織聊爲之詠」振蹕開交縷。停梭續斷絲。〔虞世南中婦織流黃詩〕綜新交縷澁。經脆斷絲多。ただしこのは Gossamer だが、Gossamer をやして断絲といった例は未二見。〔徐陵長相思二首之一〕柳絮飛復聚。遊絲斷復結。〔李賀殘絲曲〕垂楊葉老鶯啼兒。殘絲欲斷黃蜂歸。

舞席 「玉臺新詠五沈約脚下履詩」裾開臨舞席。拂袖繞歌堂。出雲 「玉臺新詠五何遜日夕望江贈魚司馬詩」早雁出雲歸。故

燕辭檐別。〔王勃遊山廟詩序〕玉房跨宵而懸居。瓊臺出雲而高峙。清梵 「異苑五梵唱條」陳思王曹植。字子建。嘗登魚山。臨東阿。忽聞巖岫裏有誦經聲。清通深亮。遠谷流響。肅然有靈氣。不

覺斂襟祇敬。便有終焉之志。即效而則之。今之梵唱。皆植依擬所造。〔梁元帝鍾山飛流寺碑〕清梵夜聞。風傳百常之觀。寶鈴朝響。聲揚千秋之宮。〔庾信奉和闡弘二教應詔〕魚山將鶴嶺。清梵兩邊來。歌筵 「玉臺新詠五何遜學青青河邊草詩」歌筵掩團扇。何時一相見。〔李白魯中送二從弟赴舉之西京詩〕舞袖拂秋月。歌筵聞早鴻。

5・6 「白居易靖安北街贈李二十詩」榆筵拋錢柳展眉。兩人並馬語行遲。

5 「何遜邊城思詩」柳黃未吐葉。水綠半含苔。〔駱賓王王昭君詩〕粧鏡菱花暗。愁眉柳葉顰。〔李白效古二首之一〕蛾眉不可妬。況乃效其顰。

柳眉 「白居易長恨歌」芙蓉如面柳如眉。對此如何不淚垂。〔謝觀漢以木女解平城圍賦〕旣拂桃臉。旋妝柳眉。目成可望。肉視無遺。新唐書藝文志に「謝觀賦八卷」を録し、盧獻卿と盧肇の中間に排列するので、謝觀は義山と並世の人物と思われる。

效顰 「莊子天運」故西施病心而顰其里。其里之醜人。見而美之。歸亦捧心而顰其里。…彼知顰美。而不知顰之所以美。〔王維西施詠〕持謝隣家子。效顰安可希。〔錢起崔明府拜補闕詩〕惜哉效顰客。心想勞嬋娟。

6 「初學記三榆莢雨條」三月雨爲榆莢雨。汜勝之書。三月榆莢雨時。高地強土可種木。〔漢書二四下食貨志〕漢興。以爲秦錢重難用。更令民鑄莢錢(如淳曰。如榆莢也)。〔文選三六王融永明九年

策秀才文」但赤側深巧學之患。榆莢難輕重之權。「庚信燕歌行」桃花顏色好如馬。榆莢新開巧似錢。

買笑錢 「崔駰七依」美人進以承宴。調歡欣以解容。廻顧百萬。

一笑千金。「玉臺新詠九鮑照代白紵歌辭二首之二」齊謳秦吹盧家弦。千金顧笑買芳年。「江總內殿賦新詩」三三二八佳年少。百萬千金買歌笑。「劉禹錫懷妓四首之二」情知點污投泥玉。猶自經營買笑金。「杜牧爲人題贈二首之一」我乏青雲稱。君無買笑金。

7 「禮記檀弓下」復。盡愛之道也。有禱祠之心焉（鄭注 復謂招魂。且分禱五祀。庶幾其精氣之反）。「張籍征婦怨詩」萬里無人收白骨。家家城下招魂葬。義山にまた「汴上送李郢之蘇州384」蘇小小墳今在否。紫蘭香徑與招魂。なお杜甫（彭衙行「剪紙招我魂」寄高適「難招病客魂」）や李賀（致酒行「我有迷魂招不得」）の用例では、楚辭と同じくいずれも生者の招魂である。

一自 「杜甫復愁十二首之五」一自風塵起。猶嗟行路難。「白居易道州民樂府」一自陽城來守郡。不進矮奴頻詔問。義山にまた「有感311」一自高唐賦成後。楚天雲雨盡堪疑。

香魂 「徐陵爲羊兗州家人答鮑鏡詩」不見孤鸞鳥。香魂何處來。「沈佺期天官崔侍郎夫人盧氏挽歌」偕老言何謬。香魂事永違。「李賀秋來詩」思牽今夜腸應直。雨冷香魂弔書客。義山の類似例「燕臺詩・春542」風光冉冉東西陌。幾日嬌魂尋不得。

8 (1)姚培謙說——特に注の必要なし。(2)屈復說——「劉長卿湘妃詩」帝子不可見。秋風來暮思。嬋娟湘江月。千載空蛾眉。(3)胡梅

說——嬋娟の指示對象として月のほかに「列仙傳上」江妃二女。不知何所人也。出遊於江漢之涓。…靈妃艷逸。…時見江涓。麗服微步。流盼生姿（道藏本）。「文選二三阮籍詠懷詩十七首之二」二妃遊江濱。逍遙順風翔。「江總新入姬人應令」非是妖姬度江日。定言神女隔河來。

祇應 「杜甫舟中詩」飄泊南庭老。祇應學水仙。「白居易五年秋病後獨宿香山寺三絕句之一」從此香山風月夜。祇應長是一身來。嬋娟 西京賦以下の用例は「霜月8」の注參照、七絕集釋稿（一）本誌五〇冊四六一頁。

* * *

0 蘇州の虎丘山寺にある眞娘の墓は多數の作者が競って詩を題したといひ、義山の詩を同題の現存作品と比べると、類句がすぐ目につく。この場合「人」とは特定の一人でなく他の人々を意味するように思われる。あるいは當時すでにいくつかの作を収めた詩集が存在していたのだろうか。馮浩も張采田も、この詩に關しては現地を訪れて書いたとは全く考えなかったらしい。いずれも不編年。安徽師大年表も同じ。なお張采田は題下注十四字を「自注」とするが、やはり朱鶴齡以下のように「原注」にとどめる方が無理だろう。逆に胡震亨が注自體を削ってしまったのは、自注とみとめなかったためか。胡氏は題注に對してしばしば「自注」と書き加えている。七律では留贈長之146、贈別前蔚州契苾使君529など。舊解は、(a)純粹の題墓の作（姚培謙・屈復・金聖嘆・胡以梅）、

(b)知友・愛人追悼の意を暗藏(馮浩初稿・張采田辨正)、(c)原詩は女道士を詠じた作(馮浩)、三様になる。いま(a)をとる。

1・2 吳の國は虎丘山下の古寺、寺内の劍池のほとり——なる樂妓眞娘の墓——に遊ぶ者は水を眺めて、逝く川を、もはや返らぬときを嘆く思いに胸をつかれる、その思いの丈はとわに變らぬ。

3・4 梢にたゆとう無數の斷絲を眼にしては、かつての日眞娘が優雅に袖ひるがえして舞った席上が悲しく偲ばれ、雲間にとどく清らかな聲明を耳にしては、かつての日の澄みきった歌聲ひびく宴が想いおこされる。この一聯は、失われた過去の、華やかな歌舞宴席の幻影を追いつめてゐるのだが、比較的新味のある3句に對し、4句は先行作品の平板な譌案とも見え、それが「三勝四」(何焯)とされるゆえんであらうか。

5・6 あたかも春、ようやく緑の芽生える季節。柳は、かの絶世の美人西施にもたぐうべき女——眞娘の眉をまねようと、懸命に若葉を吹き出すが、肝心の女がとうにおらない今では全く空しいわど。楡は、世の君主たちが一笑を得んために粉骨砕心した褒姒か楊貴妃のような女——眞娘の歡心を買おうと、手持ちの莢の小判を懸命にまぎちらすが、今からでもまだまにあうつもりなのか。多數の助字を巧みに利かせて詩を作るのは義山の一特色だが、ここでも胡以梅の指摘があるとおりで、この一聯はいかにも輕妙機智的な仕上りである。ただ、このあたりを「俗格」とみるか「雅切」とみるかが評價の分れ目だ。

金聖嘆は3・4を主觀的な哀感の表現、5・6を客觀的な嘲戲の表現と對立させて論じる。ややうがちすぎかもしれないが面白い。

7・8 全體としてさほど問題のない本作品で、尾聯のみ解釋が分れる。(1)姚培謙説は最も素直で、一旦みまかつて後もはや招き寄せられなかった香わしい眞娘の亡魂は、江上煙波縹緲たるあたりを知る人もなくあでやかにさまよい續けているにちがいない、となる。(2)(3)屈復・胡以梅説では、眞娘の魂氣が放散して後ひとり嬋娟たるのは姮娥ないし江妃のみ、となる。8句の獨を「泣」とする高麗本に従うならば、「嬋娟泣く」または「泣キテ嬋娟」とよみ、姚培謙説の方向に解せざるをえないだらう。

(矢淵孝良)

無題 90 《以下附載》

近知名阿侯 近ごろ知る 名は阿侯

住處小江流 住む處 小江流る

3 腰細不勝舞 腰細く 舞うに勝えず

眉長唯是愁 眉長く 唯だ是れ愁う

黃金堪作屋 黃金もて 屋を作る堪きに

6 何不作重樓 何ぞ重樓を作らざる

校

0 唐詩類苑一三八（人部閨情類）

高麗本墨筆校注「錢朱本並無此」（しかし錢本・朱本ともに本篇を缺いてはいない。懷德堂藏高麗本は稀に墨校あり）

3 勝 統鑑「成」 馮浩本校注「一作成」

韻

下平十八尤（流・愁）十九侯（侯・樓）同用

*

吳喬

1 喬曰。以莫愁比楚。以阿侯比綯。日近知名。則知是湖州被召時作。

4 比綯之才龍。

6 望其有韋平之拜。

徐德泓

首二句言人。三四句言貌。所當金屋貯之者也。金可作屋。更可作樓。甚言人好色之心。無有窮盡。是又以謾語爲諷者。

姚培謙

金屋深藏。豈如作重樓以望遠耶。

○義山古詩。多齊梁體。卽所謂格詩也。間有小律絕句。亦屬齊梁體耳。今不及細分。仍依本集編次。惟此及下篇（效長吉⁴⁹⁸）。則從戊籤例。同附卷末。

屈復

既有佳名。又居住佳地。藝復絕妙。乃但蒙金屋之寵。而不得高樓之

貴。何也。

程夢星

近知名阿侯者。知其已嫁生子。而名阿侯耳。合兩句之義觀之。則仍指莫愁本身也。此小律體。元和以後。白香山杜牧之輩多有之。

紀昀

〔詩說下〕何以不取無題也。曰。小調艷詞。無關大旨。

問此詩末二句之解。曰。屋則深藏。樓則或可於登時偶見矣。以癡生幻。用筆自有情致。

〔評本〕此三韻律詩。韓集白集俱有之。○河中之水歌曰。十五嫁

爲盧家婦。十六生兒似阿侯。此句誤用。○藏于屋中。人不得見。

樓上則或得見矣。此小巧弄姿。無關大雅。

馮浩

6 似言何不容更作一樓貯之耶。

此章與效長吉。戊籤編五言小律。唐人五律頗有三韻五韻者。

張采田

〔會箋〕此非艷情。惟命意未詳。

〔辨正〕生兒之兒。男女通用。安知河中歌不指女乎。詩未誤用。

紀評非也。

近代注釋

〔鈴木虎雄〕六四頁。

* *

0 統鑑は本詩および「效長吉」兩篇を五言小律として五律に附載

し、程夢星・紀昀（評本）・馮浩もほぼ同意している。一方、屈復は兩篇を五古（卷一）に編し、姚培謙もためらいつつ兩篇を五古（卷一）卷末に附載する。叢刊本のみが本詩を五律（卷三）に、效長吉を五古（卷一）に、と分載する。小律ないし三韻律詩の原型として玉臺新詠七に簡文帝「和湘東王三韻二首（春宵・冬曉）」「春閨情三韻」元帝「寒宵三韻」がある。唐詩でも李白「送內尋廬山女道士李騰空二首」、杜甫「三韻三篇」は古體とも近體ともつかないが、王昌齡「古意」儲光羲「石子松」池邊鶴「李益登長城」「觀回軍三韻」などは近體詩としての韻律が整うに至っている。〔滄浪詩話詩體〕有律詩止三韻者（原注 唐人有六句五言律。如李益（登長城）詩。漢家今上郡。秦塞古長城。有日雲常慘。無風沙自驚。當今天子聖。不戰四方平。是也。王力「漢語詩律學」第一章第三節參照。

なお韻律の整不整には関わらず六朝・唐の三韻詩を任意に拾いあつてみた陳香「三韻詩三百首」（一九八四・臺北商務印書館・人人文庫）がある。

本詩はやはり胡震亨にならって、五律の變種とみなすべきであろう。

1 近知 義山にまた「題大有隱居430」近知西嶺上。玉管有時聞。類例に〔杜甫漫成二首之二〕近識峨眉老。知余懶是真。これはややずれるかもしれないが、〔世說方正〕（明帝）遂付廷尉令收。因欲殺之。後數日。詔出周（顗）。羣臣往省之。周曰。近知當不死。

罪不足至此。

阿侯 〔玉臺新詠九歌辭二首之二〕河中之水向東流。洛陽女兒名莫愁。……十五嫁爲盧家婦。十六生兒字阿侯。

義山にいま一例〔擬意586〕悵望逢張女。遲廻送阿侯。李賀に三例〔綠水詞〕今宵好風月。阿侯在何處。爲有傾人色。翻成足愁苦。〔夜來樂〕五色絲封青玉龜。阿侯此笑千萬餘。〔春懷引〕阿侯繫錦覓周郎。馮仗東風好相送。以上はみな女性。

ただし次の用例は男性。〔施肩吾少婦游春詞〕無端自向春園裏。笑摩青梅叫阿侯。

2 女が流れのほとりに住んでいる、という表現は南朝系の樂府詩に頻見する。〔古辭長干曲〕妾家楊子住。便弄廣陵潮〔樂府詩集七二〕。〔昭明太子龍笛曲〕金門玉堂臨水居。一嘯一笑千萬餘。〔梁簡文帝權歌行〕妾家住湘川。菱歌本自便。〔徐彥伯採蓮曲〕妾家越水邊。搖艇入江煙。〔崔顥長干曲四首之二〕家臨九江水。去來九江側。やや近い例に〔鄭錫邯鄲少年行〕家住叢臺近。門前漳水流。

〔溫庭筠蘇小小歌〕吳宮女兒腰似束。家在錢塘小江曲。

住處 〔宋謝靈運三藏佛陀什等譯五分戒本〕若比丘僧不差爲教誡故。入比丘尼住處。除病因緣。波逸提〔正藏二二冊一九七頁中〕。

〔王維田家詩〕住處名愚谷。何煩問是非。

小江 〔王灣晚春詣蘇州敬贈武員外詩〕煙和疎樹滿。雨續小江長。〔杜甫水宿遣興奉呈羣公詩〕小江還積浪。弱纜且長隄。

3 〔玉臺新詠五何遜日夕望江贈魚司馬詩〕歌黛慘如愁。舞腰疑欲

絶。〔李賀將進酒樂府〕皓齒歌。細腰舞。

腰細 細腰の美女は墨子兼愛篇、韓非子二柄篇にもとづく。〔梁元帝蕩婦秋思賦〕於時露萎庭蕙。霜封堦砌。坐視帶長。轉看腰細〔藝文類聚三三〕。義山に〔蜂156〕窈妃腰細纔勝露。趙后身輕欲倚風。

4 〔後漢書列傳二四梁冀傳〕（妻孫）壽色美而善爲妖態。作愁眉。蹙。愠。馬。驚。折。髻。步。齟。齬。笑。〔李賢注〕風俗通曰。愁眉者。細而曲折。：始自冀家所爲。京師翕然。皆放效之。以爲媚惑。

〔玉臺新詠八王筠秋夜二首之二〕愁繁翠羽眉。淚滿橫波目。〔梁元帝詠歌詩〕汗輕紅粉濕。坐久翠眉愁。〔白居易想東遊五十韻〕舞繁紅袖凝。歌切翠眉愁。

眉長 〔玉臺新詠六費昶詠照鏡詩〕城中皆半額。非妾畫眉長。

〔白居易上陽人樂府〕小領輕履窄衣裳。青黛點眉眉細長。

5 漢武故事をふまえる。〔茂陵300〕6句の注〔集釋稿三〕本誌五六册三三七頁）参照。

〔沈炯八音詩〕金屋貯阿嬌。樓閣起迢迢。〔李白妾薄命詩〕漢帝重阿嬌。貯之黃金屋。〔皇甫冉見諸姬學玉臺體詩〕寧辭玉輦迎。自堪金屋貯。

6 やや似通った義山の句に〔韓同年新居395〕簾籍征西萬戶侯。新綠貴增起朱樓。

重樓 〔荀子賦〕公正無私。反見縱橫。志愛公利。重樓疏堂。

〔陸機浮雲賦〕若層臺高觀。重樓疊閣。或如鍾首之鬱律。乍似塞

李義山七律集釋稿（五）

門之廖廓（初學記一）。〔洛陽伽藍記四〕於是帝族王侯。外戚公主。擅山海之富。居川林之饒。：飛館生風。重樓起霧。

* * *

何等かの寓意をよみこもうとする吳喬・張采田を例外として、他の諸注釋はおおむね軽い戯作風の艶詩とみなす。多數意見に従いたい。ただ作品の素材が作者の實生活に直接關係があるか否かは全く不明なので、いまは樂府題の作と同様に純然たる物語詩と解しておく。

1・2 ちかごろ耳に入りましたのは、阿侯という名の少女のこと、その住みかに近く、小さな江が流れております。このあたりは特に樂府の常套的表現を踏襲。

3・4 腰はほっそりほっそりとちぎれそうで、とても舞いなど舞えるのかしら。眉はながあく、ただただ愁わしげにひそめられたその形がまたすばらしい。

5・6 漢の武帝が最愛の嬌ちゃんに作ってやった黄金の御殿、少女のためにも同じ黄金の御殿を建てるほどのねうちがあるというのに、どうしても同じ黄金の樓閣ぐらい作ってやらぬのですか。

6句は馮浩の解釋でよく、紀昀などのように、樓閣を作ってみせびらかす、では持つてまわりすぎだろう。

3句の勝、統籤のみ「成」に作るが、勝のままでよい。馮浩・張采田・安徽師大年表ともに不編年。

（松田佳子）

無題 120

照梁初有情 照梁 初めて情有り

出水舊知名 出水 舊名を知らる

裙衩芙蓉小 裙衩 芙蓉小に

4 釵茸翡翠輕 釵茸 翡翠輕し

錦長書鄭重 錦長くして 書は鄭重

眉細恨分明 眉細くして 恨は分明

莫近彈棋局 近づく莫れ 彈棋の局

8 中心最不平 中心 最も平かならず

校

0 唐詩類苑一三八(人部閨情類)

2 水 錢本「？」を水に改む

3 衩 類苑「袴」

韻

下平十二庚(明・平) 十四清(情・名・輕) 同用

*

吳喬

結意顯然。

何焯

〔評本〕小馮(馮班)云。腰起。

落句似借用王丞相以腹熨彈碁局事。

徐德泓

前四句。併作一聯。照梁屬翡翠。出水層芙蓉。上二句未分明。故下二句承醒之。狀其飾也。錦長二句。言有情致也。結語。承恨字來。欲止其愁之意。碁局中心不平。恐其相感。故莫近之也。此似贈妓之詞。而亦無狎語。

姚培謙

照梁出水。容色之妙麗也。翡翠芙蓉。粧飾之華艷也。錦書多不盡之意。黛眉含不展之懷。情竇既開。恐不免覩物生忌。如何。

屈復

以分明抱恨之人而近中心不平之局。則恨愈深矣。故云莫近也。

程夢星

此不平之鳴也。當是寄書長安故人而作。前四句。須合看。起句。

言己之初志。原有意於高栖。如翡翠之有情玳瑁梁也。次句。言己之才華。未嘗不見重於當世。如芙蓉之知名秋水也。三四。言拂志抑情。大材小用。世之愛翡翠者。僅施之於釵茸。無乃輕乎。五六。言欲裁書而長錦蟬聯。何以達鄭重之意。欲斂恨而細眉蹙蹙。尤足見分明之情。七八。即杜子美聞道長安似奕碁之意。言時局不平。有如棋局。觸物興情。不可近矣。

馮浩

此寄內詩。蓋初婚後。應鴻博不中選。閨中人爲之不平。有書寄慰也。絕非他篇之比。

5 此則謂閨人書札耳。

6 用愁眉細而曲折之義。

7・8 世説曰。彈碁始魏宮内。用裝儼戲。詩意正用此也。

張采田

〔會箋〕馮氏云。此寄内詩。：他篇之比。馮說從首句悟出。可從。姑編此。

〔辨正〕此初婚後客中寄内之作。照梁句。謂新婚。出水句。謂從前即聞名相慕。裙衩二句。狀室人裝飾。錦長二句。代寫盼歸之意。莫近二句。謂客途失意。室人亦代爲不平也。與他無題詩。絕不相同。本集凡寄内之作。皆晦其題。此是全集通例。馮氏謂係鴻博不中時作。似爲近之。

近代注釋

〔森槐南〕上卷五六〇頁。〔鈴木虎雄〕六七頁。〔安徽師大〕四〇頁。

* *

1・2 宋玉の神女賦、曹植の洛神賦をふまえる。何遜にも同様の表現あり。七絕集釋稿(一)初起53照梁注、本誌五一冊五八二頁參照。〔白居易因夢得題公垂所寄燭燭因寄公垂詩〕照梁初日光相似。出水新蓮艷不如。〔又楊柳枝詞八首之六〕蘇家少女舊知名。楊柳風前別有情。

1 照梁 〔梁簡文帝怨歌行〕十五頗有餘。日照杏梁初。〔梁鍾嶸氏子詩〕杏梁初照日。碧玉後堂開〔御覽詩〕。

有情 〔玉臺新詠一〇古絕句之三〕菟絲從長風。根莖無斷絕。無情尙不離。有情安可別。〔孟郊美人分香詩〕艷色本傾城。分香更

李義山七律集釋稿(五)

有情。義山詩には頻見、九例。

2 出水 〔詩品中品顏延之詩〕湯惠休曰。謝詩如芙蓉出水。顏如

采鑲金。〔阮研權歌行〕芙蓉始出水。綠荷葉初鮮。〔陸長源樂府〕芙蓉初出水。菡萏霧中花。

知名 〔陳後主洛陽道五首之一〕臺上經相識。城下屢逢迎。蜘蛛還借問。只重未知名。〔梁簡文帝美女篇〕佳麗盡關情。風流最有名。

3・4 芙蓉・翡翠の對は男女和合の象徴。義山詩にも頻用。集釋稿(一)無題114本誌五三冊六二五頁參照。

3 裙衩 義山以前の用例未見。すそに切れ目を入れたスカート、またはスカートのすそあけ(のあたり)をいうか。〔廣韻去聲衩字注〕衣衩。〔說文八上衽〕衣衽(段注 廣雅。衽・衽・衽。袂膝也。玉篇。袂膝。袂衽也。按袂膝者。袂衽在正中者也。故謂之衽。言其開拓也。亦謂之衽。言其中分也)。唐代には女性の衣服にすそにスリットがあったらしいことは、たとえば韓熙載夜宴圖の六么を舞う女伎の畫像からも窺い知りうる。ただし女伎の着衣は殘念ながら衽ではなく袍であるけれども。

芙蓉 〔楚辭離騷〕製芰荷以爲衣兮。集芙蓉以爲裳(王逸注 芙蓉。蓮華也。上曰衣。下曰裳。：〔補注 爾雅曰。荷。芙蕖。注云。別名芙蓉。：反離騷云。衿芰荷之綠衣。被芙蓉之朱裳。是也。北山移文曰。焚芰製而裂荷衣。蓋用此語)〔梁簡文帝採蓮曲〕常聞渠可愛。採擷欲爲裙。

六九五

4 釵茸

用例未見。「釵子の飾りの毛の垂れたるもの」(鈴木)、「翡翠釵如翠鳥尾上羽毛的形状」(安徽師大)。要するに茸は釵の形容である。「廣韻上平鍾韻茸字注」草生貌。「文選三謝靈運於南山住北山經湖中瞻眺詩」初篁苞綠籜。新蒲含紫茸(李注 蒼韻篇曰。茸。草貌。然此茸謂蒲華也。江賦曰。擢紫茸)。「杜甫大曆三年春四十韻」泥笋苞初荻。沙茸出小蒲(九家注引大謝詩)。ムクムクフワフワビッシリと生えているのを茸というのだろう。

翡翠

「宋玉諷賦」(主人之女)以其翡翠之釵。挂臣冠纓。臣不忍仰視(古文苑二)「玉臺新詠六姚翻同郭侍郎采桑詩」日照茱萸領。風搖翡翠簪。

5

「晉書九六列女傳」竇滔妻蘇氏。始平人也。名蕙。字若蘭。善屬文。滔。苻堅時爲秦州刺史。被徙流沙。蘇氏思之。織錦爲迴文旋圖詩以贈滔。宛轉循環以讀之。詞甚悽惋。凡八百四十字。

「玉臺新詠六吳均與柳惲相贈答六首之一」書織迴文錦。無因寄隴頭。「劉允濟怨情詩」玉關芳信斷。蘭閣錦字新。「溫庭筠寒塞行」心許凌煙名不滅。年年錦字傷離別。義山にまた「即日」幾家緣錦字。含淚坐鴛機。

鄭重

「廣雅釋詁四」鄭。重也。「廣韻去聲勁韻鄭字注」鄭重。慙慙。

「漢書九九中王莽傳」然非皇天所以鄭重降符命之意(師古曰。鄭重。猶言煩煩也。重音直用反)。故是日天復決以勉書。「白居易庾順之以紫霞綺遠贈以詩答之詩」千里故人心鄭重。一端香綺紫氛

風。

6 無題 90 4 句注 六九三頁參照。

分明

「玉臺新詠七蕭綱詠美人觀畫詩」分明淨眉眼。一種細腰身。「杜甫詠懷古跡五首之三」千歲琵琶作胡語。分明怨恨曲中論。

7・8 義山にまた「柳枝五首之二 538」玉作彈棋局。中心亦不平。

7 莫近

「白居易啄木曲」莫近紅爐火。炎氣徒相逼。

彈棋

「邯鄲淳藝經」碁正彈法。二人對局。白黑碁各六枚。先列碁各六枚。先列碁相當。更先控三彈。不得各去。控一碁。先補角(文選四二魏文帝與朝歌令吳質書李善注)。「世說巧藝」彈棋始自魏宮內用妝奩戲(劉注 傅玄彈棋賦敍曰。漢成帝好蹴鞠。劉向以謂勞人體。竭人力。非至尊所宜御。乃因其體作彈棋。今觀其道。蹴鞠道也。按玄此言。則彈棋之戲。其來久矣。且梁冀傳云。冀善彈棋格五。而此云起魏世。謬矣)。文帝於此戲特妙。用手巾角拂之。無不中。有客自云能。帝使爲之。客著葛巾角。低頭拂棋。妙踰於帝(劉注 典論帝自敍曰。戲弄之事少所喜。唯彈棋略盡其妙。少時嘗爲之賦)。「柳宗元序棋」房生直溫。與予二弟遊。皆好學。予病其確也。思所以休息之者。得木局。隆其中而規焉。其下方以直。置棋二十四。貴者半。賤者半。貴曰上。賤曰下。咸自第一至十二。下者二乃敵一。用朱墨以別焉。房於是取二毫如其第書之。既而抵戲者二人。則視其賤者而賤之。貴者貴之。其使之擊觸也。必先賤者。不得已而使貴者。則皆懷焉憊焉。亦鮮克以中。其獲也得朱焉則若有餘。得墨焉則若不足。：觀其始與末。有似棋者。故

敘。〔國史補下敘博長行戲條〕如彈棋之戲甚古。法雖設。鮮有爲之。其工者近有吉邈・高越首出焉。〔西陽雜俎續集四貶誤〕今彈棋用碁二十四。以色列貴賤。碁絕後一豆座石^{一云}方云。白黑各六碁。依六博碁形^{一云依太碁形}頗似枕狀。又魏戲法。先立一於局中。餘者聞^{一作}白黑圍繞之。十八籌成都。漢代以來のこの古い遊戲が義山の時代にも實際に行われていたことが分る。

〔梁簡文帝獨處怨詩〕獨處恒多怨。開幕試臨風。彈棋鏡奩上。傅粉高樓中。自君征馬去。音信不曾通。〔杜甫存沒口號二首之一〕席謙不見近彈碁。畢耀仍傳舊小詩。〔白居易和春深二十首之十七〕何處春深好。春深博奕家。：彈棋局上事。最妙是長斜。なお李頎および韋應物に〔彈棋歌〕あり。

彈棋局については〔丁虞彈棋賦〕文石爲局。金碧齊精。隆中夷外。緻理股平。阜高得適。既安且貞。〔世說排調〕劉眞長始見王丞相。時盛暑之月。丞相以腹熨彈棋局。曰。何乃洿（劉注 吳人以冷爲洿）。

〔夢溪筆談一八技藝〕西京雜記云。漢元帝好蹴鞠。以蹴鞠爲勞求相類而不勞者。遂爲彈棋之戲。予觀彈棋絕不類蹴鞠。頗與擊鞠相近。疑是傳寫誤耳。唐薛嵩好蹴鞠。劉綱止之曰。爲樂甚衆。何必乘危邀頃刻之權。此亦擊鞠。唐書誤述爲蹴鞠。彈棋今人罕爲之。有譜一卷。蓋唐人所爲。其局方二尺。中心高。如覆孟。其巔爲小壺。四角微隆起。今大名開元寺佛殿上有一石局。亦唐時物也。李商隱詩曰。玉作彈棋局。中心最不平。謂其中高也。白樂天詩。彈

棋局上事。最妙是長斜。長斜謂抹角斜彈。一發過半局。今譜中具有此法。柳子厚敘棋。用二十四棋者。即此戲也。漢書注云。兩人對局。白黑子各六枚。與子厚所記小異。如奕棋。古局用十七道。合二百八十九道。黑白棋各百五十。亦與後世法不同。彈棋の遊戲法の大體は、中心部に鉢伏せ狀の隆起を持つ、石または木の碁盤の兩側面に、對戦者がそれぞれ碁石を並べ、自分の持ち石を彈じきとばして相手の石にあてる。漢代から唐代までに使用する碁石が倍になるなど、ルールにも變化があつたらしい。いわゆる「長斜」とは中心部を避けて半圓を描く彈道をいうのであろう。梅原郁譯注「夢溪筆談」第2卷一七九頁（平凡社東洋文庫）を参照のこと。

8 中心 〔詩邨風終風〕謔浪笑敖。中心是悼。〔文選五一王褒四子講德論〕君者中心。臣者外體。外體作。然後知心之好惡。臣下動。然後知君之節趣。〔白居易雲居寺孤桐詩〕四面無附枝。中心有通理。

不平 〔楚辭九辯〕坎廝兮貧士失職而志不平。廓落兮羈旅而無友生。〔史記五七周勃世家〕景帝居禁中。召條侯賜食。獨置大臠。無切肉。又不置櫓。條侯心不平。顧謂尚席取櫓。〔玉臺新詠七蕭綱賦樂器名得筵篋詩〕欲知心不平。君看黛眉聚。

* * * 諸家いずれもひとまず艶詩たることをとめ、その上で二説に分れる。

A 寓意あり 安徽師大

程 (知友に)

徐 (妓女に) 寄贈

B 寓意なし 馮・張・森 (妻に)

姚・鈴木

吳喬・屈復は眞意未詳。安徽師大・姚培謙は作品の女主人公を特定せず、また表現態度を客觀的描寫とみることでも共通。鈴木は男性の口からする自述とするが、讀解に當つて最も抵抗感のない姚氏の說に従う。

1・2 朝日の光がさしこんで梁のあたりに輝きわたるのにも似た新鮮な美しさを持つ人は、始めて濃く深い女の愛を心に抱くようになった。もともと、霧の夕の水面にぱつと花開いたようなその姿は名が高かつただけだ。1句の初を、鈴木説では「初めより」とよみ、「本也」と解するらしいが、やはり「始也、方也」の訓をとりたい。馮浩系の諸本では1句は新婚のイメージとなる。

3・4 そのもすその切れ目のあたりに模様の蓮の花がいくつか小さく咲く。そのかんざしの端にふんわりと翡翠の羽根のような飾りが軽くゆれる。小と輕は女主人公のいかにも若々しく身輕なのをあらわす。4句の釵茸が「釵十茸」だから、3句の裙衩も「裙十衩」と考えたい。衩はふつう詩文ではあまり見かけない字だが、茸が釵の形容語とすれば同様に裙の形容即ち形狀の語のはず。

5・6 錦で織った長い手紙、それほどまでに長いのは眞心こめて

丁寧にしたためているせいなのだが、その細く美しくとのえられた眉のあたりは、つれない相手への恨みのほどがくっきり浮びあがる。6句眉細は孫壽の故事をふまえている。

7・8 ああいけないよ、なまめかしい調度の品々のなかでも、彈棋の盤に近づいては。盤の中心はとりわけ高く盛りあがる、盛りあがる心中の不満もそれに引かれて押えきれないぞ。中心は雙關の語。森が盤の中心が凹むというのは誤解。彈棋局は馮浩の指摘どおり闔室にふさわしく、粧奩の連想があるかもしれない。

敘上の姚培謙說の方向では、結局この詩もまた樂府風の作とみることになる。馮浩らの妻女説も前半はともかく、後半、妻が義山の宦途不遇を嘆くとまで具體的に狀況を設定されると却って説得力が弱まる。安徽師大の解釋(借少女愛情生活的失意寄寓自己仕途失意的苦悶不平)は押しつけがましいところが多く、寓意說としては比較的無難だが、結局のところなぜ寓意をよみこまねばならぬのか、その必然性が理解しがたい。

3句衩の字を唐詩類苑が「袴」に作るのは字の稀見難解を敬遠したか。類苑は下掲の作品でもまた同様に改めている。馮浩・張采田・安徽師大みな開成三年(八三八)に係ける。

(荒井 健)

八歲偷照鏡 八歲 偷に鏡を照らす

長眉已能畫 長眉 已に能く畫く

十歲去鬪青 十歲 去って鬪青す

芙蓉作裙衩 芙蓉 裙衩と作す

5 十二學彈箏 十二 彈箏を學ぶ

銀甲不曾卸 銀甲 曾て卸さず

十四藏六親 十四 六親藏す

懸知猶未嫁 ^{あゝ}懸め知る 猶お未だ嫁せざるを

十五泣春風 十五 春風に泣く

10 背面鞦韆下 面を背く 鞦韆の下

校

0 唐詩品彙二一・唐詩類苑一三八（人部閨情類）

3 賜 叢刊本・類苑・統籤・錢本・毛本・朱鶴齡本・稿本・全唐

詩「踏」

4 衩 高麗本「帶」

類苑「袴」 馮浩本校注「錢（良擇）曰。衩當改作袴。誤

矣」

6 曾 毛本校注「一作能」

9 風 屈復本「雨」

10 面 類苑「立」 高麗本「立背」^{一作} 叢刊本・統籤・稿本・全

唐詩校注「一作立」

李義山七律集釋稿（五）

去聲十五卦（畫・衩）

去聲四十禡（卸・嫁・下）

馮浩

按廣韻。畫衩。去聲十五卦部。卸嫁下。去聲四十禡部。此通用也。

馮浩が通用というように、韻書の規範からは、はみ出ており、

通押とみなすべきであろう。松尾良樹「李義山詩韻譜」（本誌五

四冊三六七頁）参照。

*

胡震亨

10 只須如此便好。

吳喬

10 才而不遇之意。

何焯

〔讀書記〕爲少年熱中干進者發慨（評本 本條なし）。

8 猶字對上已字。妙（評本 本條なし）。

〔評本〕小馮云。只學得焦仲卿妻一段。然此道已非他人所解。

0 高題摩空。如古樂府。

10 每於結題見本意。○亦有不盡之妙。

陸鳴皋

此屬艷情。妙不說盡。

姚培謙

義山一生。善作情語。此首乃追憶之詞。遷延寫來。意注末兩句。背面春風。何等情思。即思公子兮未敢言之意。而詞特妍冶。次乃寫觀物懷人之感。即五律中幽人不倦賞¹²⁵一首是也。

屈復

十五二句。寫聰明女郎。省事太早。而幽怨隨之。才士之少年不遇。亦可歎也。

程夢星

此在幕中閑憶其平生而歸於幕府之寂寞也。前首專述生平。八歲二句。言自幼已能文章。十歲二句。言出謁河陽。干以所業。十二二句。言從此佐幕。不曾游閑。十四二句。言佐幕爲賓。原非黨附。十五二句。言爲人排擠。迄今沈淪也。

紀昀

〔詩說上〕獨成一格。然覺有古意。古故不在形貌聲響間（評本「形貌聲」を「字句音」に作る）。○四家評曰。每於結處見本意（評本 本條なし）。○又曰。亦有不盡之妙（評本 本條なし）。

○此無題中之最佳者。若何處哀筆隨急管¹¹⁷一首。風斯下矣（評本本條なし）。〔詩說補遺〕芥舟（戈濤）評曰。此首誠佳。然不可仿效。彼固由仿效而來以能截體故佳耳（評本「評」なし）。

〔評本〕妙在直起直收。再加一語。便如嚼蠟。

馮浩

胡震亨曰。只須如此便好。浩曰。上崔華州書。五年讀經書。七年弄筆硯。甲集序。十六著才論聖論。以古文出諸公間。此章寓意相

類。初應舉時作也。酌編於此（大和二年・十六歲）。

張采田

〔會箋〕案舊本連幽人不倦賞¹²⁵一首。爲無題二首。戊籤分之。細味幽人一首。與此意境不同。馮氏附編。謂指同應舉失意者。恐誤。今仍分之。解詳譜。《年譜大和元年》案樊南甲集敘。樊南生十六能著才論聖論。以古文出諸公間。後聯爲鄆相國華太守所憐。居門下時敕定奏記。始通今體。此可攷義山爲文之始。又無題¹²⁴。正文略寫少年洩瀉依人之態。與上崔華州書。五年讀經書。七年弄筆硯。及甲集敘。寓意相合。亦當作於此年。馮氏謂初應舉時。非也。

近代注釋

〔森槐南〕上卷一六〇頁。〔鈴木虎雄〕六九頁。〔高橋和巳〕六七頁。〔劉若愚〕七八頁。〔安徽師大〕三頁。〔陳永正〕一五四頁。

* *

0 馮班「何焯が明言するように、「焦仲卿妻」が祖型だが、女の半生をえがくこの手の樂府歌行は以後定型化されている。〔玉臺新詠〕一古詩無名人爲焦仲卿妻作」十三能織素。十四學裁衣。十五彈箏篴。十六誦詩書。十七爲君婦。心中常苦悲。……阿母大拊掌。不圖子自歸。十三教裁織。十四能裁衣。十五彈箏篴。十六知禮儀。十七遣汝嫁。謂言無誓違。〔又九歌辭二首之二〕莫愁十三能織綺。十四采桑南陌頭。十五嫁爲盧家婦。十六生兒字阿侯。〔李白長干行二首之一〕十四爲君婦。羞顏未嘗開。……十五始展眉。願同塵與灰。……十六君遠行。瞿塘滪堆。〔崔顥郎卿宮人怨詩〕母兄憐愛無儔侶。

五歲名爲阿嬌女。七歲丰茸好顔色。八歲點惠能言語。十三兄弟教詩書。十五青樓學歌舞。〔白居易簡簡吟〕蘇家小女名簡簡。芙蓉花腮柳葉眼。十一把鏡學點粧。十二抽針能繡裳。十三行坐事調品。不肯迷頭白地藏。二月繁霜殺桃李。明年欲嫁今年死。丈大阿母勿悲啼。此女不是凡夫妻。恐是天仙謫人世。只合人間十三歲。

一方、ここに青年の日の義山自身の影を讀みこむ程夢星の説を馮浩が承け、義山の二つの文章によってそれを裏づけようとする。

〔文集八上崔華州書〕愚生二十五年矣。五年誦經書。七年弄筆硯。〔又七樊南甲集序〕樊南生十六能著才論聖論。以古文出諸公間。

〔幼少の時は斯うであつたといふ事を言ふのが、李義山の口癖で〕此の篇は、一女子の生い立ちに託して、矢張り、自家の境遇を述べた：と云ふのが、馮浩の考按であります。（森槐南）

ただし、男の半生をえがくこの手の表現がひとり義山のみならず、唐人の詩文に頻見するのも事實である。〔杜甫壯遊詩〕往昔十四五。出游翰墨場。斯文崔魏徒。以我似班揚。七齡思卽壯。開口詠鳳凰。九齡書大字。有作成一囊。〔韓愈答崔立之書〕僕始年十六七時。未知人事。讀聖人之書。及年二十時苦家貧衣食不足。謀於所親。然後知仕之不唯爲人耳。〔白居易與元九書〕及五六歲。便學爲詩。九歲。暗識聲韻。十五六。始知有進士。苦節讀書。二十已來。書課賦。夜課書。間又課詩。不遑寢息矣。二十七。方從鄉試。〔又朱陳村詩〕十歲解讀書。十五能屬文。二十舉秀才。三十爲諫臣。下有妻子累。上有君親恩。〔柳宗元與楊誨之第二書〕

吾年十七求進士。四年乃得舉。二十四求博學宏辭科。二年乃得仕。其間與常人爲群輩數十百人。〔杜牧邢君墓誌銘〕十五知書。二十有文。三十登進士。五十終刺史。義山ならずとも誰でもいいそうな、しかも断片的な文句をたてに、作品旁證・年代決定まで行く馮浩の注が實證的とは思えない。

それよりも主人公の年齢が八歳から十五歳までと枠づけられたのは、それが古代中國における少女期に當るためとではないかと思われるが、こういう點こそ詳しい注がほしいのである。〔公羊傳隱公七年〕春。王三月。叔姬歸于紀（何休注 婦人八歲備數。十五從嫡。二十承事君子）。

1 八歲 〔禮記內則〕子能食食。教以右手。能言。男唯女俞。七年。男女不同席。不共食。八年。出入門戶。及卽席飲食。必後長者。始教之讓。但しこの少女は禮記とは縁がなさそうだが。

〔顧況鄭女彈箏歌〕鄭女八歲能彈箏。春風吹落天上聲。偷 ひとかに、とよみうる例は集釋稿（一）無題112注本誌五三冊六二二頁參照。

照鏡 〔淮南子說山訓〕夫照鏡見眸子。微察秋毫。〔玉臺新詠八庚肩吾詠美人看畫應令詩〕欲知畫能巧。喚取眞來映。並出似分身。相看如照鏡。〔庾信舞媚娘詩〕朝來戶前照鏡。含笑盈盈自看。

2 〔漢書七六張敞傳〕爲婦畫眉。長安中傳張京兆眉撫。有司以奏敞。上問之。對曰。臣聞閨房之內。夫婦之內。夫婦之私。有過於畫眉者。上愛其能。弗備責也。〔古今注下雜註〕魏宮人好畫長眉。

〔杜甫北征詩〕學母無不爲。曉妝隨手抹。移時施朱鉛。狼藉畫眉闊。〔白居易吾雛詩〕吾雛字阿羅。阿羅纔七齡。：學母畫眉樣。效吾詠詩聲。義山にまた〔蝶三首之二122〕長眉畫了繡簾開。碧玉行收白玉臺。

長眉 〔文選八司馬相如上林賦〕若夫青琴宓妃之徒。：長眉連娟。微睇繚繞。色授魂與。心愉於側。〔玉臺新詠五丘遲答徐侍中爲人贈婦詩〕長眉橫玉臉。皓腕卷輕紗。

3 十歲 〔禮記內則〕女子十年不出〔鄭注 恆居內也。姆教婉婉聽從。執麻枲。治糸繭。織紵組紃。學女事。以共衣服。觀於祭祀。納酒漿饌豆菹醢。禮相助奠。こでも主人公の少女のイメージは、古典の記載とは大いにずれている。

踏青 唐代では、(1)二月二日。集釋稿(三)二月二日100本誌五六冊二九四頁參照。(2)または三月三日。〔劉商上巳日兩縣寮友會集詩〕踏青看竹共佳期。春水晴山祓禊詞。

その日は着飾った女性も多く華やいだ行樂の場であった。〔孟浩然大堤行〕歲歲春草生。踏青二三月。王孫挾珠彈。遊女矜羅襪。〔劉禹錫荊州歌〕可憐蹋青伴。乘暖著輕衣。〔白居易酬鄭侍御多雨春空過詩〕愁生白垂叟。惱殺蹋青娘。〔韓偓欲去詩〕紛紜隔窓語。重約踏青期。

4 裙衩 前出、六九五頁參照。

5・6 〔杜甫陪鄭廣文遊何將軍山林十首之五〕銀甲彈箏用〔九家注 古詩。十五學彈箏。銀甲不曾卸。以銀作指甲。取其有聲〕。

金魚換酒來。義山にまた〔送千牛李將軍550〕絃危中婦瑟。甲冷想夫箏。

5 學箏 〔韋應物聽鶯曲〕欲嚙不嚙意自嬌。羌兒弄笛曲未調。前聲後聲不相及。秦女學箏指猶澁。

彈箏 〔戰國策四秦策〕夫擊甕叩缶。彈箏搏髀。歌呼鳴鳴。快於耳目者。眞秦之聲也。〔文選四張衡南都賦〕彈箏吹笙。更爲新聲。〔玉臺新詠一〇簡文帝彈箏詩〕彈箏北窓下。夜響清音愁。

箏 唐代では十二絃または十三絃。集釋稿(二)昨日369十三絃柱注參照、本誌五四冊四三五頁。

6 銀甲 〔劉禹錫傷秦姝行〕長安二月花滿城。插花女兒弄銀箏。：侍兒掩泣收銀甲。鸚鵡不言愁玉籠。〔白居易箏詩〕甲明銀鈎瑩。柱觸玉玲瓏。

卸 〔廣韻四卸字注〕馬去鞍。〔隋煬帝效劉孝綽雜憶詩二首之一〕憶睡時。待來剛不來。卸妝仍索伴。解珮更相催。〔王建長門詩〕長門閉定不求生。燒却頭花卸却箏。

7・8 〔唐會要八三婚娶〕〔開元〕二十二年九月勅。男年十五。女年十三以上。聽婚嫁。

7 十四 〔韓詩外傳一〕傳曰。：故男八月生齒。八歲而齟齬。十六而精化小通。女七月生齒。七歲而齟齬。十四而精化小通。〔梁簡文帝東飛伯勞歌二首之一〕可憐年幾三十四。工歌巧舞入人意。〔白居易化龍寺主家小尼詩〕頭青眉眼細。十四女沙彌。

藏六親 〔杜甫新婚別詩〕父母養我時。日夜令我藏。〔文集八別

令狐拾遺書」今人：生女子。貯之幽房密寢。四鄰不得識。兄弟以時見欲其好。不顧性命。

六親 「漢書四八賈誼傳」上書陳政事。：曰。：建久安之勢。成長治之業。以承祖廟。以奉六親。至孝也（應劭曰。六親。父母兄弟妻子也）。六親の中味については他に諸説あり。

四 「鮑照松柏篇」昔日平居時。晨夕對六親。「杜甫前出塞九首之四」路逢相識人。附書與六親。「王建失釵怨詩」双杯行酒六親喜。我家新婦宜拜堂。

8 懸 詩語解下に「度（ハカル）也」、助字辨略二に「預也」とあり、主體から距離のある事物について推量する義。その距離が空間的なるときはハルカニ、時間的なるときはアラカジメとなる。

「玉臺新詠七蕭紀和湘東王夜夢應令詩」昨夜夢君歸。賤妾下鳴機。懸知君意薄。不著去時衣。故言如夢裏。頼得雁書飛。

懸知は庾信の集に頻見するが、概ね「遙」の義。「預」の例は「和趙王看伎詩」琴曲隨流水。簫聲逐鳳凰。：懸知曲不誤。無事畏周郎（倪璠注 吳志曰。周瑜少時。精意於音樂。：其有闕誤。瑜必知之。知之必願）。

9・10 「玉臺新詠九劉孝威擬古應教詩」美人年幾可十餘。含羞轉笑斂風裾。

9 十五 「禮記內則」（女子）十有五年而笄（鄭注 謂應年許嫁者。女子許嫁。笄而字之。二十而嫁）。

「玉臺新詠一辛延年羽林郎詩」胡姬年十五。春日獨當爐。「琅琊

王歌辭」新買五尺刀。懸著中梁柱。一日三摩娑。劇於十五女（樂府詩集二五）。「杜甫絕句漫興九首之九」隔戶楊柳弱嫋嫋。恰似十五女兒腰。「白居易鄰女詩」娉婷十五勝天仙。白白皁皁嬌地蓮。

泣春風 「玉臺新詠一〇吳興妖神贈謝府君覽詩」獨泣謝春風。孤夜傷明月。「顧況悲歌六首之六」美人二八顏如花。泣向春風畏花落。「李涉竹枝詞」孤舟一夜東歸客。泣向春風憶建溪。

10 背面 「杜甫北征詩」見耶背面啼。垢膩脚不襪。「元稹古決絕詞三首之一」對面且如此。背面當何如。

鞦韆 「荆楚歲時記」（立春之日）又爲打毬鞦韆之戲（杜公瞻注按劉向別錄曰。寒食蹴鞠。黃帝所造。本兵勢也。或云。起於戰國。案鞠與毬同。古人蹋蹴。以爲戲也。古今藝術圖云。鞦韆本北方山戎之戲。以習輕譟者。後中國女子學之。乃以綵繩懸木立架。士女炫服。坐立其上推引之。名曰鞦韆。杜注に引く古今藝術圖は歷代名畫記三の述古之祕畫珍圖條に見え「五十卷、既畫其形、又說其事、隋煬帝撰」とある。平凡社東洋文庫「荆楚歲時記」六一頁。「杜甫清明二首之二」十年蹴鞠將雛遠。萬里鞦韆風俗同。「白居易和春深二十首之十六」何處春深好。春深寒食家。：鞦韆細腰女。搖曳逐風斜。「又寒食夜詩」抱膝思量何事在。癡男騃女喚鞦韆。鞦韆が唐代春の特に寒食のころの遊戲だったこと、前掲東洋文庫本に指摘される。義山の別の作品「評事翁寄賜餽粥走筆爲答247」鳳樓迢遞憶鞦韆。も寒食のぶらんこである。なお王建の鞦韆詞は遊戲中の風景をより細かに描寫する。

* * *

1・2 八つとし、こっそり鏡をのぞいて見て、大人みたいに長い眉がもうきれいに畫けます。

3・4 十とおとし——みんなといっしょに春の野あそびに出て、着物のすそあきを蓮の花柄が飾ります。

5・6 十二とのとき——お箏ことうをひくのを習ったら、銀のことづめをずっとはずしません。

7・8 十四のとき——親兄弟がいとしがっていとしがって、お嫁にゆくのはまだ先だと、いわずと知れます。

9・10 十五のとき——春風が何だか悲しくて、ぶらんこの下で顔をそむけてそっと泣いています。

7・8句のよみ方は従来ほぼ三通りある。(1)「六親ニ藏ルルハ、未ダ嫁セザ(ルモ、嫁スベキヲ)懸知シテ(恥ジラウ)ガタメナリ。」(森および高橋)(2)「六親ニ藏ス。懸（ルカ）ニ知ル猶未ダ嫁セザルヲ」(鈴木)(3)「六親ニサエモ藏レ、懸知ス未ダ嫁セシメラレザルヲ」(安徽師大および陳)。(1)(3)と異なり、知の主體を少女とせず、全篇を語り手による状況描寫とみた鈴木説がすぐれるが、懸を空間的な意味とする點はとらない。

「女の悲しみを知りそめるまで迄の少女の生長」(高橋)を、樂府的手法で鮮やかに切りとった詩だが、それを無題と稱するのは些か意味ありげだ。姚培謙の追憶説の出るゆえんだが、ここでもやはりそれ以上の追求は不能でした不可である。それにしても、

このようなすばらしい詩にも寓意をみとめねば正解にならぬのならば、むしろ誤解のままの方がよいとさえ思える。ちなみに近代注釋であえて寓意説をとらぬのは鈴木、高橋のみ。馮浩・安徽師大・張采田みな義山十六歳の作とするが、かりに寓意ありとしても、こうした係年には到底同意できない。高橋は當然不編年。

(西村富美子)

無題二首之二 125

幽人不倦賞 幽人 倦まずに賞す

秋暑貴招邀 秋暑 招邀（ほう）せんと貴す

竹碧轉悵望 竹碧にして 轉た悵望し

4 池清尤寂寥 池清くして 尤も寂寥たり

露花終裏濕 露花 終に裏濕し

風蝶強嬌饒 風蝶 強いて嬌饒たり

此地如攜手 此地 如し攜手せば

8 兼君不自聊 君と自ら聊せざらんや

校

0 唐詩類苑一三八(人部閨情類)

無題 馮浩本「失題」

4 尤 馮浩本「猶」

6 鏡 叢刊本・類苑・稿本・唐音統籤「嬌」 錢本(判別不能)

韻

下平三蕭（寥·聊）四宵（邀·饒）同用

*

吳喬

此詩乃招友同遊不至之作。讀結語意。其人亦不得志于綢者乎。

何焯

〔評本〕此首當另有題。

陸鳴皋

此自言春情冷淡之意。與上首似異而實相蒙也。言幽人愛賞。反貴秋暑。故轉屬意于竹碧之區。及池清虛寂之境耳。腰聯終字強字。並有意義。言彼雖有春情。而芳心終斂。可強作嬌饒之蝶乎。使當此而有佚思。彼此俱無況味也。大旨應如此。若通以他解。則二首詞氣判然。豈有合賦之理乎。但結語字樣稍率。

姚培謙

此寫睹物懷人之感。竹碧池清。殊堪消暑。祇因意中人去。故悵望間轉覺寂寥也。露花風蝶。是眼前寂寥況味。此時便得與君攜手。恐不免伶玄通德之悲耳。

屈復

以不倦賞之幽人。當秋暑之愁時。最貴招邀而實無人招邀也。中四。秋暑景物。七。此地二字。緊接中四。言此時此景。如能攜手。兼君無聊時。定當極歡也。○結倒句法。言當我不倦之頃。兼君無聊之時。如能此地攜手。其歡何如乎。兼字從首句來。

程夢星

後首專言幕府。起二句。言流連光景。須有招邀。三四。言閑中悵望。徒自寂寥。五六。言身如花蝶。終難強留。七八。言倘有携游人。亦永歎無疑也。

紀昀

〔詩說上〕無題諸作。評本。作詩。有確有寄託者。來是空言去絕踪之類是也。有戲為艷語。評本。作體者。近知名阿侯之類是也。有實有本事者。如昨夜星辰昨夜風之類是也。有失去本題而後人題曰無題者。如萬里風波一葉舟一首。評本。是也。有失去本題而誤附于無題。評本。作有與無題語合者。如幽人不倦賞一首。評本。是也。宜分別觀之。不必概為深解。評本。其有無。摘詩中字。面二字。為題者。亦無題之類。亦有此數種。皆當分晰。無。

馮浩

吳喬曰。招友同遊不至之作。浩曰。結言我無聊。恐兼爾亦無聊也。似同應舉失意者。

0 舊本皆連上篇作無題二首。戊籤分入五古中。亦作無題。愚謂必別有題而失之。然仍為附編。

張采田

〔辨正〕近知名阿侯90一首。必有本事。非戲作艷詩也。至萬里風波篇570。則確係無題。不得謂本有題而失之。其摘詩中二字為題者。祇有寄託本事二種。細玩全集自見。紀氏於玉谿一派。本未深攷。宜其妄下注釋矣。

〔會箋〕舊本與八歲偷照鏡一首相連。吳喬謂招友同遊不至之作。馮氏因改爲失題。謂似同應舉失意者。而詩中不見應舉意。且天下安有應舉之幽人哉。殊誤。

近代注釋

〔森槐南〕上卷一七一頁。〔鈴木虎雄〕七〇頁。

* *

1 幽人 義山の詩〔幽人⁴⁸⁸〕およびあとの一例〔靈仙閣晚眺⁴⁶³〕定笑幽人迹。鴻軒不可焚。いづれも處士隱者をさす通常の義。〔文選二二陸機招隱詩〕躑躅欲安之。幽人在浚谷（李注 周易曰。履道坦坦。幽人貞吉）。

こはややことなる。〔玉臺新詠二張華情詩五首之二〕幽人守靜夜。廻身入空帷。束帶俟將朝。廓落晨星稀。寐假交精爽。覲我佳人姿。巧笑媚權驥。聯媚睥與眉。寐言增長歎。悽然心獨悲。張華詩の場合同様、特に獨り身の男性をさす。〔禮記儒行〕儒有博學而不窮。篤行而不倦。幽居而不淫（鄭注 幽居謂獨處時也）。これに對して獨り身の女性の場合、同じく玉臺の張華の作に〔情詩五首之一〕君子尋時役。幽妾懷苦心。初爲三載別。於今久滯淫。〔文選五五陸機演連珠五十首之三十一〕臣聞遯世之士。非受匏瓜之性。幽居之女。非無懷春之情（李注 禮記曰。幽居而不淫。漢書〔四五〕劓通曰。婦人有幽居守寡者）。

不倦 〔左傳襄公二十六年〕古之治民者。勸賞而畏刑。恤民不倦。賞以春夏。刑以秋冬。〔文選五三嵇康養生論〕飲食不節。以生

百病。好色不倦。以致乏絕。〔杜甫奉酬嚴公寄題野亭之作〕謝安不倦登臨賞。阮籍焉知禮法疎。

賞 〔文選二六謝靈運登江中孤嶼詩〕江南倦歷覽。江北曠周旋。

表靈物莫賞。蘊眞誰爲傳。〔三〇謝朓和伏武昌登孫權故城詩〕幽客滯江皋。從賞乖纓綬。〔吳均發湘州贈親故別三首之三〕流瀕方繞繞。落葉向紛紛。無由得共賞。山川間白雲。この賞は、六朝半ば以降に顯著となる自然鑑賞をさすであろう。小尾郊一「中國文學に現われた自然と自然觀」（岩波書店）二章六節參照。

2 秋暑 義山以前の用例未見。秋熱ならば〔杜甫雨詩〕亢陽乘秋熱。百穀皆已棄。〔白居易秋熱詩〕西江風候接南威。暑氣常多秋氣微。

賞 助字辨略四に、戰國策高誘注により、「欲也」という訓を載せる。なお王鏐「詩詞曲語辭例釋」四八頁には唐詩における用例が多く引かれるが、義山の本詩もとよりあげられ、前二聯は「意謂欲招友人游賞而未至」と釋される。

招邀 〔杜甫觀作橋成還呈李司馬詩〕衰謝多扶病。招邀屢有期。〔李白寄上吳王三首之三〕灑掃黃金臺。招邀青雲客。〔白居易崔玄亮墓誌銘〕公濟源有田。洛下有宅。勸誨子弟。招邀賓朋。以山水琴酒自娛。有終焉之志。いづれも字義通りマネキムカウの意。

義山の別の七律〔韓同年新居餞韓西迎家室戲贈³⁹⁵〕雲路招邀廻彩鳳。天河迢遞笑牽牛。および〔元稹和樂天招錢尉章看山絕句〕碧落招邀閑曠望。黃金城外玉方壺。これら二例は、あるいは逍遙

に通ずるか。「辭通」逍遙の條には普通の同義語として招邀をも載せ、文選司馬相如上林賦「招邀乎懷伴」を用例とする。だが文選以下の諸本を検すると、文選八は「消搖」、史記一一七は「招搖」、漢書五七上は「消搖」と、招邀には作らない。待考。

3 竹碧 「孟郊陪侍御叔游城南山墅詩」松氣清耳目。竹氣碧衣襟。「白居易七月一日作」橋竹碧鮮鮮。岸莎青靡靡。義山の類似の用例として「李肱所遺畫松詩書兩紙得四十韻560」重蘭愧傷暮。碧竹慙空中。

悵望 「說文一〇下」悵。望悵也。義山の愛用語の一。集釋稿(一)碧城152注、本誌五四册四〇三頁、集釋稿(三)銀河吹笙259注、本誌五六册三一八頁參照。

4 池清 「玉臺新詠二傳玄秋蘭篇」秋蘭蔭玉池。池水清且芳。「韓愈詠雪贈張籍詩」座暖銷那怪。池清失可猜。「劉禹錫題壽安甘棠館二首之一」公館似仙家。池清竹逕斜。

寂寥 集釋稿(一)無題366注、本誌五三册六五三頁參照。

5 露花 「劉孝威採蓮曲」露花時濕釧。風莖乍拂鈿。「孔德紹登白馬山護明寺詩」露花疑濯錦。泉月似沈珠。「張說別漣湖詩」露花香欲醉。時鳥囀餘音。

裏濕 用例未見。

6 風蝶 「梁簡文帝詠蛺蝶詩」復此從風蝶。雙雙花上飛。「杜甫江亭送眉州辛別駕昇之詩」沙晚低風蝶。天晴喜浴鬼。

嬌饒 「玉臺新詠一宋子侯董嬌饒詩」あり。藝文類聚八八、樂

李義山七律集釋稿(五)

府詩集七三、みな同じく饒に作るが、また嬌とも書く。「張說傷妓人董氏四首之一」董氏嬌饒性。多爲窈窕名。

「抱朴子自敘」洪者。君之第三子也。生晚。爲二親所嬌饒。不早見督以書史。「杜牧屏風絕句」斜倚玉窓鸞髮女。拂塵猶自妬嬌饒。張相詩詞曲語辭匯釋一饒四參照。

7 此地 このことが男女の離合に關する、特殊な色彩を持つ場合として義山詩になお一例、「曲池132」從來此地黃昏散。集釋稿(四)本誌五七册六九九頁參照。

攜手 「詩邶風北風」北風其涼。雨雪其雱。惠而好我。攜手同行(鄭箋 性仁愛而又好我者。與我相扶持。同道而去)。

(a)きわめて親密な交友關係の表現。「古詩十九首之七」昔我同門友。高舉振六翮。不念携手好。棄我如遺跡。「杜甫與李十二白同尋范十隱居詩」醉眠秋共被。携手日同行。「白居易夢微之詩」夜來携手夢同遊。晨起盈巾淚莫收。

(b)きわめて親しい男女の仲をいう。「文選二三阮籍詠懷詩十七首之四」携手等歡愛。宿昔同衣裳。願爲雙飛鳥。比翼共翱翔。「樂府詩集七六携手曲解題」携手曲。梁沈約所制也。樂府解題曰。携手曲。言携手行樂。恐芳時不留。君恩將歇也。「李白鳳凰曲」羸女吹玉簫。吟弄天上春。青鸞不獨去。更有携手人。「元稹曉將別詩」行人帳中起。思婦枕前啼。：將去復携手。日高方解携。

兼 俗語の助字として與と同様に用いられる場合がある。「杜甫又呈寶使君詩」日兼春有暮。愁與醉無醒。「父母恩重經講變文」

洗浣寧辭寒與熱。抱持不憊苦兼辛（敦煌變文六八二頁）。〔歡喜國王緣〕受命豈論年與月。歌娛寧有是兼非（敦煌變文七七八頁）。

不自聊 〔楚辭招隱士〕歲暮兮不自聊（王逸注 中心煩亂。常

含憂也）。蟪蛄鳴兮啾啾。〔左芬離思賦〕驚寤號眺。心不自聊。泣漣流兮。〔張夫人柳絮詩〕那用持愁翫。春懷不自聊。

* * *

0 連作の第二首だが、何焯・紀昀・馮浩はもとの詩題が失われたといい、森槐南も馮浩をそのまま受ける。馮氏らにヒントを與えたのは統鑑の編排で、五古の卷に125・124の順に「無題」兩篇が並ぶが、確かに連作とされていない。だが失題説の根據は兩篇が内容的に結びつきにくい、という一點のみであらう。

1 人知れず深い深い思いを秘める孤獨な男は、つれづれなるままに、ただひたすら倦きもせず自然の風物を鑑賞しつつける。幽人は張華の詩をふまえ、相手のいない男と解される。その男が作者自身なのか否かの真相は、無題という詩題によって注意ぶかく遮閉されている。

2 秋であるのに暑氣のまだ去らぬ時節だが、とにかく人をさそいたい、呼びよせたいと願う。

3・4 周囲の情景——竹の碧々とした姿を前にすれば、ますますわが胸は痛み、そして痛みつつ眺めやるしかなく、池の清らかにすんだ水に對しては、なおさら一層寂寥感がこみあがる。

5・6 そうした情景のなかに點綴される花や蝶、本來ならば心を

浮き立たせるものたちなのだが。露の置いた花はずうっと涙にぬれっぱなし。風にまう蝶もむりに愛らしさをふりまくように見える。いとわしい。空しい。

7・8 ここで、ほかならぬこの地で、もしも二人がびったりそえたなら、あなたといっしょにどんなにか楽しいだろうに。8句不自聊は、屈復および鈴木（「豈不自聊の意」）によって反語によむ。反語にせぬならば「如シ攜手スルトモ、君ト自ラ聊セズ」となるが文脈からすればやはり落着きが惡すぎる。

第一首を文字通り少女へのオマージュとした注釋者、陸鳴泉と姚培謙と鈴木は本篇もまた女性に寄せる詩と解する。要するに連作の兩篇ともに艶詩と考えれば特に問題なく、無題を失題と改題せずともすむ。ただし、兩篇ともに同一の女性が對象であるのかとか、その類いのことは詩篇解釋者の守備範圍外であらう。4句尤を馮浩本が「猶」とする根據は不明。本篇は、馮浩のみ大和二年に係年する。

（中原健二）

無題 139

紫府仙人號寶鏡 紫府の仙人 寶鏡と號す

2 雲漿未飲結成氷 雲漿未だ飲まざるに 結びて氷と成る

如何雪月交光夜 如何ぞ雪月 光を交うる夜

4 更在瑤臺十二層 更に瑤臺十二層に在るや

校

0 唐詩類苑一三八（人部閨情類）

3 雪 高麗本校注「一作雲」

夜 高麗本「後一作夜」

韻

下平十六蒸（氷）十七登（鏡・層） 同用

*

吳喬

極其歎羨。未有怨意。疑是與阿侯90玉山165昨夜星辰111同時作。

朱彝尊

古人游仙詩。多是寓言。故此不曰游仙而曰無題。然其意不可曉。

何焯

〔評本〕小馮（馮班）云。如此寫艷。真成上格。○狀白者。無以

逾此。

姚培謙

此言所思之無路自通也。

屈復

在昔仙人相見。方欲一飲雲漿。忽已成冰。然猶相近也。乃今雪月之夜。更隔十二層之瑤臺。遠而更遠矣。

程夢星

此當爲娶王茂元女時作。蓋却扇之流也。起句。比之如仙。次句。

李義山七律集釋稿（五）

待其合盃。三句。敘其時景。四句。欲引而近之矣。

紀昀

〔詩說下〕問紫府仙人一章。于所分無題五種屬何種。曰。此卽洛神賦所云歎姬媧之無匹。嗟牽牛之獨處。求之不得。亦寓言也。故四家曰。總是不得見之意。午橋以爲王氏却扇之作。未免武斷矣。

〔評本〕此亦寓言。午橋以爲王氏卻扇之作。武斷甚矣。

馮浩

新書傳。綢爲承旨。夜對禁中燭盡。帝以乘輿金蓮華炬送還院。吏望見以爲天子來。及綢至皆驚。可爲此首句類證也。時蓋元夕。在綢家候其歸而飲宴。故言候之久而酒已成冰。當此寒宵。何尙不卽歸乎。卽下章之昨日369也。紫府字屢見古書。今引以見內職之意（《年譜大中四年》）令狐綢作相。商隱屢啓陳情。不之省。

張采田

〔會箋〕通首寫元夕之景。雲漿未飲結成冰。卽（調山402）一杯春露冷如冰也。與上首402一時情事。前書此夜。（《調山詩會箋》）山卽義山自謂。此暗記令狐來謁事也。言我方欲就彼陳情。而不料其匆匆竟去。徒令杯酒成冰。所以有水去雲迴之恨也。：馮氏謂義山往謁令狐。語妙全失）

〔辨正〕此篇寓意亦未詳。馮氏謂指令狐。其說太晦。細玩詩意。並無感慨。與令狐諸篇。迥不相類。未敢附會也。

近代注釋

〔森槐南〕下卷三八七頁。〔鈴木虎雄〕七〇頁。〔劉若愚〕一〇七

七〇九

頁。「山之丙正彦」一〇九頁。

* *

1・2 「抱朴子內篇二〇祛惑」河東蒲坂有項舅都者。：曰。在山

中三年精思。有仙人來迎我。共乘龍而昇天。：及到天上。先過紫府。金牀玉几。晃晃昱昱。眞貴處也。仙人但以流霞一盃與我。飲之輒不飢渴。「薛道衡老氏碑」既而鍊形物表。卷迹方外。蜺裳鶴駕。往來紫府。金漿玉酒。讌衍清都。參日月之光華。與天地而終始。

1 「庚信道士步虛詞十首之七」五香芬紫府。千燈照赤城。「羊士諤上元日紫極宮門觀州民然燈張樂詩」山廓通衢隘。瑤壇紫府深。燈花助春意。舞綬織歡心。馮浩、張采田のいうように元宵の景による發想の可能性がある。

紫府 「抱朴子內篇一八地眞」昔黃帝東到青丘。過風山。見紫府先生。受三皇內文。以劾召萬神。「十洲記」長洲。一名青丘。

：又有風山。恒震聲。有紫府宮。天真仙女。遊於此地（雲笈七籤二六）。「無上祕要二三界官府品」紫府宮 右在青丘之左風山上。天真神仙玉女遊觀。：右出洞眞經及道迹經。

「劉孝綽酬陸長史倕詩」舒雲纓紫府。標霞同赤城。「韓翃贈別華陽道士詩」紫府先生舊同學。腰垂彤管貯靈藥。

仙人 女性をさす場合がある。「李白玉眞仙人詞」玉眞之仙人。時往太華峯。：幾時入少室。王母應相逢（蕭士贇曰。按唐史。玉眞公主。字持盈。：天寶三載上言曰。：願去公主號。罷邑司。歸

之玉府。：窃意此詞必公主出家時。時賢皆有詩以詠其事。仙人褒稱也）。「集仙傳」黃觀福者。雅州百丈縣民之女也。：謂父母曰。女本上清仙人也。有小過。謫在人間。年限既畢。復歸天上。：即唐麟德年也（太平廣記六三黃觀福條）。

寶燈 「朱鶴齡本引道源注」佛有寶燈之名。神仙無此號。然佛亦稱金仙。故可通用。「馮浩注」按佛經。屢稱仙人。則古仙佛同稱也。「元魏菩提流支譯佛說佛名經八」東方世界名寶幢。遠離諸垢妙莊嚴。彼處自在寶燈佛。於今現在彼世界。南無東方自在寶佛（正藏一四册一五九頁中）。佛名經は唐代後期ではよく知られた經典であつたらしい。「白居易戲禮經老僧詩」香火一爐燈一盞。白頭夜禮佛名經。「又吹笙內人出家詩」道場夜半香花冷。猶在燈前禮佛名。「據言一〇海敍不遇條」張倬者。東之孫也。常舉進士落第。捧登科記頂戴之曰。此即千佛名經也。

字義通りきらきら輝く佛前の燈明をいう例としては「江總燈贊」寶燈夜開。影偏花臺。：珠懸色並。月恥光來（藝文類聚七六內典）。さらに元宵に關する例では「崔液上元夜六首之二」神燈佛火百輪張。刻像圖形七寶裝。影裏如聞金口說。空中似散玉毫光。「又之三」鵲鵲樓前新月滿。鳳凰臺上寶燈然。

2 「陸機苦寒行」渴飲堅冰漿。饑待零露餐。「杜甫鄭駙馬宅宴洞中詩」春酒杯濃琥珀薄。冰漿碗碧碼碯寒。「孟郊答盧仝詩」日劈高查牙。清稜含冰漿。前古後古冰。與山氣勢強。

雲漿 (1)「漢武故事」(帝)請不死之藥。母曰。太上之藥。有中華

紫蜜。雲山朱蜜。玉液金漿。其次藥有五雲之漿。風實雲子。玄霜絳雪。〔庚信溫湯碑〕仲春則榆莢同流。三月則桃花共下。其色變者。流爲五雲之漿。其味美者。結爲三危之露。(2)〔洞冥記二〕東方朔謂武帝曰。臣至東極。過古雲之澤。其國常以雲氣占凶吉。若有喜慶之事。則滿室雲氣。五色照人。著於草樹。皆成五色露。露味皆甘。帝曰。古雲五露可得否。…(朔)乃東走。至夕而還。得玄白青黃露。盛以青琉璃。各受五合授帝。帝徧賜羣臣。其得之者。老者皆少。疾者皆除也。(3)〔抱朴子內篇一一仙藥〕雲母有五種。…五色並具而多青者。名雲英。宜以春服之。五色並具而多赤者。名雲珠。宜以夏服之。五色並具而多白者。名雲液。宜以秋服之。五色並具而多黑者。名雲母。宜以冬服之。但有青黃二色者。名雲沙。宜以季夏服之。晶晶純白。名磷石。可以四時長服之也。服五雲之法。或以桂葱水玉化之以爲水。或以露於鐵器中。以玄水熬之爲水。或以硝石合於筒中埋之爲水。或以蜜搜爲醅。或以秋露漬之百日。韋囊挺以爲粉。或以無顛草梲血合餌之。服之一年。則百病除。三年久服。老公反成童子。五年不闕。可役使鬼神。入火不燒。入水不濡。踐棘而不傷膚。與仙人相見。…又云。服之十年。雲氣常覆其上。服其母以致其子。理自然也。

以上のうちで(2)は或いは(1)と同一物か。(3)に従うならば雲母の漿をさすことになるが、記述の内容がリアルすぎて、ここにはややそぐわぬようである。なお(2)の類似品として〔拾遺記一炎帝神農〕奏九天之和樂。百獸率舞。八音克諧。木石潤澤。時有流雲灑

液。是謂霞漿。服之得道。後天而老。

唐詩の用例は〔楊巨源石水詞二首之一〕知共金丹爭氣力。一杯全勝五雲漿。〔王建宮詞〕藥童食後進雲漿。高殿無風扇小涼。〔白居易早夏遊平原廻詩〕療飢兼解渴。一盞冷雲漿。〔劉禹錫和令狐相公謝太原李侍中寄蒲桃詩〕醞成十日酒。味敵五雲漿。

結成氷 〔晉書七二郭璞傳〕上疏曰。…故宋景言善。熒惑退次。光武寧亂。呼沓結氷。〔孟郊旅行詩〕楚水結氷薄。楚雲爲雨微。

〔又納涼聯句〕仰懼失交泰。非時結氷雹。

結成の成は、就也(説文)、畢也(儀禮鄭注)などの訓が示すように、動詞のあとに付屬して、動作の結果あるいは完成を示す補助動詞的なことばであり、時には純然たる助字とみなすべき場合がある。〔茂陵300〕6句参照、集釋稿(三)本誌五六冊三四〇頁。ここではまだ助字とはいえない。〔孟郊送黃構擢第後歸江南詩〕澹澹滄海氣。結成黃香才。

3・4 類似的構造をもつ義山の七絶二首〔柳142〕曾逐東風拂舞筵。樂遊春苑斷腸天。如何肯到清秋日。已帶斜陽又帶蟬。〔曼倩辭110〕十八年來墮世間。瑤池歸夢碧桃閑。如何漢殿穿針夜。又向窗中覩阿環。

雪月 用例未見。

交光 用例未見。

4 崑崙山にあるという、十二の樓あるいは城など、幻想的な宮居の奥深く住む女性は義山の愛用のイメージ。〔代應二首之一133〕離

鸞別鳳今何在。十二玉樓空復空。〔無愁果有愁曲北齊歌376〕秋娥點滴不成淚。十二玉樓無故釘。〔月夜重寄宋華陽姊妹381〕偷桃竊藥事難兼。十二城中鎖彩蟾。〔日高453〕水精眠夢是何人。欄藥日高紅髮髻。飛香上雲春訴天。雲梯十二門九關。そして「碧城十二曲闌干」〔集釋稿(二)本誌五四冊三九二頁參照〕。

更在 〔李益夜上西城聽梁州曲二首之二〕金河戍客腸應斷。更在秋風百尺臺。更は、詩語解上にいう「改端(キワタテ、イフ)之辭」であり、もしそれが一層強調されれば助字辨略四に「更、改圖也。與前義違、故得爲反也」というように「反也」の訓が生じる。

瑤臺 離騷や呂覽に見える、輝く寶石づくりの高臺で美女がその上にいる。〔楚辭離騷〕望瑤臺之偃蹇兮。見有娥之佚女(王逸注呂氏春秋曰。有娥氏有美女。爲之高臺而飲食之)。ただし呂氏春秋六の原文では「季夏紀音初」有娥氏有二佚女。爲之九成之臺。飲食必以鼓。

〔玉臺新詠三陸機前緩聲歌〕遊僊聚靈族。高會層城阿。…北徵瑤臺女。南要湘川娥。また寶石の繁爛たる光彩からの連想で雪月と結ぶ例が多い。〔蘇頌夜發三泉即事詩〕北林夜鳴雨。南望曉成雪。…宛若銀嶺橫。復如瑤臺結。〔錢起省中對雪詩〕萬點瑤臺雪。飛來錦帳前。〔李白古朗月行〕小時不識月。呼作白玉盤。又疑瑤臺鏡。飛在白雲端。〔又清平調詞三首之一〕若非羣玉山頭見。會向瑤臺月下逢。ここの瑤臺はまた次注の拾遺記をも兼ねる。

十二層 〔拾遺記一〇崑崙山條〕崑崙山者。…上有九層。…第九層山形漸小狹。下有芝田蕙圃。皆數百頃。羣仙種藕焉。傍有瑤臺十二。各廣千步。皆五色玉爲臺基。

* * *

無題といえはまず寓意を疑う舊注の側では、その否定者は少數で、何焯の他には王氏却扇説をとる程夢星のみ、これも寓意説の紀昀から「武斷」と批判されている。吳喬・馮浩・張采田辨正は令狐綯への訴えと定め、朱彝尊・張氏會箋は寓意未詳という。姚培謙と屈復の立場は不明。だが、確證なしに寓意を斷ずるのも等しく「武斷」ではないかとの感はここでも否み難い。

近代の諸家では對照的に、森が躊躇しつつ馮浩に従うほか、鈴木・山之内・劉、みな女性の主人公について第三者(話し手)の口から語られた作とみなす。

1・2 俗界からは手もとどかぬ紫の府宮に身を置く仙女は、またきらめく寶玉のような燈の聖者ともよばれている。凍てつくような澄明な宮殿の一角にただひとり。眼前に置かれた五色の雲の漿は、口もつけぬうちに忽ち氷りついてしまう。2句、寓意説では仙人の來降を待つ間に氷ったとし、劉若愚もこの點は同じ。

3・4 一體なにがゆえに、雪と月の光の交錯するすばらしいこの夜——馮・張の説では元宵節の夜——に、ことさらに遙かなる十二層の玉のうてなの高みに坐しているのだ。

劉若愚は「仙人」は女道士(義山と關係のあった)の可能性あ

りというが、果して作者の實生活に登場した女性なのかは今更確認できるはずもない。實のところ艷情の作かどうかさえ定かではない。「現實から遠く逆立して完結したこの幻想の表現世界」(山之内)と受けとっておけばそれで十分である。ただ、山之内もみとめるように、義山は確かに「雪月交光」の場に令狐綯を置いて歌うことがあるので、この詩の場合その點を考慮する餘地はあろ

う。また冒頭の紫府の語には帝居への連想が常に働き(六六九頁参照)、寓意説を生む要因となるのかもしれない。3・4句の高麗本の異文は誤植によるものだろう。馮浩は大中四年(八五〇)、張采田は同三年に係けるが、安徽師大年表では愼重に不編年。

(横山 弘)